
極東戦記

ATD-X

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

極東戦記

【Nコード】

N4037S

【作者名】

ATD-X

【あらすじ】

時に西暦2012年民主党は政権与党から転落。自民党に政権が戻った。

2013年、憲法9条を改正した。2014年政治家の汚職情報が次々と公開される。そして2015年・・・

七月三十一日、約一週間前に起きた大規模な森林火災によりロシア極東管区がシベリア共和国として独立。八月五日経済水域内を犯したとして日本国籍の漁船を攻撃。日シ間で緊張が高まり翌日海上自衛軍とシベリア海軍が交戦状態に入りついに日本とシベリアは戦争

状態に入った。

この小説は主に陸自サイド、海自サイド、空自サイド、政治サイドに分かれていて、主人公が複数居ます。そして、時間が飛びます。それと年表がほぼ軍事のみとなっております。後、モブキャラ一人一人に名前があります。そういうのが苦手な人はブラウザを消すか、戻るを押してください。それと、この作品はフィクションです。実在の人物、国家、組織等とは一切関係ありません。

序章2012年～2014年の年表（前書き）

この年表は度々改定されます。

追記、11／19 諜報機関の記述を修正。さらに、F－Xの記述を修正。F－2の記述を削除。11／24 F－Xの記述をEF－2000に戻し、日本をJSF開発計画に参加させる。何度も訂正してすいません。

序章2012年～2014年の年表

西暦2011年

12月5日TPPの参加を拒否。

11日、F-XをEF-2000に決定。タイフーンJの名称で調達することを決定。

12日JSF計画に二百億円相当の資金援助をする。さらに秘密裏に開発に参加する。

西暦2012年

1月13日、2011年に東日本大震災での対応をはじめ在日朝鮮人からの違法献金等、次々と失態を犯した政権が崩壊。

さらに政権崩壊の3ヶ月前に、民主党の政策がこのまま続けば日本が重大な損失をする恐れがある事が国民に知れ渡った。最初は誰もこの発表に見向きもしなかったが、しだいに現在の生活の崩壊の恐れも有ると知り民主党叩きが徐々に発生。マスコミも便乗し民主党は政権与党から転落。

16日、前回の総選挙からまだ、3年しか経っていないのに異例の総選挙を開催。自民党が再び政権をとった。

28日、C02の25%の削減をやめ、新たに5%の削減枠に設定。30日、中期防衛力整備計画が民主案から改自民案になった。改自民案とは2011年の中期防衛計画で、

2011年度に防衛力を民主案で整備したので予算が足りなかったので、若干改良した自民案の名称である。

2月5日、武器輸出三原則見直しにより、はるな型護衛艦ひえい、あぶくま型護衛艦全隻、しらね型護衛艦全隻を退役させ海外に輸出

することを決定。さらに89式小銃、高機動車等の海外への輸出を決定する。

9日、排他的経済水域内で資源の探索行為、及び採掘の開始を5月から行うことを決定。

26日、子供手当を廃止。

17日、メタンハイドレード消費型エンジン（以下メ型エンジンと称する）の開発を決定。

3月1日、19500トン型護衛艦が起工。同艦を2隻就役させることを発表。

15日、あきづき型護衛艦1番艦あきづきが就役。第1護衛艦隊に配備される。

18日、しらね型護衛艦全隻を台湾に輸出。

23日、はるな型護衛艦ひえいとあぶくま型護衛艦1～3番フィリピンをに輸出。

28日、あぶくま型護衛艦4～6番艦をブルネイに輸出。

4月13日、あきづき型護衛艦2番艦、てるづきが進水。

17日、第一師団を首都防衛集団に改変する。

25日、内局の運用企画局を廃止し統合幕僚長への一本化を開始。

5月4日、今年度分のNBC偵察車の配備を開始。

15日、今年度分の10式戦車の配備を開始。

20日、排他的経済水域内の資源の探索を開始する。

30日、日本の排他的経済水域内でメタンハイドレードが大量に発見される。

6月1日、メ型エンジンの開発を開始。

3日自衛隊情報保全隊を強化し、諜報機関IMIJ（Institution to Manage the Information）

n o n J a p a n。訳日本に関する情報を管理する機関）を設立。

5日各政治家の汚職を調べ始める。

6日、NBC偵察車の配備を完了。

11日、メタンハイドレード採掘施設を建設

16日、メタンハイドレードの採掘に中国が反発。各地でデモが発生するも、日本政府は何の問題もないとして建設を続行。

7月3日、AH-Xの選定を開始。

10日、戦闘機、早期警戒管制機、戦車、装甲車、火炮、自衛艦等の定数増加を決定。

20日、音響測定艦を起工

30日、陸海空各自衛隊の兵力を増強を開始する。

8月8日、AH-XがOH-1の重武装型に決定。

19日、メタンハイドレードの採掘施設が完成。

9月6日、度重なる中国のデモによりチャイナリスク回避のため、

一部を除く日系企業が生産拠点を東南アジアに移す。

18日、OH-1の重武装型の開発を開始。

23日、メタンハイドレードの採掘を開始

10月2日、今年度分の10式戦車の配備を完了する。

9日、第12旅団を東北方面隊隷下に移管。

14日中国人観光ビザ緩和を廃棄

11月4日内局の運用企画局を廃止し統合幕僚長への一本化を完了する。

15日、あきづき型護衛艦3番艦すずつきが進水

23日、あきづき型護衛艦4番艦はつづきが進水

12月4日、退役した81式地对空誘導弾と高機動車をイラクに給与する。

5日、民主時代の政策の見直しを始める。

25日、東部方面隊を廃止し陸上総隊司令部に新編

2013年

1月9日、憲法の改正を発表、国民投票で実施するかどうかを決める。

10日、憲法9条を改正する。これに伴い自衛隊は自衛軍に名称を変更する。

11日、自衛隊法、有事法、国民保護法等が改正される

12日、スパイ防止法が施行される。

13日、各自衛艦に近接防空火器フランクスの装備を開始させる。

14日、憲法改正、自衛軍の編成を変える。

2月9日、ましゅう型補給艦を2隻追加発注する。

11日、戦闘能力向上のため、陸自の編成を変える。

18日、中国ビザ緩和を廃止。

28日、近接防空火器の装備を完了させる。

3月3日、19500t型護衛艦が進水。1番艦をほうしょうと命名6日、諜報機関の設立を決定。

4月12日、てるづきが就役。第2護衛艦隊に配属される。

17日、ましゅう型補給艦起工。

5月30日、ほうしょう型護衛艦2番艦が起工。

31日、南西航空混成団を第九航空方面隊に編成。第三航空方面隊隷下の第八飛行隊を第九航空方面隊に移転配備。第七航空方面隊隷下の第三〇二飛行隊を第三航空方面隊に移転配備。

6月6日、地方隊のためにはやぶさ型ミサイル艇を追加建造を決定。
12日、在日外国人の通名を廃止。

31日、巡航ミサイルの開発を決定。

7月29日、空自の六個高射郡全てにPAC-3の配備を開始。

30日、タイフーンJの開発が間に合わないために、無改造のタイフーンの生産を開始する。

8月21日、ましゅう型補給艦3番艦起工

24日、ましゅう型補給艦4番艦起工。

9月15日、XASM-3実射試験。

24日、OH-1の重武装型の試作が完成。

10月1日、音響測定艦こだまが進水。

15日、はやぶさ型ミサイル艇の追加建造を急ピッチで開始

11月13日～20日、はたかぜ型護衛艦、あさぎり型護衛艦、はつゆき型護衛艦を退役させ、輸出する事を決定。

29日、航空自衛軍第五航空方面隊にタイフーン装備の第二〇二飛行隊を再編する。

12月23日、すづつきが就役。第3護衛艦隊に配属。

28日、はつづきが就役。第4護衛艦隊に配属。

29日、輸出した護衛艦の後継艦を2017年から就役させることを決定。

2014年

1月2日、OH-1の重武装型をAOH1の名目で調達を開始する。

23日、はつゆき型護衛艦3～7番艦をマレーシアに輸出

2月15日、F-4の運用スケジュールの見直し。これにより退役が2016年になる。

19日、あさぎり型護衛艦2～4番艦をフィリピンに輸出

3月18日、ほうしょう型1番艦が就役。第2護衛艦隊に配属される。

27日、海上自衛隊那覇地方隊を新設することを決定。

4月19日、はつゆき型護衛艦8～11番艦を東ティモールに輸出。

27日外国企業による水資源から半径35キロの土地売買を禁止する法案を可決。

5月5日、ATD-Xが初飛行。

24日、巡航ミサイルの開発を開始。

6月7日、ほうしょう型2番艦が進水。りゅうじょうと命名される
22日、あさぎり型護衛艦5～8番艦をインドネシアに輸出。

7月13日、はたかぜ型護衛艦の後継のため、新型イージス艦の調達を決定。

27日、PAC-3の配備を完了。

8月、新型迫撃砲、及び榴弾砲の開発を決定。

21日、はたかぜ型全艦をタイに輸出。

9月26日、ましゅう型3番艦補給艦進水。しのめと命名。

28日、ましゅう型補給艦4番艦進水。じゅんさいと命名

10月17日、音響測定艦こだまが就役。

25日、はやぶさ型ミサイル艇の追加建造を完了する。

11月29日、メ型エンジンの試作が完成。

30日、航空自衛軍那覇基地へのF-2配備を完了。

12月11日、輸出した護衛艦の後継となる艦の予算を要求。

24日、諜報機関IMIJが設立当初から調べた各政党の汚職情報や関連組織の汚職情報が次々と発表され政治家が大量に検挙され、関連組織は殆ど崩壊する。密入国した犯罪者や住民を強制送還させた。

この検挙では人員が足りず急遽自衛軍が動員された。

この際に創造学会や朝鮮系組織、暴力団の一部において抵抗が発生。軽傷二人、重傷四人、死亡六人。

軽装甲機動車二台、高機動車一台、パトカー三台。の損害が出る。後に「忍者からのクリスマスプレゼント」と呼ばれる。

2015年ここから物語が始まる。

序章2012年～2014年の年表（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第一話「政変」(前書き)

政治的におかしいところがあると思いますが気にしないでください。

第一話「政変」

2015年1月20日

PM6:00

永田町自由党本部。

??? 「「「ばんざあゝい。ばんざあゝい。」」」

??? 「どうしてこうなった?。」

今呟いたのは俺こと霧本雄一郎、自分で言うのもなんだが若干30歳の青二才の若手政治家だ。

とりあえず現在の政治情勢を簡単に説明しよう。IMIJが発表した各政党の汚職情報により日本の政党はすべて解散し、政治は混乱状態に陥った。

時の総理大臣はできるだけ混乱を避けるために緊急で政党を六つ結党する法律を作った。

そして作られた政党が俺の所属する自由党。そして民治党、衆民党、改進黨、太陽党、国民党だ。

んで昨日総選挙が開催されて俺たち自由党が当選、政権与党になったんだ。だからこんなに万歳を言っているんだ。だが、なぜか俺が官房長官に選ばれた。やはり総選挙の宣伝方法や政策に提案しまくったのが拙かったか。いや、俺としてはまだなりたくなかったんだがな。俺はこの国が好きだ、そして日本にとってこの政党は重要なものであることだと俺は推測している。だから俺はこの政党を当選させようとした。だが下手に意見すると確実に目立ち責任がでかそうな要職に着いちまう。だから地味目に意見していたんだがやはり党首の目はごまかせなかったか。ちなみに党首の名前は麻生士郎だ。いわゆる真正保守派と呼ばれる人々の代表みたいな人物で俺の憧れ

の人だ。

「???」霧本さん。マスコミからまた取材依頼が来てますよ。」

こいつは俺の秘書の吉月明^{よしづきあきら}。一言で言うなら冷静沈着な天然ボケだ。関係ないが時々女に間違えられる。

霧本「うげ、またか。」

吉月「またですよ。」

ここのところマスコミの取材が結構な頻度でくるんだ。まったく若い官房長官がそんなにいいか。麻生さんの取材はどうしたんだよ。

吉月「確かこれで4回目の取材ですね。でもこれくらいで参っているようじゃこの先やっていけませんよ?。大体後3回以上残っていますよ。取材。」

霧本「なんてこったい。ま、たった3回だ。ちゃっちゃと終わらせるぞ。」

吉月「あ、すみません、間違えました。12回ですね。」

霧本「・・・・・・・・・・・・・・・・な・・・・・・・・ん・・だと。」

第一話「政変」(後書き)

ご意見、ご感想お待ちしております。

第二話「交渉」(前書き)

知っている人も居ると思いますが党首を木村から麻生に変えました。
それと言い忘れましたが実在の人物とは一切関係ありません。

第二話「交渉」

1月21日

永田町自由党本部党首室

＞霧本雄一郎＜

あの後12回の取材をまとめて受けた。なぜ最初の4回もまとめて受けると思うことが思いつかなかったのかはわからんが。

現在党首室にて麻生さんに俺を官房長官に任命させるのを撤回させようと党首室に来室し、頼みこんでいる。ちなみに吉月は先に帰っている。

霧本「麻生さん、頼みますよ。私には荷が重過ぎます。」

麻生「・・・・・・・・・・。」

うわ、だんまりかよ。この空気がどうにも苦手なんだよな。

霧本「大体私みたいな若い政治家よりも他に適任な人がいるはずです。」

麻生「・・・・・・・・・・では、他に誰がいるかね。」

う、そこを突かれると。いや、待てよあの人がいた。

霧本「ほら副党首の安部さんとか。法務大臣になった小泉さんとか。とにかく私には出来ません。」

麻生「・・・・・・・・君は若いのに膨大な知識がある。そしてその知識を使用した知略を張り巡らせた戦略の考案。若さゆえの行動力。僕

はそれらを高く評価している。」

霧本「はあ。」

麻生「それに知ってのとおり先の汚職大量告発のせいでベテランの政治家の大半が捕まった。これからは若い者の時代になるだろう。そして君はこれからの政治に重要な役割を持つと思っている。自分では気づいて無いと思うが君の知識はかなりこの国に貢献できるものがある。そこで僕は責任の重い職に着かせ人を引っ張るの慣れさせようとした。これが君を官房長官の職につかせようとしている理由だ。」

（ふむ、そういう理由があったか。しかしやっぱり。）

と俺が迷っているのを見破ったのか知らないが麻生さんがこう付け足した。

麻生「実はもうひとつあってね、その理由が君は色々な知識を持っているがために、どうにも専門的な応用力や知識に欠けていると思うんだよ。そこで官房長官に成らせてそういうところを鍛えようとしているんだよ。」

成る程、そういう理由もあったか。

霧本「・・・・・・・・分かりました。官房長官の任、お受けしましたよう。」

俺が官房長官の任を引き受けると麻生さんは笑った。

麻生「ありがとう。とりあえず今日は帰っていいぞ。明日から忙し

くなるからな。」

霧本「はい、ありがとうございます。」

そういつて俺は退室した。

午後9時20分

霧本家

霧本「ただいま。」

???「お帰りなさい。今日の官房長官の件どうだった?。」

彼女は俺の妻の霧本陽子。ちなみに旧性は早坂。ちょっと変わって
いるが良妻賢母ないい妻だ。

霧本「ああ、引き受けることになった。明日から帰りが遅くなる。」

陽子「そう。珍しく早く帰ったと思ったら。」

霧本「悪い。」

陽子「いいわよ全然、がんばってね。」

陽子はそう言って陽子は俺の頬にキスをした。

霧本「あ、ああ。ところで子供たちは？」

いきなりのキスに戸惑いながらも答える。

ちなみに子供は4人居る。長男の勇太（11歳）、長女の未来（9歳）、双子の優香と幸助（5歳）だ。

陽子「優香と幸助は寝てるけど勇太と未来はまだ起きてるわ。クスッ、でも不意打ちに戸惑うなんて」

霧本「うるさい。」

とりあえず明日から遅くなるからその分子供たちと遊ぼう。
そう思い俺はリビングへの扉を開けた。

第二話「交渉」(後書き)

やっぱりどうしても年表を修正をしてしまう。どうにかしないとなあ。

ご意見、ご感想お待ちしております。

第三話「空自」(前書き)

今回は航空自衛軍隊員の目線で書いてみました。

第三話「空自」

1月21日

AM 7:00

航空自衛軍第九航空方面隊、那覇基地食堂。

??? 「おい、鷺田。何のニュース見てんだ?。」

鷺田 「おう、空守。おはよう。」

俺の名前は鷺田雄大^{わしだ ゆうだい}。去年に航空教育隊を卒業したばかりの新人パイロットで階級は三等空曹。所属部隊は二〇四飛行隊、第二飛行小隊だ。

今俺に挨拶したのは同期の空守高士^{そらもり たかし}と同じく三等空曹だ。所属部隊は二年前に移転してきた第八飛行隊の第一飛行小隊だ。

鷺田 「ああ、官房長官に就任したやつが若いなと思って。」

空守 「ほんとだ。確かこいつニュースでやってた、霧本何とかじゃなかったっけ?。」

??? 「霧本雄一郎だ。」

そういつてテレビを見ながら現れたのは俺が所属する部隊の隊長のたかだ^{たかだ こうじ}。
高田功治准空尉だ。

鷺田 「あ、おはようございます、隊長。」

高田 「ああ、おはよう。」

まあ、こんな若いやつで大丈夫か少し不安だがまともな判断が出来るのを祈るしかないな。

後、そろそろ交代の時間だ。早く飯食ってさっさと行くぞ。それと空守。綾風がさっきお前を血相を変えて呼んでいたぞ。お前また何かしでかしたんじゃないのか?。」

隊長はニヤリと笑いながら言った。

綾風とは機付長（戦闘機の専属整備士みたいな職。ちなみにパイロットは自分の専用機を持っておらず毎日違う機体に搭乗している。パイロットとの関係を簡単にすると、機付長↓「オーナー」、パイロット↓「雇われ」である。自分の専用機を持ちたいと言うなら機付員を目指すといい。）でむちゃくちゃ真面目な人で有名だ。ちなみにうちの隊長と知り合いらしい。

鷲田「了解。」

空守「うげえ、マジかよ。カリカリしているから、○そみそテ○ニッ○を投げ込んだだけなのに。あだっ!」

この空守と言う男はは普段からいたずらをするというとてもない習性を持っている。

幼少の頃は神社に向けて爆竹を放り込んだとか。

鷲田「お前は少しは自重をしろ!。つかなんつう物を投げ込んでいるんだ!?。ああ、隊長。」

高田「む、何だ?。」

鷲田「これが俺の部屋の前に落ちていたんですけど。」

そういつて俺が取り出したのは隊長宛の飛行教導隊アグレッサの勧誘通知だ。

高田「ああ、それか。なくしたと思ったらそんな所に。ありがとな。」

鷲田「いえいえ。」

高田「おい交代の時間に遅刻するぞ！」

鷲田「やばっ。おい、空守、急ぐぞ。」

空守「了解。」

こうしてまた一日が始まる。

今日も一日がんばりますかな。

第三話「空自」(後書き)

次回は陸自にしようかなと思っています。
ご意見、ご感想お待ちしております。

第四話「陸自」

一月二十一日

午前八時

陸上自衛軍首都防衛集団大宮駐屯地

埼玉県にあるこの駐屯地に訓練を行う部隊、第三小队。
その部隊に俺こと町田耕哉まちだ こうや陸士長は訓練用アスレチックで汗を流していた。

??? 「山崎!。きさまその程度の柵で転ぶのか!!。」

「す、すいません!。」

こいつの名前は山崎大地やまざき だいち。階級は一等陸士。自衛官候補生時代からの俺の相棒だ。ちなみに今叫んだのは土屋竜介つちや りゅうすけ三等陸尉。俺が所属する小隊の隊長だ。

土屋「第三班!。総員腕立て50回!!。」

「「了解!。」」

第三班とは俺が所属している班である。(因みに憲法改正時に自衛軍の編成はかなり変わったので
班員の人数は五、六人が基本だ。)

山崎の失敗により俺を含めた班員が腕立て伏せをはじめる。

山崎「すまねえ。みんな。」

町田「気にするな。班員の失敗は皆の責任でもある。」

班員A「ああ、そうだぞ。」

班員B「ドンマイ。」

班員C「うっかりミスは誰にでもある。」

班員D「次に失敗しなきゃいいだろ。」

山崎「……ありがとう。」

良い仲間を持ったな。俺。

「「「お礼より何か後で何かくれ」」」

山崎「ちょwwwお前ら!。」

町田「安心しろ。俺の○○本を皆に贈呈しよう。」

「「「Y H E A A !。太っ腹!。」」」

土屋「何休んでる!。さっさと続けろ。後町田!。その本について

話が見たい！。訓練が終わったらい！。」

「「了解！」」

町田「隊長！、それは勘弁してください。」

（5分後）

土屋「48、49。あれ、あの本何ページまで呼んだっけ？。そこ！、休むな。」

続ける！。1ページ、2ページ、3ページ・・・」

「「ひい」。鬼が居る！。」」

ちなみにこんな感じの腕立て伏せを現実で陸自はやっているとか。
byATD-X

（さらに5分後）

土屋「48ページ、49ページ、50ページ。よし終了だ。」

「「終わった。」」

なんて長い腕立て伏せだったんだ。おかげで腕が痛い。

土屋「第3班、何やってる！。アスレチックをもう一度一周して来い。」

もし途中で止まったりしたら・・・お前らの部屋を家宅搜索する。」

な、なんてことを言う隊長だ。俺たちの部屋にはたさんの○○があるんだぞ！。

そんなことをされたら○○を解消できない＋書類地獄状態になってしまうではないか。

町田「総員、死ぬ気でやるぞ！」

「「了解！」」

町田「はしれえー！」

「「うおおおおおー！」」

この日、アスレチック訓練で史上最短記録が生まれた。この記録は以後20年間破られなかったそうなの。

「アスレチック訓練終了」

町田「あゝ、つかれた。」

その後何とかアスレチック訓練を最短記録でクリアするという快挙を成し遂げ、現在小休止に入っている。

山崎「水だゝ。」

班員A B 「うゝ。」

班員C D 「あゝ。」

町田「お前らゾンビっぽいぞ。」

そういえば班員の紹介を忘れていたな。

まず班員Aが小銃手の田中大助^{たなかだいすけ}一等陸士。班員Bが選拔射手兼機関銃手の弓川幸太郎^{ゆみかわこうたろう}二等陸士。班員Cが無線手の南優斗^{みなみゆうと}二等陸士。班員Dが対戦車手の西山健太^{にしやまけんた}一等陸士だ。ちなみに俺と山崎は小銃手である。

町田「しかし、副班長がミスるとは、班員に示しがつかんぞ。」

山崎「あゝ（汗）。」

南「あ、そういえば今朝のニュース見ましたか?。」

西山「ニュース?。」

南が今朝のニュースの話をした。確か今朝のニュースは官房長官が若いとかどうか。

南「ほら、官房長官が結構若いといった。」

西山「ああ、そんなニュースやってたな。」

弓川「土屋隊長より若くなかったか?。」

田中「知らん。」

山崎「なあ町田、質問が有るけどいいか?。」

町田「何だ?。」

山崎が質問してきた。

山崎「官房長官って何だ?。」

町田「・・・・・・そこからか。」

そんなことを言った俺だが、俺も実はよく分からん。

西山「俺もよく分からん。」

田中「右に同じ。」

弓川「同じく。」

町田「という訳で、南。説明よろしく。」

南「ええ〜。・・・・・・分かりましたよそんな目で睨まないでください。」

失礼な。睨んでいないぞガンを飛ばしたただけだ。

南「官房長官で言うのは簡単に言うと、内閣の各機関の調整役と報道官ですよ。」

「「へえ〜。」「」

南「ちょっと班長。あんたまさか「それ以上言うとコロス。」・・・・

分かりましたよ。」

よし、口封じ成功。

土屋「小休止終了!。全員集合!。」

町田「ほんじゃ行きますかな。」

「「応!。」」

町田（確か次は射撃だったっけ?。）

そんなことを思いながら集合場所へ向かった。

くおまけく

午後十二時

土屋「おい、町田。」

昼食時に土屋隊長が小隊に所属するすべての班長を連れて声をかけてきた。

町田「はい、なんですか?。」

土屋「お前の〇〇について話がある。」

う、そういえばそんな事言ってた様な。

土屋「お前の〇〇の一部を譲ってほしい。」

町田（ええゝ。そっち!?）「隊長、確か奥さんとお子さんいらっしゃいませんか?。」

土屋「違うな。〇〇は人類の至高なのさ……………」

町田「……………分かりました。今晚に送ります。」

土屋「話が早くて助かる♪。それじゃ。」

こんなんでうちの小隊は大丈夫であろうか。

「第1班〜第6班班長」「え、俺たちセリフなしで終わり!?!」
「」

第四話「陸自」(後書き)

次回は海上自衛軍を描きたいと思います。それでは。

第五話「海自」(前書き)

演習描写が難しい。どうにかしないと戦闘シーンで困る事に。
追記六月二十二日、砲雷長、C I CオペレーターA B C、艦長、副
長の表示を変更。

第五話「海自」

1月21日

AM 9・00

海上自衛軍大湊基地護衛艦まきなみ甲板。

松野艦長「出航用意！」

梅城副長「曳柵放せ。」

さて、文中に出ていないが今 曳柵えいさくを外している俺の名前は清水良助すけ、階級は一等海士で第一分隊、いや砲雷科、まあ分かりやすく言うところの艦の甲板要員だな。隣で曳柵を外しているこいつは同僚の巻波孝太まきなみこうた一等海士だ。

松野「左、帽振れー！」

清水「……………暇だ。」

巻波「いや、今帽振ってんじゃん。」

清水「でもなあ。」

副長「総員もどれ。10・00時から訓練を始めるぞ。」

「「了解！」」

AM1000

まきなみ艦橋

松野「対空戦闘用意！」

梅城「対空戦闘！」

松野「70度仰角32に備え。」

同時刻

まきなみCIC

竹本二等海曹「敵ミサイル接近。八十度、二万八千メートル。数は6・・・シースパローの射程に入りました。」

池田砲雷長「シースパロー、攻撃始め。」

竹本「攻撃始め。」

米川三等海尉「2発撃墜。なおも接近。」

池田「落ち着いて狙え。CIWS、主砲発射用意。撃ちー方はじめ。」

青野二等海曹「撃ちー方はじめ。」

同時刻

まきなみ甲板上

清水「なんて事が起きてるんだろうな。」

巻波「何言ってるの?。」

ただいま訓練中の清水だ。ちなみに訓練のシナリオではこの後第1波を迎撃した後、第2波で左舷後部に被弾し、ダメコンをして第3波を迎撃する予定だ。

巻波「あ、CIWSが動き始めた。」

CIWSが作動して、20秒間動き止まった

この艦のCIWS、高性能20ミリ機関砲フランクスは有効射程・対応時間・威力等の理由より能力不足ではないかという懸念があり、同時に機関砲では複数の目標を対処出来ないために建造予定の次期護衛艦にはCIWSにRAMも搭載する話もあるとか無いとか。

清水「よし、早く給弾するぞ。」

巻波「了解。」

俺たちは近くに用意していたファランクスの弾薬が入った弾薬を運び給弾を始めた。

＼跳んで2時間後＼

P M 12 .. 00

まきなみ艦内食堂。

巻波「しかし、大丈夫かな?。」

昼食を食べていると隣で新聞を見ていた巻波が呟いた。

清水「・・・どうした、いきなり?。」

巻波「ほら、この記事。」

そういつて巻波は記事に指を差した。

清水「何々、史上最年少の官房長官就任。先行き不安視する声もあり?。」

巻波「そう、僕が言うのもなんだけどこんな若い官房長官で大丈夫かなと。」

清水「しらんがな。誰が官房長官に就任しようが知ったこっちゃ無い。」

そういうと清水はため息を吐いた。

巻波「まったく、君らしいよ。」

そう言いながら巻波は新聞をたたみどこかへ行った。

第五話「海自」（後書き）

ご意見、ご感想お待ちしております。

第六話「閣議」(前書き)

やっぱ政治は難しい。それではどうぞ。

第六話「閣議」

1月28日

14..35、国会閣議室。

麻生「さて、最後の議題は何だ？。」

現在俺こと霧本雄一郎官房長官は現在閣議に参加中だ。
さっきの議題は「福島原子力発電所の復興関連」だ。

霧本「じゃ、私から。」

俺がそう言い席を立つとこの部屋に居る全員が視線を俺に向けてきた。

.....やべえ、緊張してきた。やはりこの部屋居るやつは法務大臣の小泉新治郎を除き全員が俺より20歳以上上だからか。やっぱ年季か？。

ちなみにこの部屋に居る人物は総理大臣の麻生 士郎、総務大臣の阿部 信三、法務大臣の小泉 新治郎、
財務大臣の森岡正弘、外務大臣の松元忠弘、文部科学大臣の町斑 延孝、厚生労働大臣の長岡 蚩子、
農林水産大臣の城家 実、経済産業大臣の長尾 協、国土交通大臣の今津 博、環境大臣の芳田 泉、
防衛大臣の平沼 健夫、国家公安委員長の仲尾 正治、特命大臣（領土問題対策担当大臣の額賀福士朗、拉致被害者担当大臣の新堂芳隆、金融担当大臣の鷲尾 栄一、消費者及び食品安全担当大臣の石関 孝文）の4人だ。

町斑「どうしたんだ？、早く言いたまえ。」

霧本「す、すいません。」

やばい早く話さなければえっと。

霧本「武器の輸出ですけれども、識字率、及び就学率が低い国には輸出しない、と言うのは出来ないのでしょうか？」

・・・・・・この静寂は何だ!？。

この空気はきつい。誰でもいい発言をしてくれ!。

今津「輸出を制限するからにはそれなりの理由があるはずでしょうね。霧本官房長官?。」

やっと発言が来たか。

霧本「はい、理由は就学率が高ければ少年兵がなくなるのではないか。という考えと、識字率も高ければ民主化に貢献できるのではないか?。という考えからきています。それに教育をおろそかにしている国には未来はありませんからね。」

今津「つまり、君は武器の輸出を君の言う条件で制限すれば識字率などが上がると思っているのですか?。」

霧本「はい、そうです。もちろん学校建設などには我が国が援助しますが。」

森岡「それでは我が国は損だけをするのでは?。」

霧本「いえ、損ばかりではないと思いますよ。長い目で見ればその

国に親日感情が芽生えて親日国になると思いますし、我が国の民生用品などを無償で少数給与すれば我が国の製品の宣伝になると思います。それに資源等の貿易時にこの件である程度融通が利くのではないかというのが私の考えです。」

麻生「成る程、そういう事か。」

といきなり聞き役に徹していた麻生さんが呟いた。

麻生「多数決を執るぞ。」

そして、多数決の結果、賛成十七人、反対ゼロで関連法案が衆議院で提出されることとなった。

第六話「閣議」(後書き)

ちなみに領土問題対策担当大臣は沖縄及び北方領土対策担当大臣の
発展版と解釈してください。

第七話「領空」 (前書き)

空中戦も難しい。

第七話「領空」

二月十日

十六時二十六分

航空自衛軍那覇基地

＞鷲田雄大三等空曹＜

ウウーウウー。

けたたましいサイレンが鳴った瞬間、俺は座っていたソファから立ち上がり走り出した。

そして機体についたあと機体に乗る、異常が無いかチェックした後、僚機とともに出撃し、出撃した後に管制塔と連絡を取り合った

鷲田「カフー4よりハウス《管制塔》。現在高度1万6千フィートを。」

管制塔「ハウスよりカフー4、高度2万フィートまで上昇後2万フィートを維持せよ。」

鷲田「了解。」

管制塔との無線を切った後、まもなく僚機から通信がきた。

「まったく、よくあきないね中国さん。今月に入って何回目だった？。イーグル。」

今無線で俺に話しかけているのは隊長機の尾咲おぎき 舞二まい等空曹。俺の幼馴染でもあり2期上の先輩でも有る。那覇基地の数少ない女性パイロットの一人だ。タックネーム（航空機パイロットが持つ非公式の愛称。特に命名規則は無く、実態は子供同士のニックネームと大差ない。）はTailだ。ちなみにイーグルとは、俺のタックネームだ。

鷺田「知りません。つか、スクランブル中はコールサインで呼べって言われてたんじゃ。」

尾咲「あ、そうだ。この間おいしそうなお店を見つけたんだ。でもお金が無いから一緒に行こ。」

鷺田「無視かよ。金ぐらい自分で何とかしてください。それと俺は行きません。」

尾咲「あ、ひどい。レディに奢らせるつもり？」

鷺田「・・・・・・・・俺は行かないといったはずだが。」

いささか、出撃中なのにずいぶんと緊張感に欠ける会話だと思う人が居ると思うが、これはスクランブル中の緊張をなくすためのものなのだ。

実はもうひとつ有る。それは暇つぶしだ。疑問に思う人が居ると思うが何しろ目標空域に到達するまではほとんど何も無く、そして時間がかかる。しかも戦闘機のコクピットは意外に狭く標準的な射出座席でも幅は約50センチメートルなので軽く体操、なんて事をし

たらうつかりフットペダルや操縦桿に力がかかりとんでもない事になるためにこんな会話をしているのだ。
そうこうしている内に目標が見えてきた。

尾咲「カフー4、機種は何？。」

鷲田「機種はJー10。」

管制塔「ハウスよりカフー隊へ機種の確認は終了したか。」

鷲田「カフー4よりハウスへ。機種はJー10。国籍は中国。数は2機。」

管制塔「了解。対領空侵犯措置を開始しろ。」

鷲田／尾咲「了解。」

俺たちはJー10へ接近した。
まずは尾咲二曹が日本語で警告。

尾咲「こちら日本国航空自衛軍。貴機がこのままの進路で進むとわが国の領空に進入する恐れがある。速やかに進路を変更しろ。」

・・・相手からの応答は無い。
今度は英語で警告した。

「僕には英語能力がありませんので脳内で英語に変換してください
BYATD-X

尾咲「こちら日本国航空自衛軍。貴機がこのままの進路で進むとわが国の領空に進入する恐れがある。速やかに進路を変更しろ。」

・・・やっぱり反応が無い。

今度は中国語で・・・っておい！。

なんだ！？。突然中国軍機が急旋回したぞ。ヤバイ。このままでは後ろを取られる。

尾咲「どうしたっていうのよ！？。いったい！。」

鷲田「知りません！、とにかく後ろを取られたくなけりゃ死ぬ気で振り切ってください！。」

尾咲から通信が入ったが、悠長に通信に答えてる時間は無いので無線を切る。

・・・やはり威嚇射撃をするしかないか。そう思い管制塔に連絡した。

鷲田「カフー4よりハウスへ。ターゲットが突然後ろを取りに来た。威嚇射撃の許可を！。」

管制塔「ハウスよりカフー4へ。相手はまだ発砲してないな？。」

鷲田「していない。」

管制塔「なら発砲は許可できない。そのまま続けろ。」

鷲田「・・・了解。」

(ちっ、ヤバイな。何とかしないと。)

そんなことを考えていると尾方から通信が来た。

尾咲「カフー4、奴らの後ろを取るわよ!。」

鷲田「えっ、発砲許可は下りてませんよ!?!。」

尾咲「いや、あくまで後ろを取るだけよ。その後に警告するわよ。」

鷲田「OK。」

そして通信を切られた。

鷲田「よっしゃ、行くぜ。」

俺は操縦桿を倒しマイナス45度バンクに移り、高度を速度に変える。

そして、フラップを全開にし急旋回。かなりのGが掛かるも何とか後ろを取った。

ふと、尾方空士長のほうを見ると向こうも後ろを取ることに成功していた。

今度は中国語で警告する。

「僕には中国語能力がありませんので脳内で中国語に変換してください」
さいく By ATD-X

尾咲「こちら日本国航空自衛軍。貴機がこのままの進路で進むとわが国の領空に進入する恐れがある。速やかに進路を変更しろ。繰り返す、こちら日本国航空自衛軍。貴機がこのままの進路で進むとわが国の領空に進入する恐れがある。速やかに進路を変更しろ。」

と、中国軍機がやっと反応した。（ただし、バンクだけだが。）そして中国の方へ帰還した。

鷲田「ふう、やっと終わった。」

尾咲「カフー小隊よりハウス。当該機が防空識別線を離れた。」

管制塔「ハウスよりカフー隊。こちらでも確認した。直ちに帰還せよ。」

鷲田／尾咲「了解。」

こうして俺たちは基地の方角へ飛び去った。

第七話「領空」 (後書き)

十月九日、やっぱり飛行小隊を四機編成に変更。
カファーというコールサインは沖縄を舞台にした映画、カファーを待ち
わびてからきています。

第八話「演習」(前書き)

今回は長めです。

第八話「演習」

4月25日

陸上自衛軍

北富士演習場

AM 11:50

<町田耕哉陸士長。>

今日俺達は北富士演習場で演習を始めようとしている。今回の訓練は部隊訓練評価隊と模擬戦をするとの事。詳しいことはまだ説明されてない。この演習の規模は基本的に中隊規模なので前半、後半の二日に分けて訓練を行うことになっている。PM 12:00～PM 6:00まで訓練をやるつもりだ。

ちなみに、この北富士演習場は1936年に旧日本軍が開設し、その後米軍に接收され日本に返還され、現在は陸上自衛軍が実弾演習を中心に使用している。面積は約4600ヘクタール。9割以上が国有地だが現地の住民が江戸時代から薪や山菜を採るために立ち入ってきた入会慣習を理由に補償を求めている。

土屋「おまえら、用意は出来たか?。」

第1班班長「第1班、準備完了しました。」

第2版班長「第2班、いつでも行けます。」

町田「第3班、準備完了。」

第4班班長「第4班、大丈夫です。」

第5班班長「第5班、準備良し。」

第6班班長「第6班、用意できました。」

土屋「よし、こちら第4小隊。準備を完了。指示を請う。」

土屋小隊長が無線で報告している。

山崎「何か少し緊張する。」

町田「今年に入って始めてこの演習場を使うからか?。」

山崎「さあな。」

なんとも言えない空気が流れた後、今回の中隊本部に行き訓練状況の説明が行われた。

中隊長「今回の訓練状況は掃討だ。最初は隠れた敵戦車の発見、及び破壊。その後に敵兵を掃討。目標を壊滅状態にしろ。」

なんて厄介な状況なんだ。言葉で言うには簡単だが隠れた敵の掃討って結構難しいんだぞ。

例えば1996年に韓国でおきた江陵浸透事件で韓国に北朝鮮の小型潜水艦が座礁。乗員26名のうち11名が自決。15人が逃亡した。この15人を掃討するために軍と警察を合わせて6万人動員して一年分の弾薬を消費し、掃討開始から完了までに50日もかかったそうだ。

・・・中隊規模のゲリラを中隊規模で掃討するなんて無理だろ。

中隊長「今から10分後に訓練を開始する。準備はいいな?。」

「「「「了解!。」」」」」

（訓練開始）

P M 1 2 .. 4 3

西山「戦車はいずこ、戦車はいずや♪。」

南「おい、変な歌歌うな。」

山崎「お前ら、まじめにやれ。」

さて、現在俺たちは戦車の搜索をしている。現在の編成は俺と山崎と田中が小銃手、弓川が機関銃手、南が無線手、西山が対戦車手だ。ちなみに今使っている訓練教材は従来の弾丸の当たり判定だけじゃなく車両や手榴弾の爆発にも反応し戦死判定を受けると音が鳴るものらしい。

町田「油断するなよ。どこに潜んでいるか分からないからな。」

南の無線からは敵との会敵の報告は小規模なものが2、3件あった

だけとの事。

手に持っている89式小銃が重く感じる。

・・・静かだ。

弓川「班長。」

町田「どうした?。」

双眼鏡を覗いたまま弓川が声をかけた。

弓川「敵戦車1と随伴歩兵12を発見。」

ビンゴ!。

町田「でかした!。南、本部に連絡。」

南「了解。」

さて、どう戦車を撃破するか。周辺に部隊がいれば挟撃できるが・・・
いなければ一撃離脱だな。

南「班長。うちの小隊の第四班が近くにいます。」

町田「連絡を取れ。」

これで挟撃が出来るかな。後は位置だが――――

南「繋がりました。」

町田「よし、変われ。」

南が持っている無線機を取り第5班と連絡を取った。

第四班「こちら第四班班長の結城。聞こえるか。」

第四班班長。結城ゆうきかずや一矢陸曹長。
うちの分隊長である。

町田「こちらは第3班班長の町田です。しかし改めて紹介することはないと思いますが……。まあいいか、早速だがそっちはどこにいるんですか?。」

結城「こっちは前から見て、敵戦車の左後方にいる。」

結構後ろだな。……。よし。

町田「こちらはそちらよりかなり前のほうにいます。先回りをして奴らを挟み撃ちにしましょう。配置を完了したら連絡をください。」

結城「了解。」

通信が切れた。

町田「みんな、今の聞いたな。」

全員が首を縦に振る。

町田「よし、今すぐ準備に取り掛かれ。」

「「了解。」」

（5分後）

南「第四班から連絡がありました。」

南の報告を聞いた俺は無線機を取った。

町田「第四班、聞こえますか？。」

結城「こちら第四班。よく聞こえる。」

町田「合図をしたら一気に撃ってください。」

結城「了解。」

道の向こうから歩兵を先行させている戦車《標的》が近づいてくる。

3――――

カチャカチャと音が聞こえる。

2――――

西山が無反動砲――――MRR（多目的ガンの愛称のひとつ）を

構えてるのが、見える。

1――――

そして奇妙な静寂に包まれる

0――――！

町田「撃てえ！。」

いっせいに引き金を引く。

たちまち戦死判定の音が鳴る敵戦車と敵歩兵。

奇襲成功、敵戦車と敵歩兵の沈黙を確認。

と、口に出そうとしたらブラストから通信がきた。

結城「やったな、作戦成功だ！。」

どうやら向こうもかなり喜んでいららしい。

町田「はい、この調子d「ブーーーーー」、はあ？。」

いきなり戦死判定のブザー音になった。いや、よく見てみると俺たちちがなっているわけではない。

何が？、と周囲を見回すとライフルを構えた隊員がいた。どうやら敵役らしい。

敵役「ちっ、詰めが甘かったか。運がよかったな。」

そういつてそいつは消えた。

結城「おい、大丈夫か。」

と無線から結城の声が聞こえた。

町田「あ、ああ。」

結城「まったく感謝しろよ。うちの狙撃手がいなかったら今頃戦死判定だぞ。」

町田「ああ、そのスナイパーにお礼を言っと思ってください。」

結城「そんなじゃk「ビーーーーー!」ゑ?。」

・・・え、やられた?。

まずい!

町田「そ、総員退「ビーーーーー!」」

こっちでブザーが鳴った。しかも全員。

山崎が呟いた一言が今の俺たちの心境を物語っていた。

山崎「なんてこったい。」

く訓練終了く

土屋「お前ら、一時間もしないうちに戦死判定とはな……………」

さあ、やってまいりました。土屋竜介のO☆S I☆K A☆R I☆T
I M E!。

・・・何か憂鬱だ。今いるのは結城の班と俺の班全員だ。

土屋「俺は今まで一時間持たずにやられるような訓練をした覚えのないのだが。」

まずい、このままでは、間違いなく何か懲罰が・・・・。マジでヤバイ

土屋「だが、一回の攻撃で敵の部隊を殲滅したのはほめてやろう。新人にしてはよくやった。」

へ?。

土屋「今回の訓練で改善点を見つけ出し俺に報告しろ。以上!。」

土屋小隊長はそう締めくくって出て行った。

・・・・・・意外だ。

結城「ま、まあこんなときもあるさ。それじゃ、それぞれ反省会と行こう。」

そう言って班員を連れて戻ろうとした時俺はあることを思い出した。

町田「あ。」

結城「どうした?。」

町田「忘れてました、戦死直前に出てきた敵役を狙撃した――――

――

結城「ああ、それか。おい神楽。」

???? 「はゝい。」

返事があり小柄な女性隊員が駆けてきた。

・・・結構胸でかいな。

結城「こいつがうちの班のスナイパー、神楽^{かみらく} 憐^{れん}2等陸士だ。
今月うちの班に配属されたばかりの新人だ。」

そう紹介された後、ぺこりとお辞儀をした、神楽2等陸士。

町田「始めまして。俺は町田耕哉1等陸士だ。奇襲を防いでくれて
ありがとう。すごい腕だね。」

神楽「始めまして。でも2回目は撃ち洩らしてしまいましたよ。」

町田「いや、それでも俺たちでさえ気づかなかったのに遠くにいた
君が擬態に気づいたんだ。それは誇っていると思うよ。」

神楽「いやあゝ、照れますね。」

そう言いながら頭をかく神楽二等陸士。
・・・癒される。

町田「おい、結城三曹。こいつがほんとにやったんですか?。」

結城「ああ、やったよ。」

こんなほんわかした雰囲気を持ち、そして今月配属されたばかりの子がスナイパーだなんて。

町田「信じられない。」

結城「こいつ狙撃中を持つと雰囲気が変わるんだぜ。」

町田「うそだ。」

結城「俺たちの小隊では結構有名だぞ、知らないのか。．．．いや知らんのも無理は無いか。」

そんな漫画みたいな話があるとはな．．．。

町田「毎日へまを五回ぐらいしてますから。しかしほんとに信じられん。」

結城「この世の中、ありえないなんて事はありえないんだぜ。」

と言ってどや顔をする結城。

町田「．．．．．。」

結城「．．．．．。」

町田「とにかく早いところ改善点を見つけてさっさと飯にしましょう。」

結城「そうだな。」

そういつて結城は神楽を連れてほかの班員とともにどこかへ行った。

町田「よし、俺たちも改善点を見つけるぞ。」

「「了解。」」

俺たちは部隊訓練評価隊の元へと向かった。

第八話「演習」(後書き)

次回は海自の日常を。その後は某国と交戦状態になります。
が、次回の更新は遅れるかもしれません。

第九話「晩飯」(前書き)

今回はカレーのトッピングがメインです
W
W
W
W。

第九話「晩飯」

6月6日金曜日

PM7・00

まきなみ艦内食堂

清水「おいおい、カレーには福神漬けだろ。」

巻波「ちがう、ラッキョのほうがいいってば。」

清水「馬鹿、あんな豆のどこがいいんだ。」

巻波「君こそあんな赤い物体のどこがいいんだか教えてくれよ!。」

く、こいつはなんて強情なやつだ。カレーには福神漬けが一番と
なぜ分からない!。

え?、何でこんな言い争いをしているかだって。それはな今日が一
週間に1回のカレーが晩飯に出る日なんだ。それでこいつがラッキ
ョが一番良いと言った。福神漬け派の俺には納得できない。そこで
言い争いになって冒頭に戻るわけだ。

??? 「甘いわね、あんたたち。」

清水／巻波「誰だ!。」

声がしたほうを見るとそこには――――――

清水「まな板？」

?? 「むごたらしく死ぬか。ヘリのローターで切り刻まれるか選
びなさい。」

しまった。地雷を踏んだか！。巻波、こいつの紹介頼む。
あれ、何で腕をつか腕が新しい方向に曲がった！？。
あまりの激痛に俺は意識を失った。

>巻波<

す、凄まじい負のオーラだ……。清水の関節がとんでもない方向
に曲がっている……。・・・・・。

こいつの名前は天白^{あましろ} 美優^{みゆ}三等海曹。

この艦の艦載ヘリコプターSH-60Kのパイロットだ。
僕らと同じ年だけど階級は上なので、敬語を使おうとしたら普通で
いいと言われたので誰も居ない時はタメ口で話している。ちなみに
とんでもなく胸が小さい。このことは禁句だったりする。

天白「ウッフ、あなたも死ぬ？」

ガシッ↑腕をつかまれる音

巻波「あのー、天白サン？。何であなたはいい笑顔で腕を掴んでいるんでしょうか？」

アハハ、何も言っていないから関節技を決めるなんてことは――――

天白「チェイサー！」

――――無かったけど投げ飛ばされた。
受身を取れずに床に思いっきり叩きつけられた。

巻波「がはあ。」

もしや、僕の心を読んだのだろうか。

天白「さあ、覚悟は出来ているでしょうね。」

ヤバイ、何とか話を逸らさないと。ええと・・・・・・・・。

巻波「ところで、僕らのカレーのトッピングが甘いつてどういう事ですか？」

何でこんな話題が出た!？。脳よ、なんて選択をしたんだ。

天白「え、それはもちろんカレーには何もトッピングをしないからよ。」

話がそれた!？。でもラッキー、おかげでこれ以上の追撃はなさそうだ。

清水「うう、ここは?。」

気を失っていた清水が復活した。
とりあえず、視点を清水に移すか。

>清水<

ひ、ひどい目に遭った。まったく彼女はなぜあそこまで攻撃的なことが出来るんだ?。あと少しで折れるところだったぞ。
まあ、巻波のおかげで何とか一命は取り留めているが。

???「おい、お前ら。」

む?、誰だ。

振り返るとそこには甲板海曹（親甲板と呼称され、掌帆長が就く事が多い。CPO室という艦内の規律や士気を維持する部署に所属している。）の海木^{うみぎ} 蓮海曹長^{れん}がいた。

海木「さて、言い訳を聞こうか。」

（1時間後）

清水「耳がキンキンする。」

あの後説教を受けた俺たちは原稿用紙3枚分の反省文を書く羽目になった。

くそ、あんな大声を近くで出さなくてもいいのに。

巻波「とりあえず今はこれを何とかしないとね。」

巻波は手に持っている原稿用紙3枚を見ながら言った。

天白「そうね。早く仕上げないとカレーが冷めちゃうわ。」

それにしても、と巻波が呟く。

巻波「まさか、カレーのトッピングでこんなことになるとは思わなかったよ。」

確かにそれには同感だ。

清水「ああ、しかし海木甲板海曹はソース派だったとはな。」

天白「ソースは予想できなかった。これからはいがみ合わずにラッキョ派も福神漬け派もソース派もトッピング無し派も認め合いましょう。それじゃあ、私はこっちだから。」

そう言って天白は俺たちと別れ、自分の部屋に行った。

巻波「僕たちも行こうか。」

清水「そうだな。」

俺たちも自分の部屋に戻った。

第九話「晩飯」(後書き)

前回はこの話で日常編は終わりと言いましたが、もう2, 3話続けてみようと思います。

・・・艦魂登場させようかな。

第十話「休暇」(前書き)

恋愛を書くのがこんなにも大変だとは思わなかった。

第十話「休暇」

7月18日土曜日

PM2:00

航空自衛軍那覇基地周辺

＞鷲田雄大三等空曹＜

今日は休日だ。というわけで現在は那覇市内を散策している。現在模型店を目指している。

買う予定のものは巡洋艦最上を予定。

鷲田「それにしても暑くなったな。」

現在は7月の中旬。蒸し暑い時期だ。

タオルで汗をぬぐいながらバスかタクシーに乗るかどうかを財布を見ながら決める。

鷲田「・・・歩きでいいか。」

とりあえず、この暑さから一旦逃れるためとポカリを買うため、コンビニに寄る。

店員「ありがとうございます。」

店員の声を背にコンビニを出て、再び目的地に向かう。
それにしても暑い。のどの渇きを癒すためにポカリを飲む。

尾咲「あれ、鷺田君?。」

聞き覚えのある厄介な声が聞こえた。
幻聴と処理して歩こうとすると肩をつかまれた。

尾咲「ちょっと、無視するなんてひどいじゃない。」

どうやら幻聴じゃないらしい。
振り返って肩をつかんだ尾方を見る。

鷺田「いったい何のようですか?。」

尾咲「基地じゃないから敬語は要らないっていつも言ってるじゃん。」

鷺田「あゝ、はいはい。」

めんどくせえと思いつつ適当に返事をする。

尾咲「はいは一回。」

鷺田「はゝい。」

尾咲「伸ばさない。」

鷺田「はい。」

尾咲「じゃあ、ちょっと付き合って。」

鷺田「はい、ってちよつと待て!。」

しまった、嵌められた!。

尾咲「それじゃ、出発しよう。」

そういつて俺の腕をつかみ強引にどこかへ連れて行く尾方。

鷺田「待て待て、俺には俺の予定が——」

尾咲「そんなの誰も気にしない♪。」

こうして俺は強引に尾咲と付き合う事になった。

〓1時間後〓

どうやら彼女の目的地は最近開店した和風料理店のようだ。

早速店内に入る俺と尾咲。ちなみに俺は財布として連れて来られたらしい。

なんてこった。

尾咲「ちよつと長くなるかもしれないから席に座って待ってて。」

そんなことを言い尾方はどトイレへ行った。

とりあえず座って、適当に注文し尾方を待つ。さっき昼食食べたん

だけどなあ。

え、この間に逃げないのかって？。前に逃げたら眠っている間に目と鼻にからしを塗りつけられ、拳句の果てに出会いがしらに顔面にパンチ&アッパーカット&根も葉もないうわさを流されるというひどい目に遭って以降逃げ出せなくなっている。

それにしても、なぜいつも俺が選ばれなきやいかんのだ。以前そのことについて高田2等空曹と空守に相談したら、高田2等空曹はため息をつかれ、空守には夜道に気をつけろといわれた。

まったくなぜ教えてくれない。誰でもいいから教えてくれ。

＞尾咲く

私は鷺田雄大が好きだ。子供の頃ずっと一緒に居たらいつの間にか好きになっていた。

その感情を理解したのは中学校に入学した時だ。今までずっと一緒だったので妙にさびしくなりその後は雄大のことを考えると顔が熱くなったり胸がどきどきしたりした。そしてこの感情が恋だと自覚した。

その後は色々とアプローチをしたんだけど……どうやら彼は私のアプローチをなんとも思っていないの。いったい、どうすれば彼にこの気持ちを気付かせればいいのだろうか？。

尾咲「はあ、やっぱり告白したほうがいいのかなあ。」

……ヤバイ、顔が熱くなってきた。こんなんじゃ告白できるわけ無い。

尾咲「ま、ライバルが出るわけでもないし気長に待ちますか。」

そういつて気持ちを落ち着かせた後、私はお手洗いを後にした。

（1時間後）

＞鷺田＜

店を出た俺たちは今度は洋服屋へと向かった。

鷺田「なあ、まさか今度も俺のおごりじゃないよな？」

尾咲「まさか、自分のほしいものぐらい自分で払うわよ。」

その一言に俺は幾分か安堵した。

尾咲「ここよ。」

そういつて彼女は店の中に入った。

店の中はクーラーが聞いているらしく結構涼しかった。

尾咲「すぐにお目当ての服が見つかるからちょっと待ってね。」

そういつて彼女はどこかへ行った。

待つこと数分。彼女は戻ってきた。

尾咲「試着するからついてきて。」

そういわれ俺は試着室に連れて行かれた。

く僕に服の知識が無いので飛ばしますくBYATD—X

PM5:00

せっかくの休みが尾咲の買い物荷物持ちになっただけで終わってしまった。

尾咲「どうしたの？、そんな顔をして。」

鷺田「誰かさんのおかげで今日買う予定だった模型が買えなかったんだよ。」

尾咲「あゝそれは・・・ごめん。」

どうやら彼女は悪いと思っているようだ。

・・・でもこの展開は前にもあったんだよな。悪いと思うならやめてほしい。

尾方「うわぁ!。」

鷺田「うお!。」

いきなり尾方が転んで俺にぶつかり荷物をぶちまけてしまった。

鷺田「おいおい大丈夫か?。ほら、荷物拾うぞ。」

尾咲「う、うん。」

ぶちまけた荷物を拾っているとおかしなものがあつた。

鷺田「ん?。」

それを手に取って見る。ピンク色で、三角形を紐でつない――

尾咲「何見てるの!?。」

バキッ

いきなり尾咲に殴られた。

次に意識を取り戻したのはなぜか病院だった。

第十話「休暇」(後書き)

ちなみに基本は空陸海の順で日常編を描きます。

第十一話「喧嘩」(前書き)

更新遅くなってすみません。それではどうぞ。

第十一話「喧嘩」

7月19日 日曜日

AM 10:00

陸上自衛軍大宮駐屯地周辺。

＞町田耕哉陸士長＜

今日は大宮駅周辺のアニメイト大宮店へ行買い物を予定と、途中TSUOYAに寄って、山崎に頼まれて仮○ライ○ー555第7巻を返却する予定がある。

町田「魔法少女もいいが、メカも捨てがたい。……いつその事
○○同人にするかか。」

そんな独り言を呟きながら、俺はアニメイト大宮店に向かった。
……しかしほんとにどれを買うか迷うな。

＞神楽二等陸士＜

……どうしよう。

ちょっと銃の改造道具を買いに出かけていたら町田さんを見つけたので声を掛けようとしたのですが……。

町田「魔法少女もいいが、メカも捨てがたい。……いつその事
○○同人にするか。」

「ねえねえ、おかあさん。あのおにいさんはなにをいつているの？。

」

「こらっ、そっちを見ちゃダメ!。」

どうしましょう。とても声が掛けにくいです。

声を掛けるかそのまま無視して進むか迷っていると町田さんが私に気づき声を掛けてきました。

町田「おお、神楽。お前もどこかへ買い物か?。」

神楽「え、は、はい。そうです。」

いきなり声をあけられたので少しビックリしました。
動揺は隠せたのでしょうか?。

町田「いったい何を買いに?。」

ちなみに俺はアニメイトっていうアニメや漫画を扱っているところ
で買い物だな。

まあ、何を買うかまだ決まっていないうが。」

神楽「対物狙撃銃があるじゃないですか。それをちょっと改造しよ
うとしたら、つける改造に必要なパーツがなくて。」

町田「確か、七〇式対物狙撃銃だっけ?。なるほど、それでパーツ
を買おうと。」

町田さんは納得した感じでうなずいていましたが、こんなことを聞
いてきました。

町田「でもパーツの当てはあるのか?。」

神楽「確かに本物の対物ライフルの改造パーツは一般では売ってませんね。でも大丈夫です。知り合いの人に銃の改造パーツを作れる人が居るので。」

成る程とうなずいた感じで納得する町田さん。

町田「ところで、いったいどんな改造を?。」

そういえばどんな改造をするかまだ言ってませんでしたね。

神楽「フルオートと三点バーストの切り替えを出来るようにするだけです。」

町田「へ?。」

あれ、目が点になっています。どうしたんでしょう?。

>町田<

あの後、神楽と大宮駅で別れた俺はアニメイトへ向かった。

しかし、対物ライフルを三点バーストやフルオートにするやつが居るとは……。素直に重機関銃使えよ。

とりあえず、さきにTSUYAに寄って「ひい、やめてください!。」……。何だ。

声がした方を見ると、中学生ぐらいのオタクが不良数名にかつあげされていた。

不良A「ひい、だってよ。ハハハ、キモいんだよ!。」

オタク「ぐふう。」

.....

不良B「てめえらが居るだけで空気が汚れるんだよ!。死ね!。」

不良C「おら、これでも食らえ!。」

オタク「がはっ。」

OK、俺、ちょっとあいづらボコすわ。なぐに、そんな時間は掛からんだろ。

町田「くらえ。」

まずは気配を消し、不良Aの手刀で殴り気絶させる。ワレ、キシユウニ、セイコウセリ。

不良A「ごはあ。」

まずは一人。

不良B「て、てめえ。何もん・・・ぐわあ!。」

不良C「あ、アニキ「よそ見していいのか?。」な!、ギャアア!。」

不良Bの鳩尾を殴り気絶させる、不良Cにも同じ事を。

ここまで6秒。高々不良がオタクをバカにするとは。約10年早い。

町田「おい、大丈夫か。」

うずくまっているオタクに声を掛ける。

オタク「は、はい。大丈夫です。助けてくれてありがとうございます。」

町田「何の問題もなさそうだな。とりあえず急いでるんで。」

そういつて去ろうとすると。

オタク「名前は何ですか？。あなたの。」

こんなことを言ってきた。まあ、答えるが。

町田「俺の名前は町田耕哉。そういうお前は？。」

木場「僕の名前は木場京助きょうすけと言います。」

そう言つてオタク————木場君はお辞儀をした。

つて何で顔を上げたと同時に固まっているんだ？。

よく見ていたら、俺の後ろを見ていたので振り返ってみると——

「てめえ。俺のダチをやったからには覚悟が出来てるんだろな。」

大柄な不良が居た。しかも後ろに5人ぐらいのおまけつき。

町田「ほう（ニヤリ）。」

木場「・・・・・・・・・・うわぁ。」

背後で木場がおびえているようだ。よく見てみたらガタイもよさそう
うだ。

こんなやつと戦えば普通はぼろ負けするだろうな。

不良D「少しは出来るようだな。まぁ、俺達には敵わんだろうがな。
」

だが、あくまでそれは一般人ならの話。たかが不良が軍人にけんか
を売ればどうなるかそれは誰もがわかる結果だろう。

町田「まぁ、こんなところでなんだから、どこか違うところへ行こう
じゃないか。ああ、こいつは置いていく。」

不良D「いいぜ、着いて来い。おい、お前ら行くぞ。」

どうやら集団で俺をボコるつもりらしい。

まぁ、不良如きにやられる俺ではないがな。

楽しみだ。

（30分後）

不良たちに着いていき人気の無い場所についた俺は、不良に囲まれ
た。どうやら最初の5人以外にも15人ぐらい仲間が居たらしい。
そのうちの一人に奇襲を仕掛けられた。が、難なくカウンターをし、

そいつを後ろに居た不良に投げつけ一気にそこへ向かって走る。
その後に木刀を持った不良が突っ込んでくるが難なく回避し木刀を奪い取り鳩尾を殴る。

そして木刀で不良を一気に5人ほど倒す。

ここで俺を只者で無いと感じた不良たちは一人ずつではなく、集団で襲ってきた。

おかげで一発もらったが、その痛みをこらえ殴った相手をつかみ強引に振り回す。

怯んだスキに一気に畳み掛け10人ほど倒す。そして残ったやつを木刀でぶん殴り気絶させ、残るは不良Dのみだった。

不良D「やるじゃねえか。俺の名前は乾武^{いぬたけし}。あんたは？」

町田「町田耕哉。」

乾「これで決めるぜ。」

町田「……。」

俺たちはそれぞれの獲物を構えて、相手の隙をうかがう。
あいつ意外に強いな。隙が全然見当たらん。

——— 静寂 ———

乾「……オラァ！」

町田「甘いつ！。」

バキィ！

凄まじい音がした後、乾は倒れた。

町田「あれ、まさか骨折れた?。」

骨が折れているかどうか確認しようとするのとパトカーの音が聞こえてきた。

町田「・・・・・・・・ヤバイな。」

警察に見つかる厄介なのでその場から急いで立ち去った。

そしてその足でTSUOYAに寄って、山崎に頼まれた仮○ライ○1555第7巻を返却をした。

（5時間後）

町田「結局何も買えなかった・・・・・・・・。」

あの後アニメイトで買うものを選び買おうとしたら買えなかった。なぜなら財布を忘れたからだ。この耕哉、一生の不覚!。

とりあえず早く帰らないといういろと不味いので帰ることにした。

町田「まあ、買う予定のものは決めたし、あとは次来たときになくなってないことを祈るか。」

木場「町田さん!。」

後ろから木場君の声が聞こえ、振り返ると何かを持っている木場君がいた。

町田「おお、木場君。その手に持っているのは何だ?。」

木場「これは、お礼ですよ。さっきあなたに助けられたんで。」

ああ、そういえば助けたな。

お礼の品を受け取ったとき、職業を聞かれたので自衛隊と答えたら納得された。

その場で俺と木場君は別れた。

木場「自衛軍か……。僕も入ろうかな。」

と木場が呟いたが、俺には聞こえなかった。

第十一話「喧嘩」(後書き)

だんだん小説の分が長くなっているような気がする。
感想、ご意見、お待ちしております。

(追記) 七〇式対物狙撃銃とは、自衛隊が現在運用している対物狙撃銃と同じものです。ちなみにこの世界の自衛軍は兵器の符号は○
○(皇紀)式となっています。

第十二話「読書」(前書き)

どうも海自サイドはギャグ色が多い。
何とか改善したい。

第十二話「読書」

7月19日

12・00

海上自衛軍大湊基地周辺。

＞清水良助一等海士＜

今日は上陸許可が下りたので、本を買いに行こうと思っている。
一緒に行くのは巻波、天白だ。買う本のジャンルは俺が漫画、巻波がクトゥルフ神話の漫画、天白がラノベだ。・・・・なぜ、巻波はクトゥルフ神話の本を買おうとしているかは謎であるが。

清水「なあ、清水。何でお前はクトゥルフ神話の漫画を買おうとしているんだ？。お前なら漫画じゃなくて文庫本にすると買ったんだが。」

疑問に思っていたこと巻波に質問してみた。

巻波「うん、知り合いから送られてきたひぐ○しの鳴く○についてうミステリーホラーをだまされて見ちゃったんだ。・・・・あれは怖かった。精神的にかなりキタよ・・・・だから報復に送ろうかと。」

そう言いながらイイ笑顔を浮かべている巻波。
なんか震えているように見えるのは俺の目の錯覚だろうか。

しかし、面白そうだな

清水「その漫画版あるかな。あったら読んでみたい。」

この漫画大好き清水さんが絶対に見てやる。

天白「やめときなさい。」

清水「何で?。」

天白がなぜかそう言ってきた。……こいつもなぜか震えているような。

天白「あれはトラウマになる。絶対。」

巻波「うん。それには同意する。」

口々にそういつてくる巻波と天白。やっぱり二人とも震えている。そんなに怖いのだろうか?。

清水「そう言われると読みたくなるのが男だ。」

天白「……はあ。」

なんともいえない表情でため息をつく天白と

巻波「……………一応忠告はしたよ。」

こいつに何を言ってもだめだろうな、見たいな感じの顔を浮かべながら言う巻波。

……………めっちゃくちゃ読みたくなった。

巻波「まあ、人の忠告を聞かないアホは置いといて、天白は何を買うの?。」

巻波が話を天白の買うものに摩り替えた。……………さらっと酷いことを言うな。

天白「私は、『こちら哨戒艇63号、異常アリ』っていうのを買おうかと。」

清水「何じゃそりゃ?。」

天白「友達が書いてるライトノベル。軍隊とラブコメを混ぜたものらしいわ。ちなみに軍事考証は私が担当。」

こいつが軍事考証する時代が来るとは思わなかった。しかし、その本面白そうだな。それも買っておこう。

巻波「あ、そろそろ着くよ。」

そうこうしている内に着いたようだ。

ここで俺たちはそれぞれの欲しい本のジャンルへと向かった。(巻

波は店員にクトゥルフ神話の本の場所を聞きに行った。)

その後は無事に全員無事に欲しい本を買って帰った。

海上自衛軍大湊基地 護衛艦まきなみ艦内食堂。

20..00

>巻波<

誰かこの空気を何とかして欲しい。どうやら清水はひぐ○しの鳴く○にを読んだらしい。

内容が予想をはるかに超え猟奇的だったのか、さっきからどんよりとした空気をかもし出し、他のやつらが一切近づいてこない。

.....だからやめといったほうがいいと言ったのに。

僕もチラッと見たが、。

清水「.....食欲が出ない。」

天白「ねえ、大丈夫？」

ちなみに今日の晩御飯はオムライスである。

清水「問題ない。．．．．．なんでこんな時にオムライスが。」

なんだか顔がやけに青い。．．．．．いやな予感がする。

巻波「とりあえず、もう寝たら？」

清水「そうさせて貰う。」

いやな予感を回避するために寝室に行かせる。が．．．。

ふらり

清水「おっと。」

タツチ。

「「「「「あゝ。」「」「」「」

彼を立ちくらみが襲った。そして触れた所が．．．．．天白の胸。
全員が現状を認識した瞬間食堂の空気が凍った。
そして全員の気持ちが一いつになっただろう。

清水「そんな胸でも興奮するやつはいr―――」。

ビュン。

あ、清水が投げ飛ばされてこっちに飛んで来たああ!?!。

ゴンッ!。

こうして僕は一日を終えた。

第十二話「読書」(後書き)

さて、次は政治サイド。次回はシリアスになる予定です。

第十三話「不穩」(前書き)

時間の割には文の量が少ないorz。
追記六月六日に改訂しました。
追記六月二十日、改定しました

第十三話「不穩」

8月1日

PM 1:00

永田町IMIJ第三会議室

＞霧本雄一郎内閣官房長官＜

諜報員A「こちらが現在のロシアの状況です。」

麻生「ふむ。」

NINAの諜報員が書類を俺たちに渡してくる。この書類は現在のロシア情勢が書かれている。

ちなみに諜報員の名前は三山^{みやま} 渡^{わたる}だそうだ。

平沼「これは……。」

今津「なんともいえない状況だな。」

各々反応を示す。

さて、ここで現在のロシアの状況を語ろう。

近年のロシアは石油等の資源の価格高騰の影響で経済が一応の回復していたが、価格が落ち着き経済の回復が止まった。

一方資源のある地域の住民は一部の高官の横領によりサハリン油田の経済効果の大半が中央に持っていかれていると不満を漏らし、度々デモが発生していた。ここまでなら問題は少しヒヤヒヤする程度

で済むんだが。

7月24日大規模な森林火災が極東連邦管区のサハ共和国、マガダ
ン州、ハバロフスク地方、カムチャツカ地方に渡り発生、
対応が遅れ大損害を被る。さらに復興も遅れに遅れ、住民感情がさ
らに悪化、独立運動が目立ち始める。

そして7月31日、極東管区はシベリア共和国として独立を宣言し
た。その影響によりロシア各地で独立紛争が起きている

これが現在の極東ロシアの状況だ。そして、独立を宣言したシベリ
アに中国の武器と高官を確認したという未確認情報がシベリアに派
遣した諜報員から寄せられたため、関係各省庁が急遽集まったわけ
だ。

因みに北方領土問題は7月の始めごろに四島返還を断念し二島返還
論で話をまとめると言う意見が出て、今月にその方針を決定する予
定だったんだが、今回の件でまたややこしくなった。いや、北方領
土をすべて奪還できるチャンスかもしれないが……。

霧本「はあ、ややこしくなったもんだ。」

松元「そうですね。ああ、北方領土解決への道が遠のいてゆく……
。」

麻生「まあ、仕方ないだろう。二人とも、がんばってくれ。」

苦笑する声がこの部屋に響く。

平沼「ハハハ。しかし、これは警戒すべきでしょう。」

小泉「そうですね。国連にこのことを報告してみては?。」

霧本「それは無駄でしょう。」

と立ち上がる俺。

小泉「無駄とは・・・？。」

霧本「決定的な証拠が無い。高官と武器が確認された。それだけでは武器の売込みをただけだと言うかもしれません。」

松元「しかし一応報告してもいいのでは？。」

うん。まあ、確かその通りなんだがね。

麻生「とりあえず警戒しといたほうが良いだろう。」

三山「引き続き警戒に当たられます。」

麻生「今津大臣、平沼大臣。いざという時の準備は出来ていますね？。」

麻生さんの問いにうなづく平沼防衛大臣と今津国土交通大臣。

小泉「私らも出来る限りのことはします。」

と小泉法務大臣が言い、松元外務大臣がうなづく。

その後は、この場はとりあえず解散することになり、
各々平常勤務に戻った。

願わくば戦争になら無いことを祈る。

第十三話「不穏」(後書き)

いよいよ戦争状態になりますが、その前に年表や自衛軍の兵力表を載せます。

年表2015年1月～8月（前書き）

年表です。内閣の成立からシベリアとの戦争までの年表です。
11／19F－2の記述を削除。

年表2015年1月～8月

2015年

1月20日第二次麻生内閣が成立。

28日武器を識字率が70%未満の国には輸出をしない事を閣議に上げる。

30日対地ミサイルの研究を要請。

2月10日那覇地方隊の新設を完了。

16日ましゅう型補給艦3番艦しのめが就役。

21日ましゅう型補給艦4番艦じゅんさいが就役。

30日アメリカのABL（空中配備型レーザー）開発計画に参加する。

3月2日中国へのODAを停止する。

6日はたかぜ型護衛艦の後継艦となるイージス艦の建造を認可。

16日就学率65%未満、識字率70%未満の国家には武器を輸出しないことを決定するが、

大半の兵器の輸出を認可。

20日水陸両用車の開発を検討。

4月10日各海上自衛軍基地にはやぶさ型ミサイル艇を配備。

15日第一空挺団の増員に伴い第二空挺団を新設。

26日XASM-3をASM-3として採用。

27日福島第一原発を本格的に復興させる。

5月5日中期防衛力整備計画の構想を開始。

9日東京都青少年保護条例の撤廃を閣議に提出。

16日はたかぜ型護衛艦の後継艦のイージス艦の建造を開始。

19日ティルトルーター機の研究を防衛技研等に依頼。

6月3日A T D－Xが完成。

7日ほうしょう型護衛艦2番艦りゅうじょうが第2護衛艦隊に配属。

15日日本各地のレーダーサイトにてレーダーがステルス機にどのような反応を示すかA T D－Xでテストする。

17日東京都青少年保護条例を撤廃。

7月2日艦載型のA S M－3の開発に着手。

12日スパイ防止法成立、国籍法の改正。

20日武器輸出の制限を開始

8月5日日シ戦争勃発。

年表2015年1月～8月（後書き）

ちなみに心神はまだ戦闘機になりません。

2015年8月時の自衛軍戦力表（前書き）

雑用艇、一部輸送機、訓練支援機、支援装備、艦艇搭載装備、航空機搭載装備、戦車回収車、予備装備、個人装備、一人で運用する装備などは除外しています。

数のほうは調べてもわからないものは適当に設定しました。

そのおかげおかしい部分があると思いますが、そういう時は感想で指摘してもらおうと助かります。

追記、九月十三日陸自に編成表見たいなものを追加。次期に特科、空自部隊も追加予定。・・・・人数があっているか自身が無い。

九月二十二日、特科の編成っぽいもの、及び練習機、練習艦、救難機、連絡機等を追加。ただし数の分からないものは時間が無いため？表示。・・・・本編更新しなきゃ。

十月二十五日、F-2の部分を修正。

十二月二十七日護衛艦隊の記述を修正。

2015年8月時の自衛軍戦力表

航空自衛軍

人員約5万2000名

戦闘機

F-15J 202機

うちF-15J改、合計94機。

F-2 82機

うち能力向上改修機63機

F-4EJ改 53機

早期警戒機、偵察機、電子支援機

E-2C 13機

E-767 4機

RF-4 7機

RF-4EJ 11機

EC-1 1機

YS-11E A／EB EA2機、EB4機

空中給油機、輸送機

KC-767 4機

YS-11C 3機

C-123機

C-130 16機

C-213機

B-747 1機

要人輸送機

練習機

T-4212機

T-749機

T-400 13機

ヘリコプター

CH-47J 9機

UH-60J 58機

救難ヘリ

固定翼機

U-125A ?機

U-4 5機

地上装備

ペトリオットPAC-3 120セット

対空機関砲VADS 216セット

11式地对空誘導弾 8セット

軽装甲機動車 145輜

陸上自衛軍

人員18万7000名

主力戦車

10式戦車 88輜

90式戦車 341輜

74式戦車 673輜

自走砲

99式自走榴弾砲 121輜

75式自走榴弾砲 107輜

203ミリ自走榴弾砲 91輜

87式自走高射機関砲 52輜

多連装ロケットシステムMLRS 99輜

96式自走120ミリ迫撃砲 24輜

装甲車両

73式装甲車 338輜

9 6式装輪装甲車	4 1 1 輛
8 2式指揮通信車	2 3 1 輛
8 7式偵察警戒車	1 0 8 輛
化学防護車	2 0 輛
N B C 偵察車	1 8 輛
8 9式装甲戦闘車	6 9 輛
軽装甲機動車	1 8 8 0 輛
輸送車両	
高機動車	? 輛
1 / 2 tトラック	? 輛
1 1 / 2 tトラック	? 輛
3 1 / 2 tトラック	? 輛
7 tトラック	? 輛
特大型運搬車	? 輛

火砲

迫撃砲

120mm迫撃砲 RT 420両

81mm迫撃砲 L16 763両

榴弾砲

155ミリ榴弾砲 FH-70 453両

誘導弾

地对空誘導弾改良ホーク 65セット

03式中距離地对空誘導弾 32セット

11式短距離地对空誘導弾 18セット

93式近距離地对空誘導弾 113セット

96式多目的誘導弾 61セット

中距離多目的誘導弾 71セット

88式地对艦誘導弾システム 100セット

その他車両

99式弾薬給弾車 ？ 輛

87式砲側弾薬車 ？ 輛

73式特大型セミトラ ？ 輛

78式雪上車 ？ 輛

航空機

対戦車／戦闘ヘリコプター

AH-1S 76機

AH-64D 11機

AOH-1 12機

輸送ヘリコプター

UH-1 238機

UH-60 34機

一部の機体が予算増加によりミサイルランチャー、ロケットポッド、ガンポッドを搭載した。

CH-47 48機

EC-225LP 3機

要人輸送用のヘリ。

偵察ヘリコプター

OH-1A/B A型40機 B型20機

OH-1はハイローミックスで運用することになったために現実の自衛隊が配備しているものと同じA型。
低価格なB型と二種類に分けられた。

OH-6 97機

練習ヘリコプター

TH-480B 14機

連絡偵察機

LR-2 20機

編成

普通科

組（二～三人）＜ 班Ⅱ二組＜分隊Ⅱ二班。＜ 普通科一個小隊Ⅱ
普通科二～三個分隊＜ 普通科一個中隊Ⅱ普通科小隊四～六個分
＜ 一個大隊Ⅱ五個中隊 ＜連隊、大隊四個＜ 一個師団内に普通
科連隊四個＜ 方面隊、師団二個、旅団二個

中隊から＜ 群、中隊三個分＜ 団、群四個分＜ 旅団、団四個分
群、団、旅団は即応部隊及び機動部隊の役割を持つ。

機甲科

機甲科分隊Ⅱ戦車一台＜機甲科一個小隊Ⅱ機甲科分隊二個＜機甲化
一個中隊Ⅱ機甲化小隊三個＜機甲科一個大隊Ⅱ機甲科中隊四個＜一
個師団内に機甲科大隊二個

特科

特科分隊Ⅱ自走砲、弾薬車各一台＜特科一個小隊Ⅱ一～二個特科分
隊＜特科一個中隊Ⅱ一～三個特科小隊＜特科大隊Ⅱ二～四個特科中
隊＜一個師団内に特科大隊二個。

但し弾薬車が無い分隊もあり。

海上自衛軍

人員5万9500名

艦艇

第1護衛艦隊

第一護衛隊

ひゅうが

あきづき

こんごう

あけぼの

第一艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第二艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第二護衛艦隊

第二護衛隊

ほうしょう

あしがら

てるづき

いかづち

第六護衛隊

ちようかい

はるさめ

たかなみ
おおなみ

第三艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第四艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第三護衛艦隊

第三護衛隊

りゅうじょう

あたご

まきなみ

すずつき

第七護衛隊

みょうこう

ゆうだち

きりさめ

ありあけ

第五艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第六艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第4護衛艦隊

第四護衛隊

いせ

はつづき

むらさめ

すずなみ

第八護衛隊

きりしま

いなづま

さみだれ

さざなみ

第七艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

第八艇隊

はやぶさ型ミサイル艇五隻

大湊地方隊

はやぶさ型ミサイル艇七隻

那覇地方隊

はやぶさ型ミサイル艇七隻

第1潜水隊群

直轄艦

ちはや

第1潜水隊

みちしお

まきしお

いそしお

第3潜水隊

けんりゅう

くろしお

もちしお

第5潜水隊

そうりゅう

うんりゅう

はくりゅう

第2潜水隊群

直轄艦

ちよだ

第2潜水隊

おやしお

うずしお

なるしお

第4潜水隊

ひりゅう（そうりゅう型5番艦）

たかしお

やえしお

せとしお

第一輸送隊

おおすみ

しもきた

くにさき

補給艦

ましゅう

母港、舞鶴

おうみ

母港、呉

しのめ

母港、佐世保

じゅんさい

母港、横須賀

とわだ

母港、那覇

ときわ

母港、大湊

はまな

母港、佐世保

練習艦隊

直轄艦艇

かしま

第一練習隊

しまゆき

しらゆき

あさぎり

訓練支援艦

てんりゅう

くろべ

航空隊

哨戒機

P-3C 80機

P-1 20機

SH-60J 73機

S H—60K 59機

輸送機

Y S—11M／M—A 2機／2機

K C—130R 4機

救難機

U S—2 6機

U H—60J 28機

掃海ヘリ

M H—53E 8機

掃海・輸送ヘリコプター

C H—101 7機

練習機

ユーロコプターTH—135 ?機

2015年8月時の自衛軍戦力表（後書き）

次回はいよいよ戦争です。

戦闘描写には自信がありませんがうまく書けるように頑張ります。

第十四話「苦闘」(前書き)

初の海戦シーン。あまり自身がありません。
海上保安庁の登場するところから三人称になります。

第十四話「苦闘」

8月5日

午前3…39

東経145° 36' 47' 70' 北緯43° 30' 31' 65'

＞栄漁船団、漁船第九大栄丸乗組員、山田工＜
さかえ やまだたくみ

東の空がうつすらと明るくなった頃、俺たちはこの海域で網引き漁をしていた。

「おい、引っ張れ〜！」

掛け声とともに網を引っ張る。

この栄漁船団は根室港から出航しており、第三福栄丸、第七海栄丸、俺が乗っている第九大栄丸だいきゅうたいえいまるからなっている。第三福栄丸は進水して

既に30年以上経っている老漁船だ。安定性があり、頑丈ではあるが老朽化により性能にガタが来ている。第七海栄丸は進水してから13年経っており、エンジン馬力が非常に強い。船長曰く根室港で最も速いとの事。第九大栄丸は去年進水したばかりの漁船で、最新鋭のソナーや無線などを搭載しており三隻の中では電子面で最も進んでいる。三隻とも船名に栄と言う文字がついているので漁師仲間からは栄漁船団と呼ばれている。俺たちの獲物はスルメイカとホッケだ。

「おお、こいつあ大漁だ〜！」

「ハハ、雑魚もかかっていやがる。」

「おい、結構あるぞ。転覆しないよな?。」

どうやら大漁のようで仲間も他の船の乗組員も喜んでいる。

「よし、この調子でどんどんいくぞ。」

「応!。」

第三福栄丸の号令に返事をし漁に精を出す栄漁船団の面々。

漁に精を出すこと3時間。そろそろ漁も佳境に差し掛かったところにそれは起きた。

「お、露助の船が居るぞ。」

不意に第七海栄丸の乗組員の一人が声を上げた。

その声に反応し声を出した漁師が指をさす方向に視線を向ける。

そこにはシベリア国境警備隊の旗を掲げた警備艇がいた。

しかしそこに疑問を持つものは居ない。この海域はちょうどロシアと日本の境目でシベリア共和国が独立を宣言する前からロシア国境警備軍の警備艇が出現していたのだ。シベリア共和国国境警備隊の船がこの海域に来ても誰も気にしないのだ。

だがこの日は違った。警備艇から警告が飛んできたのだ。

「ここはわが国の排他的経済水域内だ。直ちに停船し、積荷を見せろ。」

これを受けた漁船団の船員は首をかしげた。

(ここは日本の経済水域内にはず。)

そういう考え頭の中に浮かんでいた。
だが、突然警備艇が銃撃を仕掛けてきた。

バーーーーバーーーーバーーーー

銃声がつながって聞こえるほどの連射速度で弾丸をばら撒いてくる

「うお!?!」

「撃ってきやがった!」

「逃げろ!」

舵を切り、逃げようとするが、漁船と警備艇じゃ速力が違いすぎるので逃げられない。

「海上保安庁に連絡しろ!」

「了解。」

船長の命令であわてて海上保安庁に連絡をする。

だが次の瞬間、俺の命は俺のいた場所ごと銃撃により粉々になった。

海上保安庁第一管区、根室海上保安部所属。巡視艇きたぐも

第九大栄丸の連絡は海上保安庁根室海上保安部に届き近くを航海していた海上保安庁の巡視艇きたぐもが現場に急行することになった。根室にあるほかの巡視船、巡視艇は出港準備で慌ただしく動いている。

木本三等海上保安士「おい、長雲。現場が見えたぞ。」

長雲三等海上保安士「こいつはひでえな、木本・・・。」

あたりには漁船の残骸や地や死体が浮いていた。

そしてたった今発射された銃撃で漁船が一隻沈みもう一隻も逃げ切れそうに無かった。

この光景に乗組員は絶句した。

ブリッジ

この光景は艦橋からも見えていた。

熊井三等海上保安士「う、ひ、酷すぎる。」

今井二等海上保安士「艇長！」

高野一等海上保安士「判ってる！。あの漁船のこの海域からの離脱を援護せよ。発砲を許可する。どこを狙っても構わん。」

今井「了解。」

有川二等海上保安士「だ、大丈夫なんですか!?!。」

この命令に一部乗組員が動揺した。

高野「全責任は私が負う。」

有川「・・・了解しました。」

今井が艇内に無線で指示を出す。

今井「総員、配置に着け。あの漁船を援護する!。」

甲板

木本「おい、聞いたか。」

木本が長雲に問う。

長雲「ああ、聞いたぜ。でも20ミリ相手に勝てるか?。」

木本「さあな。」

木本は全速力で走り、弾薬を装填し配置に着いた。因みに木本の配置は機関砲の操作、長雲はレーダー手である。

木本「射撃準備よし!。」

機関砲の照準をシベリアの警備艇に合わせる。
因みにきたぐもの機関砲はGAU-19ガトリング。遠隔操作式で
口径12.7ミリの3銃身ガトリングである。

ブリッジ

今井「撃て!。」

ブリッジに今井の射撃命令が出される。

バーーーーー

あまりの発射速度に銃声がつながって聞こえる。
どうやら警備艇の気をそらすことに成功したようだ。

有川「おい、木本。警備艇を撃ってもいいぞ。」

木本「え。」

有川「もちろん警告を無視したらな。」

バーーーーー。

ちゅんちゅんちゅん。

銃声がしたと思ったらきたぐもの後ろで銃弾が水面に当たり跳ねた。

木本「・・・・・・・・どうやらその必要はなさそうですね。」

有川「ああ。正当防衛で言い訳できる。やっちなえ。」

バーーーーー。

長雲「命中を確認。ダメージなし。」

高野「やはりか・・・・。」

実は海上保安庁の巡視艇の武装ではロシアの警備艇相手では勝てないという意見があったのだ。

ロシア国境警備軍は100ミリクラスの艦載砲や艦対空ミサイル、対潜ロケットなどを搭載。

警備艇クラスでも20ミリ機関砲を標準装備しているのだ。

対して海上保安庁は最大でも精々40ミリクラスの機関砲なのだ。

だが、ロシアと事を構えるつもりのない現政権は海上保安庁の武装強化をしなかった。その弊害が今この場に出ていた。

有川「とにかく撃て！。漁船が退避する時間を稼ぐんだ！。」

木本「了解！。」

だが、撃っても撃ってもあまりダメージは見られない。
そしてついに命中弾が出た。

ガンガンガン

今井「命中したぞ！。ダメージは！？。」

熊井「右舷機関室に浸水を確認!。」

今井「急いで塞げ!。」

熊井「了解!。」

しかし漁船を逃がすことには成功した。

だがこのままでは機関室が一部損傷、逃げることはできなくなった。そして弾薬も残りあとわずか。

このままでは沈むのは時間の問題であった。

高野「至近距離に近づき機関砲による攻撃を行え。」

有川「艇長!?。」

突然の命令に振り向く高野のほうへ振り向く有川。

高野「このままではジリ貧。それならば打って出たほうがいい。合図は俺が行う。」

有川「・・・了解。」

持てる力を振り絞り全速で警備艇に近づききたぐも。

有川「距離1500メートル!。」

高野「まだだ。」

その意図を知ってかしらるか、機関砲をきたぐもに向けて撃つ警備艇。

有川「距離1250メートル！」

高野「まだだ!。」

徐々に20ミリの弾丸が当たりぼろぼろになっていくきたぐも。

有川「距離1000メートル！」

高野「まだ撃つな!。」

木本の引き金を握る手が汗でべっとりと濡れる。

有川「距離850メートル!。」

木本「もう無理だ!。」

高野「もう少しだ!。」

木本の悲痛な叫び声が響く。

有川「距離500メートル！」

高野「ブリッジを狙って撃て!!。」

バーーーーー。

三秒だけの連射であったがほとんどが警備艇のブリッジを捕らえ全弾命中した。

命中した弾丸によりブリッジは破壊され、警備艇は沈黙した。

長雲「レーダーに感あり。巡視船3、小型船舶2。味方です。小型船舶は海自のミサイル艇と思われます」

長雲の声がブリッジに響く。

この声によりブリッジの緊張した空気が一気に離散した。

木本「だ、誰か助けて。腰が抜けた。」

熊井「だ、大丈夫か。」

腰の抜けた木本に熊井が肩を貸す。

有川「くるのが遅せえよ」

有川がぼやく。

高野「まあ、そう言うな。全員救命艇を降ろせ。生存s y「四十度の方向から本艇に向かってくる飛翔体あり!。ミサイルです!。何だと!!。」

次の瞬間きたぐもは光に包まれた。

第十四話「苦闘」(後書き)

違和感はありませんでしたか？。
ご意見、ご感想、お待ちしております。

第十五話「宣言」

永田町

8月5日

7・17、執務室

＞霧本雄一郎内閣官房長官＜

霧本「吉月のやつ遅いな。」

現在シベリア共和国に関連する報告書を纏め上げ、
仕事を終えたときにいつも飲んでいるラムネを吉月に買いに行かせ
ている。

秘書がいてほんとよかった。

別に仕事をさせているだけであって決してパシリにしているわけ
はない。

ただ・・・

霧本「いくらなんでも遅すぎやしないか?。」

俺がラムネを頼んで40分。未だに戻ってこないというのはおかし
い。

少なくともこの近くでラムネは買えるはずだし、店からも15分
とそんなに遠くない。何が起きた?。

と、一人で逡巡しているとドアがバン!と勢いよく開いた。

吉月「霧本さん!大変です!。」

霧本「遅いぞ。何やってたんだ。」

何事もなく無事に戻ってきたのはいいが、ラムネはどうした？。

まさか売り切れ程度でこんなにあせているのか？。

そんな推測は吉月の言葉で吹き飛んだ。

吉月「海上保安庁と海上自衛軍がシベリアと交戦状態になりました
！」

霧本「何だと!?!」

7..25

内閣閣議室。

麻生「不味いことになったな。」

シベリア国境警備隊と海上保安庁＋海上自衛軍の交戦結果を見ながら顔をしかめる麻生さん。

交戦結果は巡視船かりばが大破、くなしりとさろまが撃沈。巡視艇きたぐもが爆沈。

ミサイル艇ちどりとからすが中破するという結果になった。

シベリア国境警備隊のほうは警備艦二隻、警備艇四隻のうち警備艦一隻中破、警備艇一隻撃沈しただけだという。・・・・根室海上保安部所属の船はほとんど行動不能だな。

霧本「いくらなんでもこの被害は無いのでは？。ミサイル艇があるんですし。警備艦も二、三隻沈んでもおかしくないでしょうに。」

平沼「いや、どうやら妨害電波のようなものが出たらしくミサイルをことごとく回避させられたらしい。」

巡視船とミサイル艇の砲撃でどうにかできた感じだな。」

・・・ひょっとして向こうはやる気満々だったのか？。

松元「これが向こう側の言い分です。」

松元外相がそういつて書類が運ばれてくる。シベリアの言い分は簡略化すれば、

日本国籍の漁船三隻がわが国の経済水域内で密漁をしていたので停船命令を出したが、従わずに逃走しようとしたので攻撃した。

しかし、日本の沿岸警備隊と海軍が漁船を守るように行動したためこのようなことが起きた。我が国の主権を侵した日本に速やかな謝罪と賠償を要求する。

と言うものだ。

額賀「そしてこれが根室に帰還した第三福栄丸の証言です。」

額賀領土問題対策大臣が第三福栄丸の証言が書かれた書類を見せる。書類には日本の経済水域内で停船命令を受けた後にいきなり攻撃を受けたと書いてあった。

第三福栄丸のGPSの記録も日本の経済水域内からギリギリ出ていることを示している。

小泉「これは……。」

城家「見事に食い違っているな。」

松元外相が溜め息をついている。これは骨が折れそうな交渉になりそうだな。

阿部「ミサイル艇と根室海上保安部の船は、どのくらいで復帰できますか?。」

平沼「ミサイル艇は三週間で復帰可能です。」

今津「巡視船は今年中には無理でしょう。少なくとも一年以上は掛かるかと。」

阿部「そうですか。」

麻生「やはり、巡視船の武装も強化すべきだったか。」

麻生さんがそんなことを呟く。

小泉「まあ、後悔先に立たずというわけです。いまさらそんなことを言っても始まりませんよ。」

麻生「そうだな。皆、これは憲法改正以来初めての危機だ。もし今

までのような対応をすれば確実に周辺諸国に舐められる。そこで準有事体制を発令しようと思うと思う。賛成の者は立ってくれ。」

この多数決の結果は言うまでもなく全員賛成となった。

麻生「本時刻を持って準有事体制を発令する。」

「「「分かりました。」」」

麻生さんの指示に全員が返事をする。

戦後初めて日本が戦争を辞さないことを宣言した瞬間でもあった。さて、これから忙しくなるぞ。

第十五話「宣言」（後書き）

日本が攻撃された時に内閣の国务大臣が集まるところって内閣閣議室であっているんでしょうか？。あっていなかったら感想で教えてください。

追記 6 / 15

いくらミサイル艇や巡視船を破壊されても武力攻撃事態になるのはおかしい。かといって武力攻撃予測事態になるのもおかしいと考え、新しい単語を作り改訂しました。因みに準有事体制の解説は次回になります。

第十六話「休息」(前書き)

Y S F L I G H Tにはまって中々書けずにいた。o r z
第十六話、どうぞ。

追記、六月二十六日、砲雷科は見張りをしない事と海木海曹長の階級が間違ってたので修正しました。

七月二十九日歌詞の無断転載をしてしまったので修正。まことに申し訳ありませんでした。今後は二度とこのようなこと無い様にします。

第十六話「休息」

海上自衛軍

8月5日AM9..50

津軽海峡

護衛艦まきなみ甲板上

>巻波 孝太一等海士<

現在まきなみは現在根室方面へ向かっている。そして僕は左舷後部で風に当たっている。

現在の状況を説明すると、

海保とシベリアが銃撃戦になりミサイル艇二隻と根室海上保安部所属の船が全てがやられ準有事体制が発動。その穴を埋めようと大湊地方隊所属のミサイル艇と地方隊に所属はしていないが、臨時でまきなみが根室に急行しているところだ。大湊地方隊のミサイル艇はまきなみと一緒に東回りでいく行く三隻と西回りでいく五隻に分かれて航行している。

途中で海上保安庁の巡視船と合流し、さらに次の日には第三護衛艦隊と第四潜水艦隊が合流する予定だ。

因みに準有事体制とは、憲法改正時に出来たもので、従来の武力攻撃予測事態と武力攻撃事態の間に位置する物で基本的に攻撃を受けた時にまだ外交交渉の余地があるときに発動する。デフコンと言うと2だね。この状態で再び戦闘が発生したら自動的に武力攻撃事態——有事体制になるんだ。

あまり戦いたくないな。出来ればこのまま何もおきずに終わって欲しいけど。

海木「おお、巻波。こんなところで何やっているんだ？」

そんなことを考えていたら海木一等海曹に声を掛けられた。
・・・海木海曹長は今回のことどう思っているんだろう。

海木「・・・おまえが何考えていたか当ててやろうか。」

巻波「え。」

海木「このまま何事も起きずに終わればいいと思っているんだろう。」

半分はずれています。どや顔をやめてください。

海木「顔を見れば判る。まあ、別にその気持ちが悪いというわけじゃない。むしろ、俺も同じだ。」

巻波「・・・・・・。」

海木「だがな、戦闘になったらその考えは捨てておけ。」

巻波「・・・・・・了解しました。」

海木准尉は「じゃ、俺は砲雷長に呼ばれているんでね」といって中

に戻った。

確かに海木准尉の言い分はわかるけど。

巻波「やっぱり戦いたくないなあ。」

「タラタンタタタンタタタ♪、タラタンタタタンタタタ♪。」

・・・一気にまじめな空気が壊れた。
声のするほうを見ると清水が。

巻波「・・・なんつう歌を歌っているんだ。」

清水「うん?。どうかしたか?。」

巻波「いや、なんでもない。」

清水の手を見ると缶コーヒーが三つ持っている。

清水「おすそ分けた。」

巻波「ありがとう。その缶コーヒーは？」

僕が尋ねると清水は缶タブをはずしながら答える。

清水「天白に頼まれてな、お前さんのはついでだ。うん」

巻波「ふん。」

清水「そろそろ哨戒から帰ってくる時間だが……。」

巻波「あれじゃないのか？。」

僕が指差した方向にはヘリコプターが徐々に近づいていた。

清水「多分そうだろう。じゃあ、俺はトイレに行っているから、天白が来たらこの缶コーヒー渡しといてくれ。」

巻波「了解。」

そういつて清水はもうひとつの缶コーヒーを僕に渡して持ち場に戻

った。

５分後

「お、いたいた。」

天白がやってきた。

巻波「はい、缶コーヒー。」

天白「ありがとう。」

缶コーヒーを受け取った後、それをおいしそうに飲む天白。

天白「うん、やっぱりコーヒーはいいね！」

巻波「コーヒー好きだね。」

天白「うん、だって一服するときにはこれかタバコに限るもん。まあ、タバコは吸えないけど……。」

巻波「まあ、僕は特にないけど冬は暖かいものもいいね。特に夜間。」

天白「ああ、それ解る。」

この後仕事の合間に飲む飲み物で色々会話した後、天白は格納庫へ戻った。

第十六話「休息」(後書き)

次回は水上戦です。

・・・・・F-2登場させようかな。

第十七話「奇襲」(前書き)

エースコンバットX2にはまってしまった。
そして戦闘描写が中々難しい。難産でした。
それでは本編どうぞ。

追記七月二十四日戦闘シーンに台詞を追加。

第十七話「奇襲」

八月六日

午前十時二十分

海上自衛軍

護衛艦まきなみ

＞清水良助一等海士＜

「目標情報入電!。四十七度の方角からミサイル接近!。総員、対空戦闘用意!。」

Why!?!。え?、待て、何が起きた?。ミサイル接近?。いきなりじゃね?。

そんなことを思いながらも体はしっかり反応している。

巻波「清水!。弾薬の用意!。」

清水「分かってる!。」

俺達は急いでファランクスの弾薬をとりに行った。

（艦橋）

突然の攻撃に慌ただしくなっている艦橋。
しかし、全員冷静に対処している。

梅城「四十七度、仰角二十二に備え。」

松野「C I C、迎撃しろ。ミサイルが突っ込んでくるぞ!。」

梅城「航海長、第三護衛艦隊と第四潜水隊の合流はいつ頃になるかね?。」

尾田航海長「約一時間はかかります。」

梅城「そうか。」

〽C I C〽

池田「C I C了解。迎撃しろ!。いいか!、一時間防ぎきればこっちのもんだ。」

ここも艦橋と同じで、冷静さを欠いている者は一人も居ない。

「「了解!。」」

竹本「方位四十七度、仰角二十度、距離五万八千五百。数は六。ま
っすぐ本艦に向かって来ます。」

米川「SPY-1レーダーに捕捉。以後ミサイルをA、B、C、D、
アルファブラボーチャーリズデルタ
エコーフォックスストロット
E、Fと呼称。」

モニターを見ると端の方から出現したミサイルを表す赤い光点がか
なりの速さで中心に向かって移動している。

ロシア製の対艦ミサイルは基本的に音速で飛び、
敵に対応する時間を少なくさせるのが基本であるために対応は迅速
にせねばならない。

池田「ECM、パシッ アクティブ傍受から発信へ!。ジャミングで妨害しろ。」

青野「ジャミング開始!。」

米川「ターゲットE。撃墜!。」

赤い光点がひとつ消えるも、他の光点は
ミサイルが低空飛行に移った為に光点が薄くなる。

池田「シースパロー、攻撃始め!」

青野「シースパロー、撃ちっ方はじめ。」

米川「C、F。撃墜！」

光点が二つ消え、残った三発が主砲の射程内に入ったことをモニターが表示する。

池田「主砲発射！。ミサイル艇にも発射を要請しろ！」

青野「了解。距離、一万三千。撃ち方はじめ。」

く再び甲板にく

「距離、一万三千。撃ち方はじめ。」

爆音とともにまきなみやミサイル艇の主砲から飛び出た砲弾がミサイルの周囲で炸裂している。

その光景はさながら大東亜戦争のようだ。

清水「いやあ、絶景かな絶景かな。」

巻波「お前は石川五右衛門か！。現実逃避してんじゃねえ！。あ、二発墜ちた。」

海木「お前ら何やっている！。早く来い！。」

艦体からチャフが出ている中
海木海曹長に急かされ艦内に入った瞬間、CIWSが作動したらしく、つながった銃声が背中に響いた。

ボガアアアアアン！！

清水「全弾墜ちましたね。」

海木「みたいだな。」

そうこうしている内に空自からの応援が来て、一部がミサイルが飛んできた方向に飛んでいった。

「CIC」

竹本「ミサイルの発射は現在確認されてありません。」

池田「そうか。しかし、現状では対空防御にっていっぱいだ。さて、どうするか……。」

米川「レーダーに航空機。IFF（敵味方識別装置）に反応。これは。」

青野「空自だな。」

「艦橋」

エクセル「こちら、航空総隊直轄、飛行警戒監視隊所属のE-2C。コールサイン、エクセルだ。遅れてすまない。」

梅城「こちらまきなみ支援に感謝する。」

エクセル「各機、交戦を許可する。海上自衛軍を援護せよ！」

梅城「空自の応援か。」

松野「これで片付くといいんですが……。」

第十七話「奇襲」(後書き)

次回は増援に来た空自のターン。
お楽しみに。

第十八話「支援」(前書き)

親の目を盗んで投稿。長かった。

第十八話「支援」

八月六日

十時三十分

航空自衛軍

国後島近海

エクセル「各機、戦闘体制に入れ。シグマ隊、オメガ隊は艦隊防空ワイバーン隊、ペガサス隊は敵艦に攻撃、リュンクス隊はワイバーンとペガサスの援護をしろ。」

「「了解」」

F-2八機、F-4四機。合計十二機の戦闘機が敵艦隊に向かっている。

F-2は対艦ミサイルを四つも携行できる戦闘機だ。

戦闘方法は、まず燃料の消費を抑えるため高高度を飛行。そして敵のレーダーの探知範囲に近づいたら一気に急降下、低空飛行に移り対艦ミサイルの射程に入り次第対艦ミサイルを発射。標的を撃沈する。

低空を飛行するために低高度の運動性能はF-15も凌ぐと言われている。欠陥機と言う人も居るが

それは間違い。確かに最初のころは不具合はあったが、度重なるアップグレードとかで解消されている。

F-2の現在の装備は九十三式対艦誘導弾が四発。九十九式空対空誘導弾が二発だ。

今この空域に居る機はリュンクス隊のF-4四機、そしてペガサス隊とワイバーン隊のF-2、八機。F-15は全て艦体防空にまわされているので、ペガサスとワイバーンの援護するのはリュンクスのF-4だ。

都筑^{つひき}二等空曹「いよいよか。」

花沢^{はなざわ}三等空曹「ペガサス4、焦って海面に突っ込むなよ。」

独り言をしたのはペガサス隊四番機の都筑。その独り言に答えたのはペガサス隊三番機、花沢三等空曹。

都筑「はっ、んなこと起きるわけ無いだろ。」

花沢「そういうお前は日常でいつもドジをする。」

皆野^{みなの}一等空曹「ペガサス3、ペガサス4。あまり羽目はずしすぎるな。」

雑談に興じる花沢と都筑を窺めるのはペガサス隊の隊長、皆野一等空曹。

駒野^{こまの}二等空曹「そういうなペガサス1。緊張を和らげるためにやつ

ているんだ。」

皆野「ふん。」

そしてかなりおおらかな副隊長。ペガサス2こと、駒野二等空曹。

都筑「にしても、F-4で大丈夫か？。なんか俺達に援護される気がするんだが。」

釘川^{くぎかわ}二等空曹「おい、てめえF-4なめんなよ。」

宮城^{みやしろ}二等空曹「いくら退役寸前とはいえ、お前らに援護されることはない。」

都筑の言葉に反論してきたのはリUNKス隊三番機の釘川二等空曹と宮城二等空曹。

鎌田^{かまた}一等空曹「リUNKス3、いざと言うときはそう言っていられなくなるぞ。」

白江^{しろえ}一等空曹「まあ、あまりF-2に無茶をされても困るがな。」

リUNKス隊二番機の鎌田一等空曹と白江一等空曹だ。

木戸空曹長「で、いつ低空飛行に入ればいいんだ?。」

野本^{のもと}一等空曹「もうすぐじゃないのか?。」

敵の位置をエクセルに聞いているのは木戸空曹長。その質問に答えているのは野本一等空曹だ。

風間^{かざま}二等空曹「楽に出来るといいんだがなあ。」

波多野^{はたの}二等空曹「無理だろうな。」

リUNKス隊四番機の風間二等空曹、波多野二等空曹。リUNKス隊の中では影が薄い。

エクセル「そろそろ敵のレーダーの探知距離に入る。各機、低空域に移動しろ。」

「「了解。」」

（二分後）

鎌田「ワイバーン、エンゲージ」

皆野「ペガサス、エンゲージ」

木戸「リュンクス、エンゲージ」

低空飛行の状態で対艦誘導弾を発射する、先行するワイバーン隊とペガサス隊。それを守るかのような陣形で飛行するリュンクス隊とアプス隊。

木戸「全機、対艦誘導弾発射！」

ワイバーン、ペガサス両隊のF-2から白い尾を引いてミサイルが発射され水平線の向こうへ消えた。

命中を確認すると、すぐさま退避行動に移る。

おそらく誘導弾が消えた方向は黒煙を上げ、傾いている敵艦がいくつもあり死屍累々と言った有様であろう。

皆野「敵主力艦への命中を確認。」

エクセル「よくやった。しかし複数の敵機が高速でそちらに向かっている。リュンクス隊。迎撃してくれ。」

「「了解。」」

低空飛行のまま目標へ向かうリUNKス隊。

敵機の正体はここから約九十キロ離れているMiG-31、六機だ。ロシア軍が一番最初に導入した第四世代戦闘機で、かつて函館空港に強行着陸したMiG-25の大幅な改良型だ。主な改良点は、GSh-6-23 23mmガトリング砲をつけたことと電子兵装の強化、燃費の向上、低高度の目標への対処能力、新型ミサイルの搭載等である。

木戸「ロックされた。各機散開！」

MiG-31からミサイルが発射され、アプス、リUNKス両隊へ迫る。

釘川「逃げ切れない。ちくしょおお！」

宮城「うわあああ！」

ほとんどは回避したが、釘川機は避けきれず被弾。そのまま墜落した。

野本「リUNKス3応答せよ！。リUNKス3！」

木戸「くそつ。各機、リュンクス3の仇をとれ！。FOX1。」

三機のF-4からミサイルが発射され、六機のうち一機のMiG-31に吸い込まれ命中。

風間「このまま一気に行くぜ。FOX3！」

波多野「宮城達の仇だあ！」

MiG-31に果敢に突っ込んでいく風間と波多野。
すれ違いざまに機銃を打ち込み撃墜。

木戸「こっちも負けてられないぞ。FOX2！」

野本「ヒット！。ってケツに着かれていますぞ！」

木戸「甘い！」

撃ち落したと同時に後ろに着かれるも急制動で逃れ、逆に後ろをとり機銃を発射、エンジンに当たった様で火を噴きながら墜ちてゆく。
ちなみにMiG-31はあまり機動性能が良くないのでドッグファイトでは簡単に負ける。

木戸「後ろを取ったからって油断したな。」

野本「決め台詞 乙。」

ビーーーーーー

突然ミサイルアラートが鳴り、あわてて回避行動をとるも後方に被弾し。制御不能になる。

本戸「おい、どこに当たった!?!。」

野本「エンジン被弾!、炎上してる。翼も吹き飛んでるぞ!。」

本戸「ちっ、バイルアウト!。」

脱出装置を作動させ脱出しパラシュートを展開する。落下しながら辺りを見回せば残ったMig-31を鎌田機が撃墜した後だった。最後に残ったMig-31は撤退したらしい。着水した時に周辺にいたのは空自のF-4とF-2だけだった。

鎌田「リUNKス2より1。撃墜されたようだが大丈夫か?。」

本戸「プライドに傷がついた以外は問題ない。一刻も早い救助を要請する」

白江「おい、死ぬなよ。」

本戸「大丈夫だ。水温もそこまで低くない。捕虜になる可能性は高いが……。」

鎌田「まあ、捕虜にならないように。」

波多野「リUNKス3より1へ。派手な墜落だったが大丈夫か?。」

木戸「脱出したのを見ていなかったのか?。」

風間「敵機に夢中で脱出したところは見えていないね。」

木戸「空戦ではそれが命取りになるぞ。ま、俺に言えた義理じゃないが。」

波多野「肝に銘じとくよ。じゃあな。」

リUNKス3からの通信が切れた。

白江「じゃあな。がんばって持ちこたえろ。」

鎌田「幸運を祈る。」

そしてリUNKス2からの通信も切れ、轟音とともにF-2とF-4が飛び去った。

木戸「……さて、救難団来るまでどうする?。」

野本「さあ?。」

第十八話「支援」(後書き)

明日で期末テストは終わり。赤点取ってません。・・・多分。追記十月六日。現実では、F-4は第二航空団、第三航空団に配備されていますが、こっちでは中国などの脅威に対抗するために一部の飛行隊を移設した結果、一個飛行隊分のF-4が第二航空団に配備されています。

第十九話「被弾」(前書き)

思ってたより早く出来ました。この調子で更新できたらいいな・・・。

第十九話「被弾」

八月六日

十時四十五分

護衛艦まきなみ後部甲板。

海上自衛軍

＞清水良助一等海士＜

ミサイルが再び発射された。

今度は地上から発射されたい。

着弾推定時間は探知してからおよそ六分後。現在は二分後と差し迫っている。

「迎撃準備急げ！」

清水「地上からとかアリかよ。」

巻波「いや、日本も人の事言えないから。」

海木「つべこべ言わず早くしろ！」

さて、俺達は何をして居るかと言えば、ファランクスの応急修理の最終点検だ。

さっき敵潜水艦からミサイルの発射を探知。迎撃した際に破片がファランクスに当たりその際動力コードを損傷したため、応急修理を

したのだ。幸い今探知したミサイルの迎撃には間に合いそうだ。

巻波「こっちは異常なしだ。そっちは?。」

清水「特に無し。海木一曹、C I Cに報告を。」

海木「了解。後部フラックスよりC I C。応急修理を完了した。動かしてみてくれ。」

C I C「C I C了解。」

フラックスを見ると確かに動いている。応急修理の成功だ。

C I C「C I Cより後部フラックス。よくやった。だが、ミサイルが来るまで時間がない。すぐに退避を。」

海木「了解。巻波、清水。」

巻波「了解。」

清水「早く退避しませんとね。」

整備道具を片手に退避する巻波と弾薬箱の置いてある場所まで戻る。

海木「来たぞ!!。」

海木一曹が指をさす方向を見ると確かにミサイルが三発こちらに向かっていた。

即座に主砲とファランクスが反応し弾丸をミサイルに飛ばしている。一発二発と墜ちる。しかし、最後の一発が中々墜ちずこっちに突っ込んでくる……って！ヤバイ！？。

海木「くそ！。弾薬箱を持て！。退避だ！。」

巻波／清水「了解！。」

艦内に戻れば少なくとも命は助かる。しかし、艦内までは五メートルくらいだが退避は間に合うかギリギリ。着弾までもう三秒もない。いや、間に合わない。今までの人生がゆっくりと流れてくるのは走馬灯か。

海木「アーメン！。」

海木海曹長の声が聞こえたと思ったら前に押され、艦内に転がり込む。直後に爆発が後ろで起き、その衝撃でこちらに飛んできたドアにぶつかり壁に叩きつけられる。暗くなる意識の中で見たのは同じく壁に叩きつけられて横に転がる巻波のみだった。

第十九話「被弾」(後書き)

次回は七時間ほど飛びます。

第二十話「決定」(前書き)

清水「何で俺達はここに?。」

巻波「さあ。」

いや、座談会したいな〜って前から思ってたね。この章が終わった
らやるつもりだったんだけど待ちきれなくてね。

因みに君達を呼んだのは本編で重傷を負って今離脱しているからね。

清水「何か、ありきたりだな。つか、更新速度を早くすれば?。」

それが簡単に出来たら苦労しないよ。

巻波「……………。僕達よりも空自の空守や鷲田を登場させれば?。」

あ……………。

清水「忘れてたな。」

そ、それでは本編どうぞ。

清水、巻波「「あ、逃げた。」」

第二十話「決定」

八月六日

十五時四十分

東京千代田区永田町

首相官邸地下一階危機管理センター

＞霧本雄一郎内閣官房長官＜

麻生「戦果は?。」

「大湊地方隊が第三護衛艦隊と第四潜水隊と合流しましたが、海自は途中に支援攻撃をしたP-3Cが損傷。まきなみ、りゅうじょうが被弾し中破。ありあけ、きりさめが破片により小破。それとミサイル艇らichyou、つる、おおたかが撃沈。海保は退避中に巡視艇が二隻、巡視船が三隻が撃沈。空自はF-4二機、F-15が三機が撃墜されました。しかし今回の海戦で第114水域警備艦旅団を殲滅。第165水上艦艇旅団、第36水上艦艇師団、第19潜水艦旅団、第44対潜艦旅団を壊滅。航空機はMiG-31を四機、Su-27を四機、Il-38を一機、撃墜したそうです。」

麻生「そうか。中々の戦果だな。」

現在北方領土でのまさか戦闘に驚愕している霧本だ。いつまでも驚愕している暇はないが。しかし、ロシアの攻撃も予想外だが、自衛軍の奮戦も予想外だな。おかげで一方的な戦闘と言うことはないようだ。

平沼「ええ、これで敵の水上戦力の約半数は破壊出来たのは儲け物でしょう。」

平沼防衛大臣の言うとおりだ。一応この戦場で敵の海上戦力の展開に制限が加わったのは間違いない。
しかし……。

霧本「航空機の数が少ないのでは？」

「それは同時期にロシア軍がシベリア攻撃のために進撃を開始し、それに航空機を大半をそっちに回さなければいけない状況になったからです。まあ、多数の地域で独立運動が頻発したので、ロシア側の兵力が足りなくなり進撃が停止しましたが。」

霧本「なるほど。」

松元「実は、ロシア政府から北方領土及び極東管区への攻撃要請が届いているのです。」

額賀「見返りに油田権益の一部割譲、歯舞諸島、色丹島の割譲を提示しています。」

なるほど。いよいよなりふり構っていられなくなったという訳か。
しかし……。

麻生「自衛軍は自分の領土の奪還を許されるんだよな。」

小泉「?。はい、可能です。……まさか。」

突然麻生総理がうなずきながら言った。

麻生「ならば、動員できる輸送船を動員し北方領土への上陸を行う。」

こういった直後どよめきが危機管理センターを覆った。何せ第二次世界大戦以来、初めての武力行使をするという宣言をしたも同然なのだから。

麻生「何も問題あるまい。兵力も足りているし、法的に可能。攻撃も受けた。脅威の排除を名目に奪還するのも問題あるまい。連中が何かいうなら国際司法裁判所に引きづり出せば良い。これは大チャンスじゃねえか。」

確かにこの機に応じて北方領土を奪還すれば支持率が上がるし北方領土問題が解決するチャンスだ。
でも言いたいことを全部言われるとはな……。

長岡「ですが、兵力のほうは北海道だけでは足りないのですどこから集める必要がありますよ。」

霧本「その点についてなら、陸総隊（陸上総体司令部の略称）と東
北方面隊からから抽出すればいいのでは？」

阿部「在日米軍のほうは？」

町斑「事前に問い合わせましたが、ある程度の兵力抽出は可能との
事です。」

麻生「よし、霧本の案で行こう。反対する者は……いないよ
うだな。」

俺の意見に反対するものが居ないか確認した後、
各方面で北方領土上陸作戦の準備を進めた。
戦後初の攻撃的な軍事行動。吉と出るか凶と出るか……。
そんな考えを抱きながら、危機管理センターを出た。

第二十話「決定」(後書き)

清水「ところで、俺達が今後登場する予定は?。」

後書きだけに登場させる予定。だけど毎回と言うわけではないかも

巻波「最近登場していないキャラを出席させるから?。」

いや、単純に書く時と書かないときがあるだけ。まあ、巻波の
問いも大体あっているが。・・・・・・

清水「なんか詰まんない会話だな。」

・・・・・・さて次回はロシアが北海道に上陸してきます。それでは。

清水「あ、また逃げやがった。」

第二十一話「上陸」(前書き)

やっと・・・・・・やっと修正出来た。

復活記念のゲストは航空自衛軍の鷺田三等空曹と空守三等空曹です。

鷺田「やっと出来たか・・・・・・。」

空守「まったく。」

いやあ、ほんとやりきったって感じがしますね。

鷺田「まあ、お疲れさん。」

空守「ちゃんと自衛隊のことを調べたら、こんなことにはならなかったんじゃないか？」

うん。反省してます。と言うわけで、第二十一話。どうぞ。

第二十一話「上陸」

八月九日

午前三時二十分

陸上自衛軍

北海道旭川市旭川駐屯地

＞町田耕哉陸士長＜

俺は現在上からの命令で北海道へ来ている。命令を受けたとき首都の守りを放棄するのかと思ったが

どうやらこの命令は東北方面隊の一部と陸上総隊司令部の一部の部隊、中央即応連隊の特殊作戦群と第一空挺団にもされているらしい。その後準備に一日掛けE3系新幹線「こまち」に乗りながら彼岸帰航を聴き、北海道に着いた後に自由行動の許可が下り、観光をした後、九時に就寝。その後一時半にたたき起こされ戦闘服やら八九やらを持たされ中型トラックに載せられ、

現在他の部隊とともに旭川駐屯地にて待機命令が出されている。

何が起きた？。

ああ、これは夢か。じゃあお休み。

中隊長「そろそろ作戦を説明する。」

嗚呼、夢じゃなかった。やっぱシベリア侵攻は現実だったのね。

中隊長「現在宗谷、網走にシベリア軍奇襲を受けた我々だが、

海自の奮闘で網走への上陸は避けられた。だが宗谷に上陸された。上層部からの報告で宗谷の残存部隊からの連絡で占領された事が確認されている。

宗谷に展開している部隊は現在交戦中だが、かなり分が悪いらしい。しかも網走への上陸阻止の戦闘の際に潜水艦から巡航ミサイル、国後方面から対地ミサイルが発射され、レーダーサイトが使えなくなった。これにより予期せぬ航空機の支援攻撃にさらされると思う。注意して欲しい。我々の任務は車両の燃料補給が完了し次第宗谷に向かい、増援として駆けつけて宗谷を奪還することだ。」

「「了解。」」

作戦説明が終わり、部屋から出て、待機場所に戻る。

ここで装備の確認。

まずは戦闘装着セット、プラス個人用暗視装置

プライマリは、我がバディ八九式小銃。弾倉七つ。そして六式小銃てき弾五発。

セカンドりの九ミリ自動拳銃。弾倉四つ。M26手榴弾が四つ。

とまあ、かなり豪勢なわけだが。

町田「やっぱ、音楽プレイヤー持って来れば・・・やっぱだめだな。」

山崎「多分ぶっ壊れるぞ?。」

町田「いや、最後に聴いた曲が彼岸帰航なんだ。」

山崎「は？。」

町田「簡単に言うと、とある弾幕シューティングゲームに登場する
とあるステージのボスの死神の曲。あれで何回もゲームオーバーに
なったな。」

山崎「・・・死んだな。」

町田「そう簡単に死んでたまるか。」

南「班長。そういう物騒な事を話はしないでください。
周りが・・・・・・・・。」

町／山「へ？。」

周りを見るとどことなくビミョーな空気が流れている。
たかだか死神の曲云々でこういう空気になるとは・・・・・・・・。
何か気の利いたジョークは・・・・・・・・ないな。

土屋「不謹慎な話をするんじゃないやねえ！。」

ズゴン！

町田「ふのおおおお！？。」

あ、頭が痛い！無茶苦茶痛い！。

山崎「お、おのれ。土y——」

土屋「黙れ。」

ドゴン！！

さっきのと今の音絶対殴ったときの音じゃねえ……。ん……。おお、微妙な空気が幾分か緩和した。Y A T T A !。でも、頭が痛い。

南「班長。よくそんなに騒いでいられますね。」

田中「これから人を殺すって言うのに……。」

山崎「うーん。今だから騒いでるとしかいえないな。」

南「はあ。」

町田「おまえら、緊張することはないぞ。いつもどおりやれば良い。そのための訓練だったろ？。」

だが、人殺しに快感を覚えるな。そしたらただの殺人鬼だからな。俺からは以上だ。」

やっぱサブカルチャーは偉大だ。うん。

そうこうしている内に車両の燃料補給が終わった。

土屋「総員乗車！」

「「了解！」」

土屋隊長の号令により指定された1／2トラックに乗る。
無事生き残れるますように。

と心の中で念じながら外の景色を眺めた。

第二十一話「上陸」(後書き)

因みに今回が初めての同時投稿だったりする。

空守「こんな形で初めての同時投稿とは……………」

鷺田「そう言えば、尾咲は?。」

…………呼ぶの忘れた。

空守「おまえ、仮にもヒロインだぞ?。」

あゝ。とりあえず謝つといて。

ん?、この轟音は。だんだん近づいてる?。

尾咲「こちらカフー3。聞こえる?。」

こちらATD-X聞こえるよ。

尾咲「よくも私を忘れたわね。お礼に機銃掃射をプレゼントするわ。」

いりません。むしろ鷺田たち……………っていない。

尾咲「FOX3!。」

ぐわああああああー!。

第二十二話「河川」（前書き）

・・・。

→原形をとどめていないミンチ状態。

尾咲「ちょっと、やりすぎたかしら。」

鷺田「やりすぎだな。人間相手に二十ミリは。」

空守「しかし、これはグロイ状態だな。R－18じゃないか。・・・」

尾咲「まあ、そのうち復活するでしょう。」

そのとおり！。

鷺／尾／空「「ぎゃあああああ！」」」

と言うわけで第二十二話、どうぞ。

第二十二話「河川」

八月九日

午前四時五分

音威子府村

陸上自衛軍

＞町田耕哉陸士長＜

さて、現在の状況を説明しよう。

俺達は別の小隊とともに先行部隊として一足先に占領された宗谷へと向かった。

だが途中でシベリア兵がこちらに向かっているとの連絡を受け、予測進路上にある音威子府村に急行。

川にかかっている橋の前に着いた時に車両が停止したら、いきなりRPGが飛んできて地面に着弾し爆発。その衝撃で乗っていた車両が転倒し、頭がぐわんぐわんしながら視界がブラックアウトした。

………すごく………痛いです。

「しっかりしろ!!。」

「おい、目を覚ましたぞ!。」

町田「う、…俺は。」

徐々に意識が戻ってくる。

どうやら気絶してそれほど時間がたっていないらしい。

横転した高機動車のそばで横たわっていた。

起き上がりふらつく頭をヘルメット越しに叩く。

土屋「寝起きで悪いがすぐに前線に向かえ。」

町田「状況は？。」

いつの間にか結構状況が悪化している。

土屋「対岸の敵部隊により橋が破壊されて渡れない。

ついでに対戦車陣地を構築されて、そこからの攻撃で架橋戦車が行動できない。

航空支援を要請するからその間にやつらの相手しろ。対戦車を重点的に狙え。」

町田「了解。みんな、動けるな？。」

山崎「先に確認しといたが、全員無事だ。」

不幸中の幸いで全員軽傷は負っているものの戦闘に支障が出そうなものはいない。

しかし、恐ろしい事になってるな。あれか？、弾幕は数だぜってか。暗視装置を装着し、班のほうへ向き声をかける。

町田「よし、じゃあ行くぞ。」

「「了解。」」

俺の号令とともに川へ向かっていくメンバー。

セクターを3にあわせ照準をRPGを構えている敵に向け引き金を引く。

瞬間、弾丸が発射され敵に当たる。そして、弾が無くなりリロードし、また同じ事を繰り返す。

が、弾が無くなったときに敵が攻撃を集中して来た。

町田「リロードする！。援護を」

南「了解！」

近くにいた南が走りながら三点射をする。

南が敵を引き付けている間に弾倉を替え、銃撃を再開する。班員の中で一番若いのに。心強い。

町田「よし！。ありがとう南。」

南「いえ、自分は————ウグッ。」

町田「南！？」

南に流れ弾が当たった

物陰に南を引きずり込み容態を確認する。

・・・・肩を貫通している。

応急手当をし衛生兵を呼ぶ。

南「す、すいません。」

町田「しゃべるな、傷に響く。」

衛生兵に運ばれる南を背に89式小銃を構える。

山崎「南のことより前方をどうにかするぞ。」

町田「分かってる。」

山崎の言葉に、意識を前方に向ける。

相変わらず、火線が入り乱れて・・・・いや、むしろ向こうがグレネードや火砲を使ってきて

こちらが不利になっている。

こういうときは火力だ。

ポーチから06式敵弾を出して銃口に挿し発射する。

間拔けな発射音とは裏腹に、数秒後に爆発が対岸で起き敵を吹き飛ばす。

町田「よし、命中。おい、西山。無反動砲を！」

他はてき弾を発射しろ！」

次弾を銃口に差し、発射する。
敵が吹っ飛んでゆく様子が見える。

西山「後方の安全確認！。南の仇だ！。」

田中「いや、南はまだ死んでないからな！？。」

そんな会話が聞こえるとともにひとときわ大きい爆発音が響いた。
どうやら、無反動砲を発射したらしい。真っ赤な炎が燃え上がっている。

だんだんこちら側が優勢になってきている。対戦車手を重点的に倒していたのが効いたか。

土屋「後三十秒で航空支援がくるぞ！。」

無線から隊長の声が聞こえる。
空からは徐々に轟音が近づいている。

「弾着五秒前。四、三、弾着、今！。」

ズドオオオオオーーン。

轟音とともに爆弾が投下され、大爆発が起きる。

対戦車陣地を破壊した後、すぐに架橋戦車が動き出し、橋を架ける。

土屋「戦える奴は全員直ちに乗車！」

「「了解」」

隊長は乗車命令を出すも、俺達の乗った車両は最初に破壊されたので使えない。

そのことを話すと

土屋「じゃあ、そのL A V（軽装甲機動車）に乗れ。」

と言うわけでL A Vに乗ることになった。

座席は運転席に田中。助手席に俺。後部座席に西川と山崎。銃座には西川が乗っている。

ちなみにL A Vに乗っていたやつらは戦闘の被害により、一時後退したらしい。

土屋「全員出発だ！。目的地は中川町。そこに着いたら陣地を気づいて後続が来るまで待機だ！」

俺達は車列を組んで移動を開始した。

第二十二話「河川」（後書き）

顔真っ青だけど大丈夫か？。

空守「大丈夫じゃない。ミンチの死体が動き出してしゃべったんだぞ？。

どこのホラーだ！？。」

悪い悪い（笑）。

鷺田「（笑）じゃねえ！。吐き氣したじゃねえか！。」

尾咲「きゅゝ。」↑氣絶中。

空守「どうして生き残れた？。普通はまず動かないだろうし……。」

まあ、基本的にここは何でもありだからね。それでは次回予告を鷺田にしてもらおう。

鷺田「分かった。次回、第二十三話「構築」。ご期待ください。」

第二十三話「戦死」(前書き)

空守「なあ、前は次回予告でこの回の題名って「構築」だったよな。」

うん。

空守「題名ちがうよな。」

ついやっちゃうんだー☆

空守「ついやっちゃうんだー☆、じゃねえ！。何だ！？。この重苦しいタイトルは！。」

まあ、抑えて抑えて。

空守「……………ところで、鷺田たちは？。」

鷺田が尾咲に連れられてどっかに行ったっきり連絡がつかない。

空守「やっぱりな……………。それでは第二十三話どうぞ。」

え？、やっぱりって何？。

第二十三話「戦死」

八月九日

午後七時

海上自衛軍

自衛隊病院

＞清水良助一等海士＜

はっ！・・・・・・知らない天井だ。

とまあテンプレート見たいな物は置いといて。ここは何処だ？。

なんか病院みたいだが・・・・・・。

状況を把握するために起き上がろうとするが。

清水「痛っつ！。」

胸あたりに激痛を感じ断念。骨折したか？。腕を見ると包帯が巻かれている。

多分これも同じだろう。

「目覚めたんだね。」

首だけを動かし隣を見ると頭に包帯を巻いた巻波が本を読んでいた。そして足には包帯が吊るされていた。多分頭と足を骨折したんだろう。

清水「で、いったいここは？」

巻波「自衛隊病院。」

だよな。さすがにミサイルが近くで爆発した挙句、その衝撃でドアが吹っ飛んできてぶつかり壁に強く叩きつけられたもんな。それで無傷だったらどこの人外ですか？ 見たいな質問が飛んでくるしな。

清水「どのくらいで復帰できるか聞いてるか？。」

巻波「僕は見てのとおり骨折して全治一ヶ月。君も同じさ。」

そういつて苦笑いをする巻波。
まあ、その分ブランクが出てくるからな。訓練して取り戻すのが大変だ。

清水「ところで、海木海曹長はどこに？」

そう尋ねると巻波の表情が暗くなった。
まさか、……………

巻波「・・・・・・・・戦死したよ。」

やっぱり。

・・・・・・・・なんてこった。

巻波「ミサイルの爆風をまともに受けて即死だったそうだよ。」

清水「マジかよ・・・・・・・・。」

あのままの状況だったら、三人とも死ぬとはいえ・・・・・・・・。畜生。もっと早くにミサイルの接近に気づけば。ほかにもっと方法はなかったのか？。

そんな思いを抱きながらだんだん暗くなる視界を最後に俺の意識はシャットダウンした。

＞巻波孝太一等海士く

清水が目を覚ましたけど、すぐに眠った。まだ疲れが癒えてないのかな。

しかし、海木海曹長の死はかなりショックみたいだね。

巻波「でも、戦争だから仕方ないよ。」

そう呟いて割り切ろうとするものの割り切れない。
やっぱり、上官の死はつらい。

でも、何かを責めても何にも始まらない。

コンコン

巻波「どうぞ。」

ナース「巻波さん。晩御飯の時間ですよ。」

もうそんな時間か。

ナースさんがテキパキと食事の用意をしている。

因みにナースと言って二十代と思っている奴。

目の前にいるのは四十代くらいのおばさんである。

「何か言いましたか?。」

「いえ、なんにも。それじゃ、いただきます。」

味気ない味を想像しながら僕は食事に手をつけた。

第二十三話「戦死」(後書き)

空守「さて、さっきの答えだが……………」

うん。

空守「前々回の三倍と言うことさ!。」

…………!!フラッシュバン!。

バン!。ピカアアアア!!

うお、目が、目がアアアア。

→目を押さえながら倒れこむ。

ゴオオオオオオ!

うう、今度は何だ。

→目をこすりながら立ち上がる。

あれは、F-18にF-15二機?。

…………まさか。

鷲田「今回は在日米軍に協力を要請した。」

尾咲「ゆっくり焼かれて行ってね！！！！！」

ヒュウウウウウウウウウウ。

Oh, shit.

チュドーーン！！。

第二十四話「空港」（前書き）

更新遅くなつてすいません。今回のゲストは、霧本雄一郎官房長官です。

霧本「遅れた理由は何だ？。」

部活で使っている唯一のパソコンがぶっ壊れて、そこで作っていたRPGの製作を家でやってみました。

霧本「なるほど。・・・待て、部活は何だ？。」

マイコン研究部。簡単に言えばパソコン部ですね。

霧本「パソコン部なのにパソコンが一台とは・・・。」

総部員数、一年二人、二、三年ともに0人。

霧本「・・・ご愁傷さん。」

今日は台風のおかげで早く帰れたので一応小説の更新していますが本来の予定では借りたパソコンでゲーム作るはずだったんですが・・・。

霧本「皮肉だな。」

皆さんも台風に気をつけてください。

それでは、第二十四話「奪還」どうぞ。今回は長めです。

第二十四話「空港」

同日

午後八時十一分

陸上自衛軍

国道121号線

＜町田耕哉陸士長＞

町田「あのBTRを撃て！」

弓川「了解！」

ズドン！、と発砲音が聞こえ、発射された八十四ミリ弾が当たり、降車していた兵員もろとも炎上するBTR（ロシアの装甲車）。命中したことに内心喜びつつ標的を探す。

さて、現在本隊は西の海岸から上陸してきた部隊とパラシュート降下してきた第一空挺団とともに電撃戦を展開し、大地を駆け回り、陣地やら敵装甲車両等を破壊しながら国道四十号線沿いに稚内に迫っている。

既に豊富町、幌延町等は奪還している。奪還していないところもあるらしいが、補給線も絶っているので降伏か全滅のどちらかを選ぶしか道はないだろう。因みに東側からは特殊作戦群や第七師団が中心となって展開している。

さて、俺らはどうしているかと言うと十数分前の土屋隊長の通信から読み取ってくれ。

土屋「土屋より第二分隊及び第三分隊。現在稚内空港で敵のヘリ部隊が待機している。近接航空支援等が厄介らしいから速やかに排除して欲しいとのことだ。本来なら第七師団がやるはずだが予想外に敵の抵抗が激しくて空港にいく余裕が無いそうだ。現在空挺団の部隊が向かっているが数が足りないらしい。そこで、距離が比較的近いお前らが選ばれた。幸い敵の数は三個小隊規模だ。さっさと行って空港を奪還して来い。」

と言うことで途中で合流した第四班、第五班、第六班とともに現在稚内空港に向かっている。

車両はLAV、HMV（高機動車）、1／2トントラック各一両・
・・・1／2トントラックに対物ライフルがくっついていいるとは・
・・キャリバー50（M2重機関銃）つけたほうが良くないか？。

221

さて、走行している内に空挺団と思しき部隊が見えてきた。

車両を停止し、分隊長の結城陸曹長と第五分隊隊長の冬野陸曹長が降車。

向こうも気づいた用で二名が降車しこちらに近づいてきた。

空挺団の規模はこちらと同じ二個分隊。

どうやら何か会話をしている。

多分挨拶や作戦の打ち合わせとかをしているのだろう。

あ、戻ってきた。

結城「空挺団との打ち合わせの結果、俺達は空挺団が合図をしたら、正面から。空挺団は側面から攻撃することになった

各自、指定の場所で待機だ。」

無線からの指示を聞き俺達第二分隊と第三分隊はレンタカーショットの陰に移動し車両をその後方に待機させる。

そして、俺と西山、田中が降りる。各車両には二名ずつ人員が残っており、降車したやつはそれぞれA隊、B隊、C隊、D隊と別れている。そしてそいつらを車両から援護するフォーメーションで突入の準備をする。

（数分後）

結城「合図が来た。攻撃開始！」

結城曹長の号令とともに攻撃を開始。

後ろからはミニミやキャリバー・50の銃声が聞こえ、前方に制圧射撃を仕掛けている。

無反動砲は空挺部隊に接收された。

結城「よし、行け！」

後方からの制圧射撃で出来た隙をつき前進、物陰に隠れつつ89を撃つ。

途中ででき弾を撃ち込み、敵を吹っ飛ばす。
そして物陰に隠れ、弾倉を交換する。

田中「西山、いつもより動きが速いな。」

西山「そりゃあ、あんな重いもん背負って走ってるんだからな。それが取れて身体が軽い軽い。」

町田「おしゃべりしている時間は無いぞ。」

二人の肩を叩き指をさす。その方向にはBRDMがこちらに砲身に向けて……。
ヤバイ!。

町田「隠れろ!」

瞬間、機銃掃射が行われた。口径14.5ミリの機関銃の威力はM2のそれを凌駕する。
直撃せずとも無事ではすまない。

町田「お前ら、大丈夫か?。」

田中「な、何とか。」

西山「背中が痛いけど、問題ない。」

皆、破片による切り傷はあるが、問題はなさそうだ。

結城『おい、無事か！？。』

無線から俺達の無事を確かめる結城三曹の声が聞こえる

町田「あれを破壊してくれ！。
これじゃ、前進できないぞ。」

相変わらず機銃をこちらに撃ってくる。
うわ、跳弾した！。早く撃ってー！！。

結城『神楽！、あの装甲車を撃て。』

無線越しにそう聞こえた後、三点射撃の銃声が響きBRDMが爆発する。

対物ライフル強いな。

町田「よし、行くぞ！。」

物陰から飛び出し一気に空港のロビーへ近づく。
途中グレネードが飛んできた。が、それを回避し逆にてき弾を撃ち

込む。

冬野「こちらC隊。敵のスナイパーのせいで負傷者が出た。このままじゃ動けん。

ロビーのスナイパーを排除してくれ。」

町田「Bの神楽に頼めよ!。」

冬野「対物ライフルがグレネードの破片に当たって使えない!。一番前にいるのはお前らだからな。

十五秒後に車両部隊とともに制圧射撃を開始する。頼んだぞ!。」

そういわれ、一方的に切られた。

こちらら新人だぞ?。新人に任せるのか? バカか?、?か?、どっちだよ?。

田中「くだらないこと考えてないで行くぞ!」

田中に突っ込まれ周囲に目を向ける。援護があるとはいえこれはやりたくない

『十、九、八、七、六———』

気を引き締めて前を見据える。建物は前方二十メートル。全力で走

れば大丈夫なはず……。

「五、四、三、二、一、零！。行けえええ！！。」

そして走りだす。後ろからの援護射撃があるとはいえこれは怖い。前方にマズルフラッシュが……アブな！。跳弾が今俺のすぐ横をかすった！。

めちやくちや痛え。でもとまったらやばいので走り続ける。

何とか全員無事完走し入り口で息を整える。

町田「さっさとスナイパーをやるぞ。」

田中「了解。」

西山「分散して探すか？。」

町田「いや、固まって探したほうがいいだろう。俺達は戦闘力は低いからな。」

それに、と付け足す。

町田「敵がうようよいるところを一人で行くのは危ない。」

と締めくくってみた。最初に二階から上がる。スナイパーは上から撃ってくる。

これ鉄則・・・・・・・・多分。

田中「で、二階に上がってスナイパーを始末した方がいいが・・・・・・・・」

はい、現在前と後ろから挟み撃ちを受けています。

・・・・・・・・どうしよう。しかも無線機が壊れた。ついでに暗視装置が壊れたので周りがほとんど見えない。

西山「誰も弾に当たってないのはまさに奇跡だな。」

町田「いいから、撃ちまくれ!!。」

ああ、クソ!。どうしてこうなった。スナイパーを倒そうとしたら一個小隊が出てきた。

精鋭とかそんなじゃねえ。もっとたちの悪いものを味わっているぜ・・・・・・・・。

うおお！、貫通した！？。

町田「助けてーりん！」

田中「ネタに走るな！、バカ——」

ズドオオオオン。

突如敵の側面が爆発。そこから・・・

「突撃ー！！。」

「「うおおおおお！。」」

空挺団が来た。これで勝てる！。

「おら、これが正しいマルチカール君（多目的ガンの愛称の一つ）の使い方だ！。」

・・・あの人MRRで人を殴ってるよ。

痛そうだな。使い方間違えていやがる。隣の人物は・・・あ？。

「来れるものなら来い！。ボコボコにしてくれる。」

・・・あいつM2を一人で扱っている!？。
狂っている。狂っていやがる!。

「おい!。ぼさつとしてないでさっさと来い!!。」

「「は、はい!。」」

M2撃っているやつが怒鳴ったので素直にそばに行く。
撃たれたらバラバラになるし。

「お前らが、突入した部隊か?。」

町田「は、はいそうです。」

倉持「そうか、それはよかった。俺は、くらもちしんすけ倉持心助一等陸曹だ。
お前らの分隊長の要請で救出に来た。」

町田「ありがとうございます。」

しかし、キャリバー・50を一人で扱うとは・・・・。恐ろしい。
と、戦闘音が止んだのであたりを確認する。
それはまさに死屍累々と言った有様でシベリア側は捕虜になっているか傷を負っているか撃たれて死んでいるやつがほとんどだった。
ほかは逃げたらしい。

倉持「お、大部隊の到着か。」

耳を澄ませば戦車やヘリの音が聞こえる。

……まさかシベリアじゃないだろうな

『こちら第七師団。空港を攻撃した部隊。聞こえるか？。』

何だ味方か……驚かせやがって。

倉持「こちら。第一空挺団。大体の場所は奪還した。残敵の掃討を頼む。」

『了解。』

倉持「とりあえずお前らは分隊に戻ってろ。ここは俺達が抑えとく。幸いてきが武器を置いてってくれたからな。」

町田「了解。お前ら行くぞ。」

田中と西山を引き連れ……待て、銃の形がおかしい。

田中「ああ、勿体無いんで、つい……。」

西山「どさくさにまぎれて試射したら中々良かったんで……ね？。」

町田「お前ら、８９拾え。」

とまあ、ハプニングはあったが何とか分隊に戻り、数分後に第七師団と合流した。

第一空挺団がいなければどうなっていたか。

……死ぬかと思った。

第二十四話「空港」（後書き）

霧本「しかし、風が強いな。」

そうですね。

しかし、今年は災害が多くないですか？。一応wikiで2011年の日本での出来事を置いときますね。

霧本「えーっと。3.11の地震をはじめ一月には山陰地方、記録的な大雪で漁船が422隻転覆。・・・他にも鹿児島、宮崎の養鶏場にトリインフルエンザが確認。」

二月にも確認されていますね。後は、三月の地震をきっかけとした地震に・・・

七月と今回の台風・・・。

今年は厄年か？。

霧本「まあ、情報を鵜呑みにするのは良くないな。

詳しく調べたり他の情報としっかり照らし合わせたほうがいいな。」

そうですね。

皆さん台風や情報には十分に気をつけてください。

因みに、重機関銃を一人で運用したシーンの元ネタは

<http://www.nicovideo.jp/watch/sm15326132>

→とある毒舌軍曹の軍事大百科#01 機関銃 part1 の動

画の18..50秒当たり。ジョン・バシローンとミッジ・ページです。

しかしこの軍曹のジョークはWWW。

それでは。次回にご期待ください。

第二十五話「孤立」(前書き)

目指すは週一更新。その第一歩目。

ゲストはめつきり登場していない秘書、吉月明さん。

吉月「で、僕の出番はいつになったら来るんだ?。」

未定。

吉月「出してくれ。と言うか、政治サイドの人國務大臣たちを除いてほとんど出演していないじゃないか!。」

・・・・・技量不足です。すみません。

吉月「だれでもいいから早く出してくれよ。
それじゃ、第二十五話「孤立」どうぞ。」

あ、俺のセリフ。

第二十五話「孤立」

同日

午後九時三分。

陸上自衛軍

稚内市

＞町田耕哉陸士長＜

山崎「お前何してるんだ？。」

町田「タマを守るのさ！。」

と、言ってみたら周囲からへんなものを見る視線が突き刺さる・・・。

今の状況を簡単に説明すると敵の占領下のご真ん中でブラックホークのテイルローターが対空ミサイルに当たり墜落。

その乗員を救出しようとしたチヌークが自ら生み出した風圧で飛んできた瓦礫にローターをぶつけ

建物に突っ込む形で墜落。そのことを上層部に報告したら 彼らを援護せよ！ との命令を受け

上空から支援して、今に至る。

チヌーク、ブラックホーク、はお互いに精々五メートル十メートルくらいしか間隔が無いので援護が楽・・・。

パイロット「対空ミサイル接近！。駄目だ、何かにつかまれえ！。」

なにい!？。

心の中でそう叫びながら壁につかまる。次の瞬間、気体が揺れて回転しながら一気に高度が下がる。

コクピットからは警告音とパイロットの怒号が聞こえ周りからは絶叫と悲鳴が。外に目を向ければ地面がすぐそこ。

そして、がしゃんという音とともに意識を失った。

――――――徐々に意識が覚醒する。体の節々が無茶苦茶痛い。痛みを堪えながら周りを見渡そうとしたらいきなり銃を渡された。え?、なんでAK-74?。

山崎「早くこっちに来て手伝え」

いきなり山崎の頭に銃弾が当たり崩れ落ちる。

一瞬何が起きたかわからなかった。が、すぐに把握し外に出る。

……くそつたれ、ぶっ殺してやる。冷たい怒りを抱えながら周囲の状況を確認する。

さて、メタになるがこの小説を見ているやつはブラックホーク・ダウンという映画を知っているだろうか？。

知らない人は是非見てみるといい。MADでも予告動画でもいいから。

今の状況がまさにそれだ。但し映画と違うところがある。

ひとつは映画では友軍がアメリカ海兵隊だが、ここでは陸上自衛軍であること。

二つ目は敵が弱い民兵ではなく結構強いロシア……もといシベリア兵であること。

三つ目は暗視装置が使えないこと

四つ目は……

田中「ブラックホークがうらやましい！。装甲があって妬ましい！。」

結城「口より弾幕を張れ、馬鹿もん！。イロコイの装甲が薄いのは全世界共通だ！」

「後方から弾薬を持ってきました！」

墜落したヘリがイロコイ、ブラックホーク、チヌークの三機で、建物にチヌークが突っ込み、それを守る形でイロコイとブラックホークが墜落しているということだ。俺が目覚めたのに気づいたらしくすぐに指示を出す。

結城「目覚めたか！。さっさと弾幕を張れ！。やつらを近づけるな。」

了解と返事を出すことなく撃ちまくる。結構反動があるものの扱いにくくは無い。

と、第四班の通信兵、日野陸士長の無線内容を結城分隊長が聞いている。

結城「援軍の到着まで後何分だ！？。」

日野「後二分だそうです！。」

結城「もうすぐで援軍が来る！。それまで持ち堪えろ！。」

周りでは弾丸と怒号が飛び交っている。

しかし、援軍の到着まで後二分って結構時間かかりすぎじゃ……。

。周りをたくさんシベリア兵に包囲されてるんだぞ？。しかも時々RPGが飛んでくる。……増援が着いた時には死んでるかもな、これは。

結城「神楽！、狙撃やめて機関銃に持ち替えろ。」

神楽「どこにあるんですか！。」

結城「ほれ！。これだ！。」

因みに弾薬を持ってきたチヌークの隊員によると、チヌークが突っ込んだ建物はどうやらシベリア兵が接収していた建物らしく、建物内部から襲撃はあるが弾薬や銃器もたくさんある。自分の弾薬がなくなったやつから鹵獲し、使用しているらしい。成程。つまり、俺の意識が途切れているうちに弾薬を誰かが使用してそれがなくなったから敵の銃――――AK-74（グレネードランチャー着き）に持ち替えさせられたか。

西山「くそっ、これじゃきりが無い。」

結城「構うな。弾幕張って敵の活動を抑制すれば十分だ。ブラックホークの援護をしろ。ブラックホークが危ない。」

「「了解!。」」

鹵獲した銃についていたグレネードを数発発射。ブラックホークに攻撃していた敵に当てる。

ついでにこっちに向かって撃っていたやつにもグレネードを撃つ。

冬野「こちらブラックホーク!。また敵のヘリコプターが向かって来た。」

誰か落とせるやつは無いか!?。」

ブラックホークの方向を見ればロケット弾を搭載したMi-17が

接近。

攻撃を仕掛けようとしていた。

結城「うちの神楽が打ち落とす！。神楽。弾はあるか？。」

神楽「あります！。」

結城「よし、水城！。観測頼む。」

水城^{みずしろ}二等陸曹「了解！。」

弾丸を装填する音が聞こえ三点バーストで銃声が聞こえヘリのコクピットに命中。

不快な音を立てながら墜落した。

因みにこの時神楽の対物ライフルをはじめて見た。――――バレットM82。

結構メジャーな対物ライフルで、キャリバー50と同じ弾薬を使用する。

神楽「これでもうライフルはの弾薬は無くなりましたよ！。」

西山「いや、無反動砲にまだ弾が残っていたはず。」

結城「確認しろ！。」

怒号が響く中、ジェット機の轟音が聞こえる。

上を見上げれば赤い円が描かれている無骨な航空機——F—4E改二機が爆弾を投下していた。

暗闇に浮かぶ赤い炎。そこから、悲鳴や断末魔が聞こえる。

そして、そこからチヌークが二機飛んできた。が、同時にMi-24が接近してきた。

結城「くそっ。西山！。あのハインドを——ガッ！?。」

水城「班長！」

結城分隊長が撃たれた！。腹部を銃弾が二、三発貫通している。すぐに応急処置が始まる。

弾が飛んできたであろう方向を見るとBTR-80が機関銃を撃ちながらこっちに向かっていている。

たちまち動揺が走るが、それもすぐに収まる。

水城「落ち着け！。西山はハインドを。ほかは威力の高そうなものを片っ端からBTRに撃ちこめ！」

「「了解！」」

各々、鹵獲したグレネードやてき弾、手榴弾をBTR-80にぶつけるもあんまり効果が無い。

そして砲塔がこっちに向いて・・・何かいいものは無いか!?。

探しているとRPG-7とその弾頭が・・・これは使うっきゃない。

町田「みんな離れろ！。RPGを使う！」

そう言い、弾頭をねじ込み周囲に人が居ないか確認し狙いを定め引き金を引く。

ガシューンと言う音と共にRPGから発射された弾頭は独特の軌道を描きながらBTR-80に命中した。

と、同時に救助に來たチヌークに接近していたMi-24も撃墜された。

水城「西山、町田。ナイスだ！。全員聞け！、このまま救助へりまで走れ！」

無線に退却を叫ぶ水城二曹。

了解と返事をするまもなく走り出す。結城分隊長の肩を支えながら、救助へりまでいく。

水城「もたもたするな！」

途中で水城二曹に急かされながらも何とか救助減りにたどり着く。結城分隊長を置いた後は、持っていた銃で残ったやつらの撤退を援護する。銃弾やグレネードを遠慮なく撃ち込む。そして救助へりが離陸しハッチが閉まった時、一気に疲労が押し寄せてきた。

思わず床にへたり込む。一応意識を失うまでのものではなかった。……しかし、山崎が死ぬとは。やつとは同期で訓練生時代か

らの付き合いだ。

教官に怒鳴られながら必死で走ったのは今ではいい思い出。現在でもそれは変わってなかったりする。

しかし、それはもう絶対に出来ないだろう。そう思うと自然に涙が出る。

「おい。」

声をかけられたので涙をぬぐい振り返ると・・・

山崎「何だ？、泣いてたのか？」

血まみれの山崎が立っていた。そして俺は絶叫とともに意識を失った

駐屯地に帰還した後知ったが、俺が最後に見た山崎は幻でも幽霊でもなく本物で、頭に銃弾が当たったが、ヘルメットにより無傷であったとの事。血まみれの理由は結城分隊長の止血作業で地が飛び散って顔面にかかったかららしい。

とりあえず一発本気で殴りそこから殴り合いになり土や隊長から大目玉を食らった。

稚内奪還作戦の方は成功した。俺達が敵地に取り残されたので戦力が分散される事態となり、おかげでスムーズに作戦が行えたとの事。ようは囨にされたということ。

・・・もっと早く来て欲しかった。一応夜間と言う環境であった

のが幸いしたのか、俺達が奮戦していた場所の戦死者は六人と少なかった。うち二人が墜落した時に死亡したので戦闘の際の戦死は四人と言うことになる。

今行える事は戦死者の冥福を祈るばかりである。

第二十五話「孤立」(後書き)

マジで時間が無いので、後書きは短く行きます。

吉月「うーん。こういうのは気が引けるけど、

僕的にはあそこで山崎一等陸士は戦死していたほうがいいと思うな。

」

いや、彼はこの物語の番外の形をした何かのために暫く生き残って
もらいます。

まあ、数十年単位の暫くですが。

吉月「それって、老衰」それでは今日はここまで。次回にご期待し
てください。」せめて、セリフを最後まで言わせ」

ブツン

第二十六話「準備」＋ α & β （前書き）

今回は豪華三本立て。でも、ゲストは前回と変わらず、吉月明さんです。

吉月「豪華なのは置いといて。何故、三本立て？」

本来なら、陸自の揚陸準備だけだったんだけどネタ不足で、三本立てになりました。

吉月「内容は揚陸物資積み上げに第十八話で撃墜された木戸空曹長と野本一等空曹のその後に、空自サイドの雑談か。」

それでは、第二十六話「準備」＋ α & β 。どうぞ。

第二十六話「準備」+α&β

八月十二日

午後五時〇分

陸上自衛軍

＞町田耕哉陸士長＜

稚内奪還作戦終了後、俺達は一且旭川駐屯地に戻り休息をとり、室蘭港に向かった。

何でも北方領土上陸に使われる予定の部隊が稚内奪還作戦で使われて結構損害が出たために再編中らしい。一部の自称平和主義者が騒ぎそうだが上からの命令だし従うしかない。

まあ、悲願の北方領土奪還だからしない理由もない。

さて、俺達は現在三両のリアカーで物資の積み込みの手伝いを朝から行っている。

町田「あと少しで終わりそうだな」

山崎「その後どうしようか?。」

弓川「そりゃあ、適当に仕事探すしかないでしょう。」

西本「会話だけ見ると何だか職を失った人みたいだな。」

田中「いや、見えないだろ。」

と、たわいも無い会話をしながら、物資を積載したリアカーを運搬している。

後もう少しと言うところで背後に気配を感じる。振り返れば補給科のやつと目が合ってしまった。

「お前さん、これを機甲科の連中に持っていってくれ。

ちよっと、向こうでミスが起きてな。すぐにに向かわなきゃいかん。と言うことで頼んだぞ。」

と一方的にまくし立てられ、ドラム缶をつんだ台車を任された。

町田「え？、ちよ、ちよっと！？。・・・あやややや。」

田中「で、どうするんだ？。」

町田「仕方ない。ちよっと届けてくる。リアカー任せたぞ、西本。」

西本「了解。」

山崎「じゃあ、荷物降ろしたところで待ってるからな。」

補給科の人から燃料の入ったドラム缶を載せた台車を指定された場所へ届けに行く。

西本「ところで、あややややって何だ？。」

田中「さあ?。」

山崎「お前ら、喋ってないで行くぞ。」

途中で方向を逆送するも何とか機甲科の場所へ到着する。74式戦車や90式戦車。最新の10式戦車が鎮座している。これで61式戦車がいれば国産戦車勢ぞろいだな。

とりあえず、与えられた仕事をこなすためにそばにいた機甲科隊員に声をかける

町田「すいませーん。このドラム缶はどこに?。」

「そいつは向こうに置いといてくれ。」

厳つい機甲科隊員が場所を示す。それにしても良いガタイだな。普通科に入ったほうがいいんじゃないか?。

そんな視線に気づいたのか、笑いながらこういつてくる。

「どちらかといえば機械を操るのが好きでね。まあ、最初は「普通化に入ったほうがいいよ」、なんて地連の親父にしつこく言われたがな。」

「車長。ちょっと来てください」

「あいよ!。じゃあ、縁があったらまた会おう。」

あれ、あの人一等陸曹・・・・・・・・失礼な事はしていないよな・・・・・・
とりあえず、今機にしても解決しないので荷物を運んだ場所へ向かう。
途中、迷い込んだ猫を保護し、外へ逃がす。ここって漁港でもあるからな。
魚の匂いに釣られてきたのだろう。

田中「お帰り。」

町田「ただいま。」

山崎「遅かったな町田。土屋隊長がLAMと軽MATを積み込めたとよ。」

町田「了解。みんな、行くぞ。」

その後もあちこちの積載作業に借り出され、今日は終了した。

同日

午後八時〇分

航空自衛軍

オホーツク海

＞木戸空曹長＜

不幸だ・・・。

心の中で何度目か分からないが呟く。

撃墜された俺達是一日漂流した後、シベリアの捕虜となっている。

航空救難団のU-125Aがきたはいいが、その後シベリア軍の潜水艦が浮上し対空ミサイルを発射。

U-125Aは何か逃げたものの俺達は捕まり現在倉庫に縛られて閉じ込められている。

最初はすぐに港に送り届けられると思ったが、哨戒任務をしているせいで中々出してもらえない。

因みに哨戒任務をしていると分かるのはシベリア兵がそう言っていたからだ。

野本「暇ですね、曹長。」

木戸「そうだな。そして、寒い。」

暇である。

トランプでもあれば暇を潰せるが、残念なことに捕虜になった時武器と一緒に持ってかれた。

と言うことでこうしてしゃべっているわけだ。

しかし、しゃべっているだけでは暇だ。それに、一日しゃべり続ければ誰だって飽きる。

せめてトランプが出来れば……。ま、グダグダ言っても仕方ない。

木戸「とりあえず寝るわ。おやすみ。」

野本「え、寝るってこの状況「ZZZZZ」寝るの早っ。」

戦闘の疲労やら何やらで眠い。とりあえず状況を野本に丸投げする。
野本の声がだんだん……。ん……。き……。こ……。え……。
・ZZZZZ。

＞野本一等空曹＜

まさかこの状況で眠るとは……。しかし話し相手がいないのはなんとも寂しい。
何とか暇を潰せそうなものを探す。

ガチャリ

うん？。誰が入ってきたのか？。

「オイ、メシダ。」

熊のようなシベリア兵が食べ物を持って入ってきた。

暖かい食物を期待していたが、どうやらあまり暖かくなさそうだ。寝入ったばかりの木戸曹長を起こすために体をゆする。

野本「おい、起きろ。」

木戸 「Z
Z
Z
Z
Z
・
・
・
・
・
フン!
」

ゴ
ス
ツ

野本「オブア！」

鳩尾を強く寝ぼけた木戸に殴られ、意識を刈り取られる。

最後に見たのは呆然としているシベリア兵。

後は頼んだ。
・
・
・
・
・
○

同日

同時刻

＞鷺田雄大三等空曹＜

晩飯のハンバーグを食いながら、テレビを見る。テレビの内容は日本とシベリアの戦争について取り上げている。日本とシベリアの戦争の政府呼称は北方事変と呼んでいる。

空守「あいつ等大丈夫か?。」

鷺田「何だ?。北海道に恋人でも。実は俺、結婚するんですってやつか。」

空守「ちげえ、それは死亡フラグだし、恋人もいねえよ。海自と陸自に知り合いがいてな。海自の奴はまきなみに乗艦していて陸自のほうは大宮駐屯地に所属しているが、今は北海道で任務についているんだ。」

鷺田「ちよっと待て、まきなみって言ったら最初に被弾した艦じゃない。」

空守「ああ。今連絡が取れなくて心配している。全く、心配事があるのに最近中国から飛んでくる軍用機が多くて困る。」

ため息を吐きながらざるそばを啜^{すす}る。って、つゆつけるの忘れてるよ。相当心配しているな。
顔、しかめてるし。

尾咲「あら？、いったいどうしたの？。そばにつゆつけないで。」

空守「いえ、そばにつゆをつけ忘れただけです。」

鷺田「何でも北海道に陸自と海自の知り合いがいるらしいですよ。」

尾咲「ああ、なるほど。でも、心配しててもこっからじゃ何も出来無いわよ？。」

空守「ま、それもそうですね。」

一気にそばを啜^{すす}り完食する。どこと無く吹っ切れているように見える。

鷺田「だが、中国軍機の接近が増えてきたのは面倒だな。ロックオン警告も出来ないし。」

尾咲「いっそのこと翼をぶつけてみるのもいいわね。」

空守「やめてください。無茶苦茶危ないです。」

尾咲「冗談よ。そんなこと怖くて出来ないわよ。」

ふむ、翼をぶつける………気をつければ行けるかも。

鷺田「それいいな。」

尾／空「「え。」」

鷺田「今度やってみよう。」

空／尾「「やめろ／やめなさい。」」

「問題ない。大型機だけにすれば効果は絶大だ。尾咲二曹、感謝します。」

そういつて、残り少ないハンバーグを食べ終わらせ、食堂を出る。皿を返し終わるのも忘れずに。さて、この方法が通じるかどうか高田准尉に聞いてみよう。そして、食堂を去り高田准尉を探した。

＞空守高士三等空曹＜

うわ、水を得た魚のように食堂飛び出して行っただな。

空守「まあ、でも。まさか翼をぶつけるわけ無いよな。」

そんな危ないことをすれば始末書書かされるかもしれないし、それに機付長に怒られる。

尾咲「いや、絶対やるわ。あの瞳はやる時の瞳よ。」

空守「分かるんですか？」

尾咲「ええ。何年あいつの姉貴分やったと思っているのよ。」

幼馴染はそんなことまで分かるのか。いや、尾咲二曹が鷺田に好意を寄せているからか？。

まあ、そんなことを気にしてもしょうがないので尾咲二曹と別れ、部屋に戻り入浴準備をした。

次の日、鷺田が高田准尉に説教をされていたが……機体の様子と話している内容から見て多分マジでやらかそうとしたな。

ま、あんなことは普通しないからな。俺は多分。……いや、絶対しないだろう。

因みにこの予想は数年後、見事に外れることとなる。

第二十六話「準備」+ α & β （後書き）

吉月「それにしても、+ α & β って。もっとマシなタイトルは無かったのかい？。」

俺の脳ではこれが精一杯です。それにおまけが二本立てだからこれでも問題ないでしょう。

吉月「うーん。」

それでは、今日はここまで。次回もご期待ください。

吉月「この小説に期待している人って居るの？。」

・・・居るでしょう、多分。

第二十七話「先制」(前書き)

やっと出来た。今回のゲストは空自サイドの高田准空尉です。

高田「俺の出番はまだかああアア。。」

うおおお！。揺らさないでください！。
ちょ、スタッフ止めて！。

――――
暫くお待ちください――――

高田「で、俺の出番はいつ来るんだ？。」

シベリアとの戦争が終わってから出します。はい。
うえ、ちょっと酔った。

高田「いや、このくらいやったほうがインパクトあるかと思ってな。」

やられる身にもなってください。

高田「スマン、スマン。」

それでは、第二十七話「先制」。どうぞ。

第二十七話「先制」

八月十三日

午前四時〇分

航空自衛軍

中標津町上空 約二万二千メートル

＞都筑三等空曹＜

E-767「空中管制機アスターより、各機へ。状況報告を行う。
現在輸送機隊は根室上空を通過し、齒舞諸島に空挺団、及び特戦群
を輸送している。護衛の第三飛行隊、及び米軍機の異常は無いよう
だ。

また、択捉島に向かっている米艦隊、及び海上自衛軍の上陸艦隊も
異常は無いようだ。

順調に事が進んでいる。揚陸作戦が発動したら、陸上部隊の援護を
しっかりやってくれ。

それと、ブリーフィングでも言ったがこの作戦は米軍との共同作戦
となる。気を引き締めてかかれ。」

AWACSの報告を聞き終わった後、周囲を見回し花沢に通信を繋
げる。

都筑「これは、すごいな。見た目は百機単位で出撃しているように
見えるが……」

花沢「錯覚じゃね？。ブリーフィングでも合計八十機って言ったた

し。

それにしても、前に戦闘機が大量に出撃する事態はまずないって知り合いにいったんだが……まさかほんとにあるとは。」

この光景を戦闘機好きが見たら興奮しそうだな。いや、誰でも絶対興奮する。現職の空自でもソワソワしているんだ。周囲には空自のF-4EJ改、F-2、F-15J、米軍のF/A-18E/F、F-16C、F-15C、A-10が確認できる。これはまさにエースコン〇ット。つか、何で米軍機が居るんだ。

都筑「ペガサス4よりアスター。何でこの作戦に米軍が居るんだ？」

アスター「それは、今回の作戦で有事になったら米軍は日本を見捨てないとアピール、

それか、上の要請に米軍が答えたかのどちらかと推定される」

花沢「なるほど。」

アスター「それとペガサス4、質問があるならもつと早く言え。」

都筑「ペガサス4、了解。」

今回のペガサス小隊の装備は以前の野付水道海戦（第十七話）（第九話参照）と違いJDAMを装備している。航空優勢の確保はF-15や米軍機に、航空阻止は対艦誘導弾や対艦ミサイルを装備した部隊に任せる。

「それにしても、夜明けでの作戦ってのは何だか燃えますね。」

「そうだな、多分来年ぐらいには「北方領土奪還の夜明け」見たいな題名でドラマ化するんじゃないか?。」

妙に緊張感が無い会話を聞きながら太陽の方角を見る。・・・・・・目が眩んだ。

俺は何をしているんだ。自分に突っ込みを入れているとアスターから通信が入った。

アスター「各機、作戦開始時刻だ。全員墜ちるんじゃないぞ。」

「はっ、そう簡単に墜ちるかよ。」

「スホーイが何だ。ミグが何だ。逆に落としてやるぜ。」

「F-4の最後の花道だ。派手にやってやんよ。」

「夜明けの作戦とは縁起がいいな。さて、暴れるとするか。」

味方の通信が頼もしく聞こえる。ただ、死亡フラグが聞こえたのは気のせいだと思いたい。

皆野「ペガサス1よりペガサス各機、準備はいいな?。」

駒野「ペガサス2、OKだ。」

花沢「ペガサス3、異常なし。」

都筑「ペガサス4、いつでもいけます。」

隊長からの最終チェックを聞き、異常が無いか確認する。
無論、整備士が徹底的に点検を行っていたし、今も異常は見当たらなかった。

アスター「作戦開始!。」

皆野「よし、ペガサス1、エンゲージ!。」

駒野「ペガサス2、エンゲージ」

花沢「ペガサス3、エンゲージ」

都筑「ペガサス4、エンゲージ」

散開し、戦闘体制に入る。

さて、今回の航空部隊の作戦は北方四島上陸作戦の発動前に脅威をあらかじめ排除すること。

その後は中標津空港、そこがやられれば女満別空港に着陸し、補給。上陸作戦の援護となっている。

俺達の部隊の目標は対艦ミサイル基地。対地攻撃可能な対艦巡航ミ

サイル ヤホントがあり、射程は300Km程。

九日のシベリア上陸時に何基か撃破し、上陸作戦の準備中にも陸自のSSMによる対地攻撃でも撃破したが、今回の攻撃でそれに止めを刺す。

それが撃破されたら、戦車や陣地を攻撃する手はずとなっている。

今装備しているのは、JDA M五発、Mark 82六発、AAM—5二発。

重装備なので結構重いがそこは、制空装備をしたほかの機体にカバーさせてもらう。

と、さっそく対艦ミサイルを見つけたので爆弾の投下体制に入る。そして、投下。JDA Mはそのままヤホントの発射装置に突っ込み爆発する。

都筑「一基撃破。」

呟くように無線で報告し、反転し再度爆撃使用とするが、そこで敵の対空戦車が近くの森林から出現し撃ってきた。

あわてて回避する。直後に俺が居たところに弾幕が殺到する。体勢を立て直すために離脱。

だが、弾幕が激しくて中々近づけない。・・・ゲッ捕捉された

都筑「誰か、援護してくれ！。捕捉された！。」

花沢「安心しろ。俺が撃破する。」

花沢の返事に安心すると、ヤホントにASM-2が突っ込み爆発。
しかもバルカンで俺にミサイルを発射しようとしたやつも撃破した。

都筑「ペガサス3。俺の獲物を横取りするとは……。」

花沢「ちんたらしているほうが悪い。」

あのヤロー。今度ぶっ飛ばしてやる。

さて、ASM-2で対地攻撃できないんじゃない？。と言う人のためにざっくり解説すると花沢の装備しているASM-2は最新のD/L型で最終誘導時に中間誘導時にGPSで誘導、
終末誘導時には赤外線画像を発射母機へ送信して発射母機からの誘導行う。つまり、対地攻撃も可能となっている。
どこぞのフライトシューティングみたいにロックしない状態でミサイルを撃ったわけではない。

皆野「しゃべる暇があったらさっさと破壊しろ。」

隊長が眼下にロケット弾攻撃しながら注意してくる。ヤホントや対空戦車が次々と吹き飛んでゆく。

「隊長の言うとおりで。お前ら、任務しっかりやれよ。」

「了解。」

小言を言われるとは珍しいな。とりあえず爆撃の邪魔をした対空戦車の頭上にMark 82をばら撒いた。

これも二発ほど命中。だが、四発は外れたようだ。それでも外れた爆弾は一応損害は与えたようだ。

「オメガ2よりペガサス3へ。敵機が向かったぞ!。」

花沢「げっ!。後ろに着かれた。」

無線を聞き花沢機を見る。必死で、後ろに着いたSu-27を振り切ろうとしている。

花沢「うお!、撃ってきた!?。」

都筑「ペガサス3。今助ける。FOX2!。」

対空誘導弾が弧を描きながらフランカーに突っ込む。爆炎に包まれ墜ちるフランカーを見ながら、これが初撃墜と思考する。

だが、空中戦では一瞬の気の緩みが仇となる。別のフランカーが持ち前の機動性を駆使し後ろについてしまった。

都筑「しまった。」

「ペガサス3!。そこを動くな!。バルカンで撃つ。」

「りよ、了解!。」

だが、フランクのパイロットは中々錬度が高いらしい。隊長の攻撃はよけられそれどころか機関砲攻撃を受けた。

姿勢制御――右ロールとピッチの操作が困難になる。右の主翼を見ればぼろぼろの穴だらけ。尾翼も同じだろう。

「くそっ、!。」

皆野「都筑!。FOX2!。」

隊長からミサイルが発射された。おそらく命中し気体は火達磨に包まれているだろう。

だが、ダメージが酷い。これは駄目だ。

都筑「隊長、これは基地まで持ちそうにありません。」

皆野「そうか。ペガサス4。すまない。」

都筑「いいえ。ベイルアウト!。」

脱出する。脱出直後に機体を見れば、水平尾翼の一部が消えていて

右の主翼が今にも取れそう——いや、今取れた。

地上に無事降下しパラシュートをはずす。
そのとき無線がなった。

駒野「あと二時間ほどで陸上部隊がここから北東の海岸で上陸作戦を行う。それまで捕虜になるなよ。」

都筑「了解。」

花沢「ペガサス4。うっかり死んだり捕虜になったりするなよ。」

都筑「おう!。」

通信の傍受され、位置を特定されるのを防ぐために無線をきる。
脱出時に持ち出した道具には携帯食料、ナイフ、自衛用の9mm拳銃、予備弾倉×2、無線、サバイバルキットなど。サバイバルキットに収納された地図と記憶に残っている脱出前の情報を統合する。
そしてコンパスで方角を調べる。

都筑「多分今ここだから……こっちか。」

生き残るための逃避行を開始した。
今が夏でほんと良かった。冬だったら死ねるな。

第二十七話「先制」（後書き）

因みに更新がここまで遅れた理由は三つあります。

一つ目は文化祭の準備でトラブルが発生し、その対処に追われていた。

二つ目は家で、i p h o n e のトラブルによりパソコンが使えなかった。

三つ目は戦闘描写に苦勞したから。

以上です。

高田「一つ目と二つ目はともかく、三つ目はお前が悪いだろ。」

・・・精進します。しかし、ソフトバンクなのは気に入らせんね。

例えば、国産OSのTRONを潰したり、バックアップのデータを韓国のサーバーに預けたり。在日韓国人限定の特別料金プラン（4500円／月で端末無料、パケットし放題）だったり。CMで日本を間接的にけなしたり、むしろ今までの携帯だけでも十分じゃないんでしょうか。

高田「うーん。今までの携帯で十分かどうかは人それぞれだと思うが。」

韓国に置くのは問題だろう。朝鮮戦争、まだ休戦状態だし。」

いつ始まってもおかしくありませんね。それに特別料金プランは電気通信事業法に思いつき違反していますしね。とりあえず、今言ったことの証拠はつきます。

<http://www.nicovideo.jp/watch/>

1316087664

高田「おい、そろそろ次回予告したほうが良くないか。」

おっとなそうでした。しかし、航空自衛隊の脱出の内容はこれであっているのでしょうか？。

いささか不安です。それでは、次回もご期待ください。

第二十八話「序盤」(前書き)

今回のゲストは木場京助君です。

木場「はい。こんばんは。」

因みに更新が遅れた理由は

1. 文化祭で公開するゲームのキャラクターデータとアイテム一部とステージの大半のデータが消えた。
2. その後建て直しを行い何とかなった
3. と思ったら今度は文化祭まで後三日と言うところでデータが全て消えていて、再び立て直すことに……

木場「うわぁ、悲惨だ。」

うん。データ管理をミスってね。おかげで三日の突貫作業のおかげで公開にこぎつけたんだけど、最終日でゲームが出来なくなり、会えなく終了。

皆さんもデータの管理はしっかりしてください。

木場「というかいきなり話が変わっているのは何故？」

それが俺だから……。

と言うことで第二十八話「序盤」どうぞ。

第二十八話「序盤」

同日

午前六時十五分

国後島沿岸

陸上自衛軍

〈町田耕哉陸士長〉

L C A C（上陸用のホバークラフト）に揺られながら俺達は国後島に向かっている。上陸地点は国後島の中央部だ。

揺られると言ってもプライベートルイアン見たいに吐くほど揺られている訳ではない。空には空自とシベリアの戦闘機がミサイルを撃ち合っている。しかし適当に飛んでいるように見えると思うのは失礼か？。

一方ではF-2が爆弾をばらばらと落とし攻撃を行っている。

上陸した時に敵が居なけりゃ楽なんだがな。

武装のチェックをしながら空中戦を見ていると切り裂くような音と共に何かが視界を横切った。

護衛艦から発射された砲弾だ。砲弾はそのまま海岸に着弾し周囲のものを吹き飛ばしている。

「上陸準備！」

号令を聞き気を引き締める。

さあ、いよいよ作戦の開始……待てよ。

ここはかつこよく行こう。

町田「OK. let's, payback time!」

山崎「お前は何言ってるんだ?。」

山崎にあきれた目で見られる。なぜだ。いい名言だぞ?。

町田「なにして・・・やる気を出すための言葉。」

山崎「そんな言葉があるか。」

どうやら、元ネタを知らないようだ。こいつ曲だけしか聞いていないからな。

町田「〇ス〇ン6の名言だぞ?。終盤あたりで出てくる言葉だ。」

山崎「意味は何だ?。」

町田「さあ、奪還の時間だ。」

町田「うん、敵が居ないのはいいことだが、あんなセリフ言った後にこれは……。」

山崎「まあ、いいんじゃないか？。その名言を言ったゲームって戦闘機主体だし。」

俺達を迎えたのはボコボコと穴が開いている大地。散発的な銃撃音。後、RPGによる攻撃だけだ。
いや、敵が少ないのはほんといいことだがな。なんか、さみしい。

土屋「おい、お前ら何やっている！。さっさと戦闘にはいらんかあ！。」

「「「りよ、了解！。」」」

隊長に急かされ、戦闘に入る。

でもこの状態じゃ、掃討作戦みたいになると思うが……。とりあえず指示を仰いだ後、橋頭堡確保のため、友軍と近くの偵察にあたることなり、建造物へ敵の搜索をする事となった。

突入する建物は平屋建ての民家なので簡単に終わるだろう。メンバーはいつもと変わらず。

周囲を見回り建物の構造を予測する。外観は赤っぽい家にちよつと汚れている壁。

構造はキッチンダイニングを含め五部屋程、外側に面している。構造の予測が終わったらそれを元に作戦会議を行う。

町田「二手に分かれるぞ。俺と弓川は表。山崎、西山、田中は裏手から制圧しろ。」

「「了解。」」

玄関の鍵を開け、部屋を片っ端から調べる。誰も居ない。

弓川「なにもない。」

町田「油断するな。何が起きるか分からないからな。」

そして、山崎たちと合流しキッチンダイニングに入る。

西山「民間人もいない。」

町田「まあ、戦闘地域だからな。避難させたんだろう。」

ふと、音が聞こえた。そう、プシュー、と言う間抜けな音。そして、異臭。

田中「まさか、ガス漏れ?。」

山崎「ガス栓を閉めろ!。早く!。」

ばたばたと混乱が起きるもガス栓を閉め窓を開ける。

新鮮な空気が入り込むのが気持ちいい。

が、今度はピッピッピという電子音が食器棚からなり始めた。振り返れば赤いカウン트가秒感覚でドンドン減り続けている。今「5」になった。

町田「逃げるぞ!。爆弾だ!!。」

俺の声を聞いて脱兎のごとく開け放たれた窓から外に逃げる。幸い窓は大きかったのでスムーズに出れた。腹時計で爆破時間を測り叫ぶ。

町田「伏せろ!。」

俺の言葉で全員が伏せた瞬間。大爆発。家が吹き飛んだ。

町田「全員無事か?。」

山崎「問題ない。」

弓川「大丈夫です。」

田中「異常なしです。」

西山「唇切つた以外は何も。」

どうやら全員無事らしい。しかし、罨を張るとは……卑怯な。

土屋「何が起きた！？。町田班状況を！」

「敵の残していったと思われる爆弾が爆発。死傷者は居ません。」

土屋「分かった。引き続き周囲の哨戒を行え。」

町田「了解。」

とりあえず、友軍部隊に罠のことを報告し、次の建物に近づく。

今度は罨は無い…….と思いたい。

俺達はあれから罠に遭遇することはなかった・・・なんてことは無く幾度も罠に嵌まった。俺達だけでなくほかの地域に偵察していた場所も敵のセンチリーガン（センサーで対象を感知し銃撃を行うもの）の銃撃を受けたり同じ罠にはまったそうさ。

その後橋頭堡周辺の偵察は他の部隊に引き継ぎ終了した。しかし、敵が居ないという事となると内陸部に撤退し、部隊を再編しているか、空自の爆撃でほとんどがやられたか。恐らくは前者だろう。

爆撃だけですむなら、イラク戦争などはあんな状況にならないはずだ。

となると内陸部に進めばゲリラ攻撃に遭う可能性が非常に高い。厄介な・・・。

とりあえず、今後の予測は上に任せて、飯を食うことにした。まだ、野外炊具の用意が出来ていないので支給された戦闘糧食？型を食べる。さすが、自衛隊。米軍とちがってレーションがうまい。

第二十八話「序盤」（後書き）

でも、木場君を覚えている人居るかな？。第十一話に登場したモブオタク風のオタクな中学生ですけど。

木場「モブオタって何！？。モブキャラとオタクを混ぜずにモブでオタクな中学生って言えばいいじゃん。」

言葉の文だ。そして自分で言うとは・・・・・・Mか

木場「Mじゃないよ！。と言うか作者も僕と一つ違いだろう！？。」「
安心しろ。姉からはおじいちゃんと呼ばれている・・・・・・。なん
と言うことだ。」

木場「作者だって自虐を言っているじゃないか。」

この件についてはここまでだ。
それでは次回にご期待ください。

木場「強引に終わらせたよ！？。」「

第二十八話「予感」(前書き)

一日遅れの投稿。今回のゲストは巻波一等海曹です。

巻波「こんばんは。」

久しぶりですな。とりあえずさっさと本編に進みます。

巻波「いや、まだ僕全然喋っていないんだけど……。」

今、PSPで投稿しているから文字入力がめんどくさい。
と言うわけで本編どうぞ。

第二十八話「予感」

同日

七時〇八分

埼玉県さいたま市北区

木場家

＞木場京助＜

朝、起きてパソコンで今朝のニュースをチェックするとトップに「自衛軍・在日米軍北方領土上陸！」と言うニュースが飛び込んだ。

木場「ついにやったか。」

制服に着替え下に降りる。

親に挨拶をして、ついていたテレビのニュースを見る。

キャスター「現在、自衛軍は国後島。在日米軍は択捉島をそれぞれ共同で攻略しています。」

また、未確認情報によりますと、既に歯舞諸島は奪還に成功したとの事です。」

国後、及び択捉に展開している戦力は第十八機関銃・砲兵師団でロシア経済の回復に伴い、機材の交代等の近代化が始まったばかりであったが、その後のロシア経済の停滞とシベリア独立前後の混乱等により完全な近代化は達成されなかった。

そのせいで配備兵器はTー55とTー80U。グラード、ウーラガン。ZUー23ー2、シルカ、ツングースカ。と新旧が入り混じっている。

北方領土上陸にはかなりの兵力が動員されて、本土からもかなりの兵力が引き抜かれている。

無論、僕の家近所にある大宮駐屯地からも例外じゃない。引き抜かれたときは本土の防衛をおろそかにする気か！？。とか批判されていたけど。

母「ご飯出来たわよー。」

木場「はーい。」

町田さんも向こうにいる。死んでいないかどうか心配になったけど、今頃はのんびりと哨戒任務に精を出していることだろう。

根拠？。テレビやインターネットでほとんど抵抗が無かったって言うってた。

それに、不良をあんなにボコボコに出来たから前線に出ているても多分無事だろうし。

さて、脳内論議はここまで。朝食を食べるとしよう。

同日

同時刻

北海道国後島内陸部

陸上自衛軍

＞町田耕哉陸士長＜

町田「誰かなんか言ったか!?。」

山崎「知らん!。そんなことより撃ちまくれ!。」

ちくしょう、ここまで残っているとは思わなかった。

状況は橋頭堡確保が完了した後、内陸部に中隊規模で先行偵察したら、大量の敵に待ち伏せされて、ついでに戦車の攻撃を受け機甲化部隊へ退却中だ。

既に車両が二、三両破壊されている。ただいまゲリラ攻撃の厄介さをこの身で体験しています、こんちくしょう。

田中「くそっ、なんて数だ!。」

町田「西山!、MMRの榴弾でやれ。」

西山「もう装填して————げっ、戦車!?。」

西山が車内に転げ込んできた。周囲を見渡せば戦車————T-55が砲身をこちらに向けていた。そして発砲。運転席に座る田中が回避行動をとる。そして難なく回避できた。

弓川「痛い痛い痛い！。バカ、踏むな！。」

西山「すまん！。」

田中「サッサと上れ！。狭い！。」

山崎「くそ、六番車が横転した！。」

山崎の指差すほうを見れば、六番車のLAVが横転している。乗員は放り出されているが、何とか生きている。救出は可能だが、車両のスペースが無い。どうしたものか……。

土屋「六番車の乗員を救出できる隊はいないか！？。」

「こちら第五小队五班。車両にスペースがあり。今横転した車両の救援に当たる。」

土屋「ありがとう。全員救出の援護をしろ！。」

思案していると味方が六番車の救助に向かった。

通信を聞き周囲の味方が一帯に弾幕を張るように攻撃をする。

こちらも無反動砲、小銃から弾丸を吐き出す。隣の味方から軽MATが飛び出しトップアタックで敵戦車を撃破する。

戦車撃破に敵がひるみその隙に救出車両と思われるHMV（高機動車）が接近し、乗員の救出に当たる。

が、敵の攻撃も絶えず、攻撃は絶やさない状況が続く。いや、逆に

押されてきている。

町田「本部、近くに航空部隊はいるか？。敵の攻撃が激しい。」

「第一対戦車ヘリコプター隊、第一小隊が現在そちらに向かつてる。もうすぐ到着する。耐えるんだ。」

町田「一繋がりで縁起がいいな。町田より全部隊。もうすぐ対戦車ヘリコプターが来るぞ！」

ヘリコプターの増援の報を聞き無線からテンションが上がった仲間の声が聞こえる。

そして、高機動車が離脱し、再び退却する。

田中「おい、この音は・・・ヘリだ！」

ヘリの音がどんどんこっちに近づいて来る。しかも一、二機じゃない。かなりの数だ。

そして姿を現したのは――――――

Ka-52だった。

弓川「ちくしょう。そっちかよ！？。」

山崎「口でしゃべる暇あったら引き金を引け！」

町田「西山、無反動砲！」

西山「もう、弾が無い！」

町田「何だと!?!」

弾が無いって、どうやって撃墜するんだよ!?!。くそつ、ここまでか。

ヘリは最初にこちらに狙いを定めたか機首をこっちに向ける。

その動作がやけにゆっくりと感じる。そして発射される——————
——————前に突然チャフをばら撒き謎の機動を取る。そしてヘリがいたところをミサイルが通り過ぎた。

ミサイルが飛んできた方向を見ると、陸自の導入した対戦車ヘリコプター、AOH-1がこちらに向かいつつミサイルを発射していた。その後ろではAH-1が追従していた。やっと来たか。

「こちらサムライ。遅くなってすまない。援護する。」

そういい、AH-1が地上の、AOH-1が空中のヘリを攻撃する。
ヘリ同士の空中戦。^{ドックフアイト}・・・胸が熱くなるな。両方とも機動性能がヘリにしては異常にあるからな。

見てみたい気もするが、混乱から回復したのか地上からの攻撃も激しくなってきた。上空の対戦車ヘリの援護を受けささと退却する。これで山場は越えた。後は機甲化部隊と合流して補給地点に戻るだけだ。

しかし俺はこの後さらに危険な状況に陥ることを知らなかった。

本部「第三小队リーダー。聞こえるか。」

土屋「こちら第三小队。聞こえる。」

本部「君達は補給が終わり次第、撃墜された空自パイロットの搜索、救難任務に当たってもらう。
詳しいことは補給が終わってからだ。」

土屋「了解。」

第二十八話「予感」(後書き)

さて、一日遅れた理由は

議論が白熱した。

以上。

巻波「それだけじゃ判らないでしょ。」

来年の文化祭で公開するRPGの設定で白熱した論議を副部長と毎回してたら遅くなった。

巻波「もう、文化祭の準備?。早いね。」

善は急げって言いますしね。

次回は遅れないように投稿します。それでは。

第二十九話「救出」（前書き）

今回はテスト期間中なので前書きとあとかきはお休みです。
それではどうぞ。

それと、一番上の年表の記述を大幅に修正したんで見てください。

第二十九話「救出」

同日

午前九時〇分

陸上自衛軍

国後島内陸部

＞町田耕哉陸士長＜

補給を終えた俺達に新たな任務が舞い降りた。空自パイロットの保護だ。

空自パイロットの救難任務は航空救難団の仕事なんだが、隠れていたシベリアの対空車両により
思うように救助活動が行えない。

そこで陸自の部隊が救出活動をする事になり、その部隊に俺達を含め第二機甲化小隊と第五普通科小隊三つの部隊が選ばれ作戦地域に向かっていると言うわけだ。

山崎「にしてもロシア製の武器ってほんとゲリラに合うな。」

田中「言われてみれば結構使われていますね。」

町田「そりゃま、そうだろう。ロシア製の武器は頑丈であることが売りだからな。」

AK-47とかは泥につけた後でも問題なく動くからな。」

ちなみに、補給地点には鹵獲した兵器が以外に合った。AK-74やマカロフ、RPG、イグラ等の携行武器や

T-55やツングースカ等の装甲戦闘車両。恐らく技研に回されて

ロシア製の兵器を参考にした兵器が出来るのだろう。

土屋「全員、そろそろ作戦地域だ。」

その言葉を聞き全員の表情が変わる。

そして、車両を停止させ降車。徒歩でパイロットの搜索に入る。

乗ってきた車両は第二機甲化部隊と代議普通科小隊に任せている。

土屋「何か見つけても飛び出してもすぐ撃つな。敵か味方かを確認してからだ。」

無線で土屋隊長の指示が入る。周囲に銃口を向けながら注意深く進む。

草むらから音が聞こえればそこに銃を向け警戒する。そして出てきたのは子熊だった。

山崎「か、かわいい……。」「

町田「山崎、任務中だぞ。」

山崎「わ、分かっている。」

そして、搜索すること十分。この地点には居ないかと、諦めたとき。

「だ……こえ……。応・して……。い。」

無線から声が聞こえた。

周波数を合わせ続けるとはつきりと声が聞こえた。

「聞こえますか？。応答してください。」

町田「こちら陸上自衛軍。第三小隊。」

都筑「やっとつながった。こちら第三航空団第八飛行隊第四飛行小队所属の都筑三等空曹です。」

町田「隊長！。無線に反応がありました。」

土屋「よし、貸せ。日野は本部に報告後後方に待機している部隊に連絡。」

「「了解。」」

そして、土や隊長が無線でやり取りした後、位置を特定。すぐさま向かうことになったが。

都筑「ちくしょう。敵に見つかった！。」

土屋「全員急げ！」

無線からは怒号と銃声が聞こえる。少なくとも空自の装備じゃ勝てない。が、幸いにも近くから銃声が聞こえる。念のためにてき弾を装着しておく。

そして、見えてきた。装甲車に歩兵が複数が洞窟に向かって攻撃を加えている。

って、あいつらRPG出してきやがった！。やべえぞ！。

土屋「全員！。撃て！。」

銃声が鳴り響く。ただし、一つだけポンツと言う音が混じっている。俺の89から発射されたてき弾だ。

さて、そいつは孤を描き着弾、敵兵を吹きとばした。が、RPGの射手は車両の陰に隠れている。

神楽「甘い！。」

そこを神楽のM82が当たり貫通する。しかも三点射で穴だらけになり火を吹く。敵ながら哀れなり。

土屋「制圧射撃開始。第三、第四班はパイロット九名を保護しろ！。」

「了解!。」

水城二等陸曹と共に救出に向かう。洞窟に入るとすぐ近くにパイロットスーツを着た男が五人いた

水城「通信に出たやつか?。」

都筑「ああ、そうだ。」

言葉を二、三交わした後に命令を出す。

水城「町田、山崎、日野。奥に行って来い。」

「了解」

奥に向かうと四人のパイロットが血を流して転がっている。

応急処置をして、さっさと連れ出す。外には高機動車五両が並んでいる。おそらく増援だろう。

車両に負傷者を積み込みその場から撤退する。

しかし、事はそう上手くいかない。

突如T-80が現れて攻撃を仕掛けてきた。

「もっと速度を上げろ！」

「これが限界です！」

T-80から逃げるために速度を最大にして逃げる。乱暴に走っているために車体が揺れ、体をあちこちにぶつけていて痛い。

町田「西川！、さっさと戦車を撃破しろ！」

西川「じゃあ、車体のゆれを何とか・・・アデッ!？」

日野「もう少しで機甲化部隊と合流できます。」

日野の言葉で希望が出る。さあ、早くこっちに来るんだ！、10式戦車！。

「こちら第二機甲化小隊。遅くなってすまない。」

俺から見て二時の方向に10式戦車。これで勝つる!!。

町田「おい、射線上から退避しろ！」

運転手にそう呼びかける。そして、発砲。重い発射音が響き敵戦車を撃破する。だが、退避した代償として頭を強くぶつけることになる。イテェ……。出血してる。

「おい、普通化部隊、無事か?。」

土屋「何とかな……。エスコートを頼む。」

無線のやり取りを聞きながら、山崎の応急処置を受ける。どうせなら神楽の応急処置を受けたい。

山崎「応急処置を受けれるだけありがたいと思え。」

町田「何故、分かった。」

山崎「顔に出てた。」

その後は何事も無く無事に補給基地に帰還した。

第二十九話「救出」（後書き）

ところで日中韓FTAと言うものを皆さんご存知で？。

どうやら特定アジアとFTAを結びたいそうです。

TPPを乗り越えても日中韓FTAと名前を変えた東アジア共同体が待ち構える罠。

今の野田は日本を滅ぼしたいようで……。

<http://www.nicovideo.jp/watch/1321555998>

→後、前原誠司の政治団体、領収書の偽装が発覚。も載せときます。

第三十話「報告」(前書き)

今回はよそより早く出来たので投稿。
ゲストは鷺田三等空曹です。

鷺田「さて、俺はお前をぶっとばさなきゃならん。」

F-Xのことですね。分かります。

鷺田「話が早い。じゃあ早速。」

おっとその前に。

鷺田「?。」

第三十話「報告」。どうぞ。

鷺田「覚悟は出来たようだな。歯ア食いしばれ!。」

ゴフウ!?

第三十話「報告」

八月十四日

午前六時一〇分

内閣

＞霧本雄一郎官房長官＜

三山「齒舞諸島は全島制圧に成功。国後、択捉両島の戦闘も落ち着いてきました。

鹵獲できた兵器も相当数あります。

ですが、シベリア軍の抵抗は続いていますので慎重に進まなければ大損害を被る可能性があります。

序盤の空戦や航空支援で撃墜されたパイロット達も無事に救出しました。

陸上自衛軍の犠牲者はおよそ約二百二十六名。負傷者は四百八名。シベリア軍の捕虜は六百名ほどです。

序盤の橋頭堡確保時の罾や内陸部に引き込まれてゲリラ攻撃を受けた死傷者が多いです。

以上が昨日行われた北方領土攻略作戦の報告です。」

スクリーンに映った映像が消え部屋が明るくなる。

なるほど、大勢は決したか。しかし、油断は出来ない。樺太、ウラジオストク、カムチャツカ半島の戦力が北方領土の奪還の準備がしていると言う情報が偵察衛星からもたらされた。

それに、北海道北部及び択捉、国後では散発的且つ強力なゲリラ活動が行われている。

麻生「鹵獲兵器は本土に輸送しといてくれ。さて、問題はシベリアに残存している戦力だが……」

ウィンストン「ここはさらに上陸作戦を実施したほうがよいのでは？……」

そう声を上げるのは在日米軍司令官のジョージ・ウィンストン中将。

霧本「おっしゃることは分かりますが、現在のでは三地点同時上陸作戦実施は不可能です。」

シベリア軍の抵抗は激しく機甲化戦力も未だに残っているそうです。北海道北部のシベリア軍も同じです。」

そう、現在投入されている陸上兵力は三万五千人これに在日米軍を合わせると四万五千人だ。

内一万九千人が宗谷、上川、留萌、雄武町、西興部村、興部町に潜伏しているシベリア兵の掃討。三万六千人が北方領土に投入されている。

一応陸上兵力はそこから徴出できなくも無いが、それ以外にも問題はあ

る。上陸戦前後で艦船が不足している。それに艦船が足りたとしても未だ屈強に抵抗を続けるシベリア軍と戦う部隊から徴出した場合逆に一部を占領される可能性がある。それほどまでに抵抗は強い。

これは、特殊作戦群や特殊警備隊を使うしかないか。

平沼「休息の終わっている特戦群や特殊警備隊。それに第一空挺団を投入して破壊工作を……。あわよくば、戦闘機を鹵獲できれば……。」

え？。今とんでもないこと言いましたよこの人。戦闘機を鹵獲？。・
……。出来なくは無さそうだな。

仲尾「バカを言うな。戦闘機奪取はこの際置いところ。第一空挺団は現在掃討戦に移行。

特殊作戦群と特殊警備隊は、いつでも出撃できるが数が少ない。それだけじゃとても三地点同時攻撃はできないじゃないか。」

平沼「しかし、彼らは元々少数精鋭で特殊任務にあたることを想定した部隊。問題はない。」

仲尾「だがその程度の兵力で出来るのか？。」

仲尾国家公安委員長はかなり懐疑的に見ているようだ。まあ、言うこともわからなくはないが。

「まあ、落ち着いてください。破壊工作直後に航空自衛軍のF-2が連動して大規模な空襲を行うのはどうでしょう。」

そう声をかける文木^{ふみ}航空幕僚長。まあ、そうすれば陸上兵力が少な
くても十分な効果は望めるが……

霧本「防空網はどうする？。あれをどうにかしないと航空部隊は大損害を被るぞ。」

「そこは我々の工作で破壊するのです。」

俺の質問に答える浜塚^{はまつか}陸上幕僚長

霧本「空軍基地はどうする？。」

浜塚「その点は問題ないでしょう。陸空合同演習時は陸自は空自基地に毎回潜入しています。それこそ、トラックにまぎれて潜入したり、変装して内部に入ったり。色々な経路から。」

実績を聞き納得する面々。徐々に作戦の概要が決定し最後のまとめに入ろうとしたところに……。

麻生「ところで戦闘機は鹵獲するのか？。」

麻生さんの言葉でそのことを思い出す。

小泉「いや、戦闘機の鹵獲は不可能でしょう。」

平沼「いえ、不可能ではありません。鹵獲のために空自パイロットを確保できれば。」

仲尾「だが、現実的でないのは確かだ。」

阿部「空自の兵士は特戦群、第一空挺団と行動出来るのですか？。出来るなら鹵獲しても損はないかと。」

と、戦闘機のことと延々と議論する羽目になった。

結局戦闘機の鹵獲は救出部隊とともに現地に到着後、鹵獲した機体に乗って逃亡することになり

作戦内容は決定した。

同日

七時二十分

陸上自衛軍

＞倉持心助一等陸曹＜

朝食を食べていたら中隊長から命令あった。敵施設に打撃を与える作戦のために一度北海道に戻れとの事だ。そして現在チヌークで移動中だ。機内は俺のの所属している小隊の面々がそれぞれ喋ったりUNOをしたりして暇を潰している。

「にしても今度はどんな作戦になるのかねえ。」

隣で俺の相棒兼分隊副隊長の岸田純きしだじゅんいち二等陸曹がハチヨン（84m無反動砲）をいじりながら呟く。

倉持「大方、序盤のみ孤立無援の作戦だろう。」

空挺部隊はその任務の特性上、孤立無援になる状態が良くある。なので俺の言った言葉は大抵の任務に当てはまる。

岸田「そりゃいつものことだろ。パイロットさん。何か知ってるかい?。」

「確か、破壊工作をするって言う噂らしいが・・・ま、目的地に着けば分かるだろ。」

自分には関係ないとばかりに適当に答えているように聞こえるのは気のせい?。

・・・まあ、いい。俺たちは上からの命令をやるだけだ。しゃべるのも飽きたのでここで仮眠をとることにした。起きる時には着いているだろう。

倉持「岸田。着いたら起こしてくれ。」

岸田「了解。なんならこれをうって一瞬で眠らせるぞ。」

そういつてグスタフを叩く。因みにこいつがハチヨンでうつと言ったときは2種類ある。
撃つと打つだ。

倉持「んな事しなくてもすぐ眠れる。昨日の疲れが抜けきってないからな。」

そう岸田に言っ
て目をつぶった
らだんだん声があ
いまいになり意識
を失った。

第三十話「報告」（後書き）

鷲田「で、F-1Xが二転三転したのは何故だ？。」

最初は魔改造OK&経済的貢献度が大きいならEF-2000でいいんじゃない？。っていう気持ちでやったんだが、EF-2000じゃESAレーダーが三機の中で一番小さいし、ライセンス生産で技術を向こうに公開しなきゃいけないし、そこから日本の技術が第三国、中国や韓国、北朝鮮に渡る可能性がある事に気づいてね。さらに、日本が参加しないとF-35の計画が中止になる可能性があるって知ってね。

それに第五世代戦闘機と言うのも魅力的だし、電子機器もEF-2000より性能いいし。

「なるほど。だからF-35にしたと。F-18はどうした？。」

あれは性能的にアウト。航続距離短し加速性能低いし、何より三機の中で性能が一番低い。整備生は高いけど。

まあ、その後欧州に欧州機も当て馬じゃないことをアピールしたりやっぱり日本への経済的貢献度が一番高そうだし、ステルス云々を除いて性能が高いしなにより、一度決定したのを覆すのもアレだし結局元に戻した。まあ、米の圧力に屈するっていう形でF-35の開発計画に参加させちゃったけど。

「おい、F-1Xは決まったんだからF-35の参加は必要ないだろう。」

B型を採用してDDHに載せる予定。計画参加はかなり叩かれたと言う裏設定もあり。ついでに、現実でのF-1XはF-35を薦める

よ。

理由は日本独自の改造をしても第三国への技術流出する可能性低いし、索敵やステルス面では圧倒的だし、ステルスの量産と言う経験がつめて国産機の生産時にその経験が役立つと思うから。

ステルスの技術移転、ライセンス生産、どの国よりも早く導入すること認めない限りF-35の導入はありえない。って言った後米政府に認められれば開発に参加、生産施設を日本において、日本導入に必要な試験が成功したら、そのまま導入。

の流れで導入できたらOK。戦闘機の導入数が増えれば最高。

単発は危ないと思うって言う人はF-2の事故を調べてみてくれ。

エンジンが原因のやつは一つもないから。

まとめると、個人的には現時点でF-35がベスト。EF-2000はセカンドベストと言ったところかな。

鷺田「何で今次のF-Xはこんなことになったんだろうか……」

空自の中の人がF-22にこだわった過ぎた事と海自の防衛機密漏えいが原因だと思う。

さて、F-Xのことはここまで。それでは次回にご期待ください。

第三十一話「潜入」(前書き)

さて、今年もいよいよ残すところ一ヶ月。今回のゲストは高田准空尉です。

高田「また、遅れたな。自分の決めた目標を守れんとは……。」

あゝ、そうですね。目標を立てているけどこれが中々上手くいかな
い。

しかも今回は何か駄文っぽい感じがするようないような……。

高田「ヲイコラ。」

駄文かどうかは皆さんに判断を任せましょう。第三十一話「潜入」。
どうぞ。

第三十一話「潜入」

八月十五日

午前二時四十八分

陸上自衛軍 第一空挺団

樺太 ホムトヴォ郊外

＞倉持心助一等陸曹＜

さて、あの後俺たちは基地に着いた後今回の作戦概要を説明された。作戦名は「冷夏の桜」。

航空自衛隊、特戦群（特殊作戦群）一個分隊と特警隊（特殊警備隊）一個分隊と第一空挺団一個小隊に第一ヘリコプター団のヘリコプター三機。さらには米軍からアメリカ空軍、第七艦隊航空隊、SEALs一個分隊とデルタ一個分隊が投入される。

作戦内容はまず、第一空挺団、特戦群とデルタの合同部隊、特警隊とSEALsの合同部隊がそれぞれ樺太、ウラジオストク、ヴィリユチンスクにそれぞれ進入。次に空自のASM-2とASM-3。米軍の巡航ミサイルとHARM等で敵防空網を攻撃。防空網破壊が完了し次第、艦艇や航空機を破壊。脱出する。俺達の任務はそれに増援部隊が来るまで戦闘機の確保が付け加えられている。増援部隊の中に戦闘機パイロットが居るのだろう。俺達の脱出は強行着陸する輸送機で行われるらしい。他は多分ヘリとかだろうな。

作戦説明を受けた後、一時休息をとり、ひゅうがに乗艦。臨時艦載ヘリとなったUH-60に搭乗し、今に至る。

UH-60に乗りながら、89の点検をする。現在はもうすぐ目標地点と言ったところだ。機内を見回せば顔にペイントを、服には偽装に草をつけている。

このヘリ以外にも別々の地点で二機ほどブラックホークがそれぞれ

一個分隊ずつ乗せて飛んでいる。

それにしても恐ろしいほど高度が低い。ちょっと足を伸ばせば木に触れるぞ。

と、心中で呟いていると視界から木が無くなってきた。

「よし、そろそろ降下地点だ。幸運を祈る。」

パイロットの声を聞き気を引き締める。チャカチャカと銃を操作する音が機内に響く。

ここからは陸路で向かう。現在地は空港からおよそ八キロの地点。普通なら根を上げるとこだが、俺たちは陸上自衛軍の第一空挺団。この程度でへばったりはしない。

倉持「総員降下！」

俺の号令とともに分隊はラペリング降下する。

今頃は他の地点でも降下しているだろう。

降下後、速やかに移動する。銃口をあたりに向け、敵が居ないかを確認。

そして、前進を開始する。

敵兵と遭遇せずに空港に着いたら最高なんだが
しかし、ここは敵地。敵兵がいるのは必然なわけで。

岸田「前方に敵の歩哨二名。」

案の定敵兵が居た。しかも、しっかりと警戒している。

倉持「清野、久野お前らがやれ」

久野^{くの}三等陸曹／清野^{きよの}三等陸曹「了解。」

この分隊の狙撃手の清野、久野両三等陸曹に敵兵を任せる。
特製サプレッサーをつけた64式7.62mm狙撃銃とM24で敵
を狙撃し歩哨二人を処理。

岸田「ナイスショット。」

清野「いい夢を。」

倉持「死体を片付けるぞ。」

死体を近くの草むらに片付ける。そして前進。余計な感傷に浸っている暇は無い。

道なき道を突き進む。頭上では防空網破壊のためのミサイルの轟音が響いている。

今頃シベリアは必死にミサイルとかを迎撃してるんだろうな。
と、のんきに考えていると、今度は小屋を発見。

倉持「中に四人か。放置しとくぞ。」

久野「ポーカーやってる。命拾いしたな。」

どうやら中の歩哨らは自分達の防空網が攻撃されているのに、ポーカーをやっているらしい。

もしかして民兵か？。とりあえず、こちらに気付く様子もなさそうなのでそのまま素通りする。

民兵を素通りした後は途中で歩哨をやり過ぎしたり、狙撃しながら早歩きで向かう。

そして草原に出る。空港まで後数百メートルと言うところで大規模な部隊を捕捉した。しかも装甲車つき。

岸田「全員伏せろ。急げ！」

あわてず、騒がず、すぐに草むらのそばに伏せる。顔面にはペイント、服には擬装用の草が。周りには結構長い草が生えている。こういう歓迎はやり過ぎすのが一番だ。

嚴重に探さなければそう簡単には見つからない。

倉持「全員発砲はするなよ。」

小声で無線機に喋る。

まあ、分かっているとは思うが――――

ガサ、と俺の近くに足が地面を踏みしめる。

見つかったか。と上を見上げる。

その男は何事も無く立ち去っていった。

そして、装甲車のエンジン音が遠ざかってゆく。

岸田「よし、行ったぞ。」

その声に反応し、後ろを警戒しながら立ち上がる。

一番後ろにいたのは岸田らしい。

清野「倉持一曹。全員撃つなって……全員あの状況で撃てばやばいって分かってますよ。」

倉持「そうか。とりあえず空港へ向かうぞ。そろそろ防空網が破壊し終わる頃だ。」

少々駆け足気味で集合地点へ向かう。後ろを振り向けばさっきの大量舞台が移動している。

気づかれなかったようだ。

そして、無事に集合地点に到着する。

樋口^{ひぐち}三等陸尉「遅かったな。」

到着するとそこには他の分隊が既に到着していた。小隊長の樋口三等陸尉がタバコを吸いながらこちらをニヤニヤと見つめてる。どうやら俺達が最後らしい。

倉持「ちよつとポーカーの賭け試合を見たからな。」

樋口「んなもん見んなよ」

さて、着いた後は防空網破壊までまだ時間があるわけだが。とりあえず水筒の水を飲む。

樋口「倉持。今度はもっと早く来れるように訓練きつめにしといてやる。覚悟しとけ。」

相変わらずのにやけた顔でやばいことを言う小隊長殿。
と、真面目な表情に変え命令を出す。全員銃を持ち闘争本能をかもし出している。

樋口「さて、倉持等も着たことだし全員、作戦を開始するぞ！」

「了解！」

さあ、パーティーの始まりだ。

第三十一話「潜入」（後書き）

しかし、今回のF-Xは前途多難ですね。

高田「前回もF-Xの件で長かったな。後書き。というか、F-XはEF-2000に決定したのに何故JSFに参加させた。」

まあ、TPPの締結を避けた代償で参加したと言う設定です。本音はF-35の開発が日本産かせないとやばいと聞いてやってしまった。ついでに、F-35派からEF-2000に鞍替えしました。

高田「例の金属疲労で亀裂が走った件か。」

ええ。ぶっちゃけF-35かEF-2000が望ましいと思ってたんですよ。

F-18は電子機器はいいけど用途がF-2と被るし、何より航続距離や加速力が残念。

その点EF-2000は機体性能が一番いいし、航続距離や加速力もいいですし、日本の航空産業への利益が最も大きい。

そして何より現状の欧州は経済がやばいですからもし、F-XでEF-2000を採用しなければ中国に兵器を輸出して面倒なことが起きかねません。

高田「だが、最近のミサイルは撃てばほぼ必中だし、F-18は電子機器の性能が三機種の中で一番高いから戦闘能力も現時点ではトップクラスだぞ？。実際フォークランド紛争で飛行性能が低いハリアーが最新の電子機器とミサイルを装備して、古い電子機器を搭載した飛行性能がハリアーより高いミラージュ？をボコボコにしたからな。」

それにEF-2000を日本で改造すると、技術が韓国や中国にも
れる可能性があるから容易に戦力化が可能で現時点で戦闘能力がト
ップのF-18を導入したほうがいいと俺は思うが……。」

難しいですね。EF-2000は電子機器で三機種の中で一番下で
すし……。

まあ、決めるのは一人一人の意見じゃなくて国民と防衛省の偉い人
が決めるんですけどね。

さて、今日はここまで。それでは次回にご期待ください。

第三十二話「鹵獲」(前書き)

すいません。バイトは23日からでした。今回のゲストは尾咲二等空曹です。

尾咲「もう少し、注意してバイトの日程確認しなさいよ。」

はい。しかし、こうも更新の期限が守れないとは・・・やっぱり戦闘描写は苦手だ。

尾咲「一応、時間がかかるだけじゃないの?。」

苦手だから時間がかかるんです。

それでは、第三十二話「鹵獲」どうぞ。

第三十二話「鹵獲」

さて、空港に移ってからの行動予定はいたってシンプル。

三人一組に分かれ潜入。指定された場所に爆薬を仕掛け爆破。その後、増援部隊が来るまでに空港に立てこもると言うものだ。

倉持「こちらC-2。チャーリーチャージ（爆薬）の設置が完了した。」

空港に潜入し、弾薬庫にC4を仕掛け終え無線で報告する。

樋口「よし、集合場所に向かえ。防空網の破壊完了の知らせが入り次第爆破するぞ。」

倉持「了解。いくぞ。」

清野と久野の二人を引き連れ所定の位置——予備戦闘機の格納庫へ向かう。

どこぞのゲームみたいに吹雪が吹いていないので堂々と歩けないので、夜陰に紛れ慎重に向かう。

途中で戦闘機の発進音にビビりながら格納庫の裏口から進入。内部にはSu-27とMiG-31がそれぞれ二機ずつ鎮座していた。近くには十組のうち八組が既に陣地構築作業をしていた。

倉持「とりあえず、小休止だな。」

黒木陸曹長「お前ら、陣地構築を手伝え。」

そして、先に待機していた黒木陸曹長や岸田の隊等と雑談しながら陣地を構築する。

雑談内容は何てこと無い。今度のコミケに何を出すかだ。去年は東方Projectシリーズだ。

何でコミケかといわれると、どういうわけか陸上自衛軍はオタク趣味な隊員がかなり居る。

そして俺らの小隊は東方ファンの人が結構居る。

俺もその一人だ。

PX（売店）には軍隊の雑誌よりアニメ系の雑誌が多い。

後○○○な雑誌。これらで発散しているんだ。

何を発散しているかと言えば・・・・・・ナニ？。

ちなみに、ミリオタは俺の知っている限りいない。

さて、こうして時間を潰してみたものの陣地構築が完了し何分立つても、小隊長が来ない。首をかしげていると無線からの連絡が入る。

樋口『スマン、敵の部隊がたむろしていて動けん。そっちには現状じゃ向かえない。それと、防空網の破壊が完了した。俺が合図したら爆破だ。』

黒木「了解。倉持、岸田、西間^{にしま}。お前らの隊は二階に行け。俺たちはバリケードを築き一回で応戦する。お前等は上から援護を頼む。」

倉持「OK。いくぞ。」

岸田たちと二階に上り体制を整える。

陣地のほうはバリケードを設置したり格納庫にあった航空機関砲を使い即席の銃座を作る。口径三十ミリだから大抵の装甲車には効果がある。上の階には設置していない。

二階に上ったやつの内訳は、機関銃手二名に狙撃手二名、小銃手四名、対戦車手二名の十名だ。

二つ入り口があるので、二手に分かれ入り口をカバーする。

樋口『いいか？。三、二、一、〇で爆破だ。』

無線を聞きながらC4のスイッチを握る。

樋口『三、二、一、〇！。』

スイッチを押す。瞬間、紅蓮の炎があちこちに立ち上る。

一瞬の間の後、非常事態を知らせるサイレンが鳴り響き警戒態勢になる。

黒木『いいか。ここは何が何でも守りきるんだ。』

無線から黒木陸曹長の命令を聞きながらざっと点検をする。

そして、格納庫にシベリア兵の部隊が接近しているのを見てすかさず射撃。一人倒れる。

倉持「お前ら。これからどんどん来るぞ。」

そして俺の言葉通りぼつぼつと敵が現れ始めた。
指示を出し、敵の接近を防ぐ。

敵はまだそんなに数は無いので単射で精密射撃を行う。無論敵もこちらに気づかないわけも無く、攻撃してくる。

黒木『バリケードの設置が完了した。敵の様子はどうなっている？』

倉持「ドンドン出てきている……岸田！、装甲車！」

無線で報告しているときにBTRがこちらに来た。

すかさず岸田に指示をし、マルチカールで破壊させる。その間にも
どンドン敵が来る。

黒木『そのまま上から撃ってくれ。』

倉持「了解。」

無線がきられると、下から銃声が聞こえてくる。下も交戦を開始したようだ。

散発的な銃撃音とともに次々と敵が倒れる。ただ、こちらも無傷とは行かないわけで……

久野「がつ!?!」

清野「久野!。大丈夫か!?!」

久野「この程度でやられてちゃ空挺団勤まらねえ。オラ、お返しだ!。」

そう奮い立ち狙撃銃を乱射する。そしてことごとく敵に当たっている。無理にとめようとした場合は右フックが来るので弾が無くなるまで放置する。

撃ち終わった後簡単な応急処置をして再び攻撃を開始する。

清野「くそっ、撃っても撃ってもきりが無い。」

青山三等陸曹「時間さえ稼げれば問題ない!。というか、輸送機はあと何分ぐらいで到着するんだ!?!」

清野と機関銃手の青山が叫ぶ。

確かに、今は抑えられては居るがあまり時間がかかりすぎるようだと弾薬が無くなって大変な事態に……。

倉持「弱音を吐くな!。待っていればきつと来る。」

部下二人を励ましながら射撃を続ける。

下では設置された三十ミリ機関砲が歩兵や装甲車をドンドン撃破していく。
三十ミリは伊達じゃないか。それでも弾薬の問題であまり多く攻撃出来ていないが……。
俺達も負けじと射撃する。

『こちらシルフ。現場空域に到着した。』

無線から救出部隊の声が聞こえた。空に耳を肩身ければ轟音が聞こえてくる。
見上げればF-2が轟音と共に空港上空を旋回している。増援部隊の到着の沸き立つ。

岸田「RPGだ！」

突如俺達の建っている場所が崩れ落ちた。
視界が回り地面に激突。ブラックアウトする。

何秒か、何十秒か
頭を振り意識に覚醒させる。

そして、BTRが正面に……腰からフラッシュバンを取り出し投げつける。

装甲車と言えど窓に閃光を食らえば見えないはずだ。

閃光で身動きが取れない間に落ちていたマルチカールを使う。

倉持「どわぁ!?!」

但し、至近距離で撃ったために爆風で吹き飛ばされる。
だが、BTRは爆発炎上。見事撃破したわけだ。

倉持「おい。全員無事か!?!」

岸田「な、何とか。」

清野「おい、しっかりしろ!」

久野「くっ、いてえ。」

血を流しながら何とか返事をする倉持に清野。
だが、久野と青山が血を流し倒れている。
久野は何とか意識を保っているが出血が酷い。青山を岸田に任せ応急処置をする。

倉持「清野!、久野を今すぐ格納庫に連れてけ!。岸田、青山の状態は?。」

岸田「……………死んでるよ。くそつたれ。」

倉持「……………そうか。」

青山のタグを改修し、格納庫へ向かう。
後方から戦闘機の攻撃音を耳にしながら格納庫に入った。

「おし、全員そろったな。」

入り口の発見に手間をかけながらも格納庫に入った俺たちは今後の予定を聞く。

簡単にまとめると

一. 輸送機が強行着陸。

←
二. 中から装甲車二台が出る

←
三. 装甲車、飛行機用のドアをぶち抜き入れ替わりでパイロットを降ろす。

←
四. パイロットが戦闘機に乗るまで防衛。

←
五. 搭乗後、装甲車に乗車し折れた地は輸送機へ

←
六. その間にS u - 27とM i g - 31は離陸

←
七. 輸送機に乗りさつさと脱出。

といったってシンプルなわけだがすでに三つ目の部分もおわるっぽい。
なにせ、無線で飛行機用のドアから離れろって言う連絡が来たから

な。

そして、ひしゃげた金属音と共にドアが吹き飛ぶ。
ちょうど戦闘機が通れるくらいだな。

ドアを破ったのは・・・FV（89式装甲戦闘車）かと後ろに
は96W（96式装輪装甲車）が続いている。

FVからは樋口隊長たちが、96Wのドアからは飛行要員？
が降車してきた。

そっういやあ、樋口隊長のことすっかり忘れてたな。

樋口「遅れてすまない。」

黒木「謝罪は後です。今は飛行要員の防衛をしなければ」

樋口「分かってる。」

飛行要員は戦闘機へもうダッシュし機材を広げなにやらやっている。
漏れてくる声にはすぐに飛ばせそうとか。

俺たちの方は弾薬の確認と武器のチャックをして、迎撃準備を整える。

そして、出入り口に向かい、敵が来るのを待つ。

岸田「戦闘機の掃射であまり来ないな。」

樋口「言うな。」

だが、幸いなことに戦闘機の支援の攻撃であまり敵が来ない。
そして、戦闘機の発信準備が整ったと言うことで俺たちはそれぞれ
FVと96Wに搭乗する。

樋口「倉持、お前は銃手席に座って96てき弾（96式自動てき弾
銃）を使い！」

倉持「了解。」

命令に従い、銃手席につき96てき弾の点検をする。
そして、動き出す戦闘機二機と装甲車二両。

しかし、敵も戦闘機を奪取されまいと近づいてくる。

敵兵を96式で撃ち払いつつ誘導路の上を走りC-2に向かう。敵
はほとんどFVが片付けてくれるが……。
滑走路まであと少しと言うところで無線が入った。

『こちらシルフ。そろそろ敵が多くなってきた。早くしてくれ。』

『こちら、ベアー1（鹵獲したSu-27）。後は誘導が無くても
大丈夫だ。先に行け。』

「と言うわけだ。少し飛ばすぞ。」

そして、急加速。C-2のハッチに近づき搭乗。後からFVも入っ
てきた。

「よし、閉めるぞ。」

ハッチの操作要員がハッチを閉める。完全に締め切らないままC-2は滑走を開始する。

大丈夫か?。とも思ったが締め切ったと同時に離陸した。

『こちらベアー1。全機離陸した。』

どうやら作戦は成功したらしい。後は護衛を受けて帰還するだけだ。そう考えると急に眠気が襲ってきて俺はそのまま眠ってしまった。起きた後に額に「肉」と落書きされたの気づき不覚にも爆笑した。

第三十二話「鹵獲」（後書き）

それにしても空自のF-XがF-35に内定とは。

尾咲「確か作者はタイフーン押しだったわね。」

うん。まあ、一番要撃に向いているのはタイフーンだし。

マルチロールだし。

F-35はいろいろと問題ありじゃん。

要撃任務に向いてないし、開発はごたごたな状態だし。

F-18EFは……無難すぎてなんとも。一番落ち着いてるんだけどね。

尾咲「でも、二個飛行隊程度の配備だからF-15やF-2でカバー出来るわよ?。」

それにライセンスも認めるし、国産の技術が使えるし、ステルス技術もらえるし。それに、タイフーンにしたらアードアの悲劇が再来しちゃうわよ。」

うーん。そこが痛いところなんだよね。

因みにネタばれするけどこっちはやっぱり大変なことになるよ。

尾咲「もうこっちで欧州機がこれから選ばれる可能性はゼロになったわね。」

まあ、報復にちょっとやらかしますけど。

それにしてもEF-2000にすればいいのになあ。

尾咲「そんな事言っても仕方ないわよ。決めるのはあなたじゃなくて私たちなんだから。」

第一次F—Xのようなどんでん返しが起こってタイフーンになれば・
・・・。

尾咲「今の政府にそんなことできるわけ無いじゃない。」

まあ、そうですね。それでは、次回にご期待ください。

第三十三話「撃破」(前書き)

やっと金正日が死んだか……。

今日のゲストは久々に本編に登場。吉月明さんです。

「よっしゃあ！。やっと登場できた！。

にしても後継者はどういふことをするんだろうか？。」

現状では金正恩反対派が粛清されてますね。おお、こわいこわい。

「いったいどういふことをしでかすんだか。

日本に向けてミサイルを撃つか、韓国に進撃か。」

どっちもビミョーですね。自分としては工作員が気になります。

まったく、来年は人権侵害救済法案について審議するようですが、そんなことしている暇があれば災害復興法やスパイ防止法とかを施行しろって話です。

大体人権侵害救済法案が可決されれば人権救済の名の下に言論弾圧を行われますよ。

ネットで政治の素朴な疑問や意見はアウト。

国旗掲揚、国歌斉唱もアウト。

外国人の批判もアウト。

日本人、または主人公が外国人を倒したり、ふざけて罵倒する描写がある小説もアウト。あたり障りの無いものしか作れません。

疑問に思う人が居るかもしれませんが、差別の定義は人それぞれなんですよ……。

だから—————

「これは長くなりそう。第三十三話「撃破」どうぞ。」

第三十三話「撃破」

八月二十日

午前十一時五十二分

国後島

陸上自衛軍

＞町田耕哉陸士長＜

90式戦車。日本の国産第三世代戦車。冷戦時に上陸したソ連軍機
甲化部隊の大量のT-80による無停止前進をいかに食い止めるか。
スチームローラー

当時の陸上自衛隊が出した答えでもある。
そしてその砲撃は大抵のものを打ち抜くことが出来、自動装填装置
により、速射性も高い。

竹三番――――90式戦車のコールサイン――――
――から援護を受け、現在シベリア軍の拠点の町を攻撃している。

『竹三番。砲撃する！。』

戦車からの無線を聞き、耳をふさぐ。

数秒後、とんでもない爆音が右前から聞こえた。耳鳴りが俺を襲う。
だが、爆音を出すだけあって、敵が立てこもっていた建物が崩壊し
た。

町田「全く、すごい威力だな。」

崩壊した建物を見ながらてき弾をはめて撃つ。
戦車にRPGを撃とうとした敵兵が吹き飛ぶ。

竹三番『ナイスカバーだ、町田。』

戦車から、無線が聞こえる。この戦車長。実は室蘭であつたあの戦車長だったりする。

が、今はそんなこと関係ないので細かいところは省略。

さあ、俺達の盾になり進撃をしよう！。

竹三番『あゝ俺たちはここで君達が前方を確保するまで進めない。
スマン』

竹三番え……。

交戦距離の短い市街地戦では、取り回しの悪い戦車は携帯対戦車兵器のいいのだ

いちいち歩兵が援護しなければいけないのは非常にめんどくさい。

文句を言いながら山崎が90式戦車の砲塔をはたいている。

町田「さっさと終わらすぞ。」

手始めに前方の建物を確保するため、行動を開始する。

ドアを蹴破り内部に突入する。一階は水城、二階は俺達、三階は冬野が制圧することになった。

先頭を走り階段を駆け足で登り踊り場に出る。
そして曲がった瞬間顔面に強い衝撃と痛みが。
転倒した拍子に前が見える。そこには銃を突きつけたシベリア兵が
今まさに発砲した

―――――ところで銃口が曲がり銃弾はあらぬ方
向に行きシベリア兵は倒れた。

山崎「おい、班長がそんなんじゃ示しがつかないぞ」

町田「助かった。」

9mm拳銃を構える山崎の左手をつかみ立ち上がる。二階に上がった後、廊下の様子を伺う。
いきなり銃撃を受けた。とっさに横に転がるも銃弾がかすめる。

町田「ぐっ。」

山崎「町田!?!」

町田「いや、大丈夫だ。防弾チョッキで助かった。」

かすった箇所を見せて、怪我を負っていないことをアピールする。
後ろで心配そうにしていた田中たちもほっとしている。

町田「田中、攻撃手榴弾を投げろ。」

田中が攻撃手榴弾（爆風だけで敵を殺傷する手榴弾）を取り出し廊下に投げ、爆発。直後に突入し、シベリア兵を仕留める。
そして二回の制圧に乗り出す。

「ウーーーーー！。」

ドアからシベリア兵が飛び出て弓川に飛び掛った。体格差により弓川が押されている。
すかさずナイフを取り出しシベリア兵の首にさす。
生々しい感触が手に残る。

弓川「た、助かった。」

町田「おい。ここに突入するぞ。」

弓川を起こし、突入するドアのそばに駆け寄る。
ドアを少し開け田中の攻撃手榴弾を投げ込む。爆発後突入。
二階制圧に割り振られた他の班も次々と部屋に突入。制圧している。

この動作を繰り返し二階を徐々に制圧する。
そして、最後の部屋へ突入。部屋に居たシベリア兵を掃討する。

掃討し終え一服しようとしたそのとき。

パンツ！

弓川「がっ！？。」

町田「弓川！？。」

弓川が腕を押さえ倒れた。部屋を見渡せばまだシベリア兵の一人が生きていて拳銃を構えていた。すぐに射殺し弓川の応急処置を行う。

弓川「す、すいません。」

町田「気にするな。」

傷口を思いっきり縛り上げる。窓からキャタピラの音が聞こえる。この部屋は90式戦車が止まっているところからは裏手にある。窓を覗くとそこにはT-80がこの建物に砲身を――――

町田「伏せろー！ー！。」

猛烈な振動が部屋を襲い、転倒する。
9mm拳銃が腰に食い込んでイテエ……。

町田「全員無事だな?。」

皆野無事を確認するが誰も怪我はしていない。

………そういえば一階はどうなっている?。

町田「水城二曹。無事ですか!?」

水城『くそっ、こちらは負傷者多数で動けん。破壊できるか?。』

西本「だめだ。バックブラストに巻き込まれる。」

『こちら竹三番。さっきの砲撃が命中して自動装填装置が使えん。』

338

………最悪だ。対戦車兵器は駄目。戦車砲は駄目。そして、下の買いの部隊がピンチと来た。

不味い不味い不味い不味い不味い不味い。

頭を必死に回転させ、打開策を考える。

日野『機関銃撃ってきやがった!。』

様々な対処法が頭に浮かんでは消える。

無反動砲の弾を投げて弾を撃ち抜きキャタピラを破壊?。

キャタピラだけ破壊しても攻撃は止まらない。

飛び降りて戦車に肉薄攻撃?。

周囲の敵兵に撃たれアウト。

消火器を投げつけて視界を妨げ時間稼ぎ？。

消火器自体が重すぎて戦車まで届かない……………

屋上から攻撃して撃破？。

俺達的位置から屋上に言っても時間がかかる。

そう。俺達的位置からは……………

町田「冬野曹長。あのT－80を撃破出来ますか？。」

冬野『とつくに移動してるよ。』

上からかすかに発射音が聞こえ窓の外をミサイルが通過。
直後下で爆発が起こる。

冬野『T－80を撃破したぞ。』

水城『スマン。今度なんかおこってやる。』

とりあえず、一階に降りて負傷者の救護に回ろうとした時に本部から無線連絡が来た。

『こちらC P。各員、作戦を中止し、現状維持のまま待機。繰り返す、現状維持のまま待機。』

同時刻

東京

地下司令部

内閣

＞霧本雄一郎官房長官＜

麻生「作戦中止命令は出回ったな？」

三山「はっ。すでに戦闘行動を止めている舞台もいるそうです。」

麻生「そうか。」

ほんとに良かった。シベリア共和国が陥落してほんと良かった。シベリアとのゲリラ戦で予想より戦闘が長引いて、厭戦気分が出てきたからな。

それに費用がドンドン増えていたし。

ウィンストン「しかし、IMIJも短期間でよくここまでの水準にこれましたね。」

霧本「まあ、ネットで得た国民の妄想を下に作られましたからね。」

阿部「国民ではなく、オタクでは？。まあ、国民でもありますが・・・。」

小泉「しかし、ネットと言うものは恐ろしいですね。」

全員どこか明るくなった感じで会話している。

これからは大規模な戦闘が起きることは無い。そう考えるとこういう雰囲気になる理由も自ずと見えてくるもの。

前沢「しかし、これで我々の役割も終わりですな。」

ウィンストン「ええ。同盟国としても今回のことは非常に喜ばしいです。」

北見「交渉頑張って下さい。」

ウィンストン中将、北見統合幕僚長、前沢海上幕僚長がうれしそうに言う。

霧本「松元外務大臣。戦後交渉がんばりましょう。」

松元「もちろんだ。」

しかし、ロシアとの戦後処理交渉が残っている。この交渉で以下に利益を取れるか……。

これが現状で最も大切なことになっている。

小泉「とりあえず、記者会見を開きましょう。」

麻生「そうだな。各マスメディア、動画投稿サイトに連絡してくれ。」

と言うわけで、今日の会議は終了となった。最もすぐに記者会見があるが。

それにしても最近の日シ事変の影響で帰りが遅い。

一時とかはざらだ。ああ。早く平時に戻って欲しい。

「あー霧本さん。昼食食べます?。」

記者会見場に向かう車のに乗ると

吉月がビニール袋から愛妻弁当を取り出す。

霧本「もちろん。」

弁当についている端を取り出し予定を聞きながら食べるとする。
今日はとんかつか。

吉月「これからの予定は一旦準備をしに官邸までに戻った後、一時
までに記者会見場に向かい記者会見を行います。
その後は—————」

とんかつを頬張りながら吉月の言葉を聞く。やっぱりまだまだ平時
の体制にはならないな。

そんなことを考えながら、弁当を完食し記者会見場へ向かった。

第三十三話「撃破」(後書き)

外国の人間が「この教科書を使い」って提示して、それを断ったりしても人権侵害。

自分の店で問題ばかり起こすから来店しないで、と言っても人権侵害。

金日成の像を建てろといわれて、断ったら人権侵害。

初詣したら宗教的に人権侵害なんてこともありえます。

これ以上上げたらきりがありませんのでここまでにしておきます。

吉月「なんと言う人権弾圧。こっちではこういうのが閣議に上がることはほぼなくなっているのに・・・」

自分で作った世界ですが、うらやましい。

「これ可決されたら、作者の書いている小説が消滅するね。ついでに他の作者様のやつも・・・。」

なんか、長々と小説に関係の無いことばかり書いてしまいましたね。とりあえず、自分に関係ないと思っている人には

「彼らが最初共産主義を攻撃した時」を読むことを薦めます。

ついでに、活動報告にこの法案に関係するページのリンクを載せときます。

良かったら見てください。

それでは、次回にご期待ください。

第三十四話「慰霊」(前書き)

諸君、私は最初に言っておこう。今年最後のゲストは全サイドの主人公とヒロインです。それでは、ミュージックスタート！。
テーレッテー。テテテトット、テテテテッテ〜♪

鷺田「最近頻繁に登場している気が……。」

尾咲「まあ、この翔で私たちの出番はほとんど無かったし。」

町田「俺たちは初めての登場だな。」

神楽「初めての登場がこういうのだと何か緊張しますね。」

清水「それにしても何で北斗の○?。」

天白「伏字の意味が無いわね。」

霧本(以降、雄一郎と記載)「陽子はここに出るのは初めてだったな。」

陽子「そうね。まあ、楽しみましょう。」

今年最後の投稿ですから、こんなに呼んでみました。

……ほんとは、もう二つほど話を今年中に同時投稿するつもりでしたが、書き終わりませんでした。

鷺田「まあ、バイトをしているからな。仕方ない。」

ええ。そういつてもらえると助かります。
ついでに言うとか神楽さん、天白さん。ヒロインらしいこと書けなくてすいません。

神楽「いいえ。全然問題ないですよ。」

天白「でも、来年は書きなさいよ。」

善処します。

町田「にしても、サブタイトルと、前書きの温度差が激しいな。」

清水「それには同意する。」

うん。ちょっとミスったかも。それでは、本編どうぞ！。

陽子「フフフフフフ。」

雄一郎「陽子？。」

第三十四話「慰霊」

八月二十五日

東京、武道館　日シ事変戦死者慰霊式典会場
十一時四十八分

＞霧本雄一郎官房長官＜

武道館の空気は悲しい雰囲気に包まれている
日章旗の下に献花をする人が並んでいる。

すすり泣く人も居る。

残された遺族だ。

いや、遺族だけじゃない。自衛官や海上保安間も泣いている人が居る。根室港の住人もここには居ないが、恐らくこの式典を見ているだろう。

こういうものを見ると自分達の選択が正しかったか疑問に思うものだ。

だが、選択し、行動し、結果を残した。いまさら行ったことを公開するわけには行かない。

しかし、今回の事は深く刻まれるだろう。

何せ、七十年間平和の中に暮らしていたのだ。この傷は果てしなく深い。

さて、この日シ事変の被害だが、

航空自衛軍

根室分屯基地が全損。網走、稚内両分屯基地は損害はあるが、時間をかければ再び稼働できる。
しかし、死傷者が結構出ている。

戦闘機の損害は

F-2二機、F-4八機、F-15四機、UH-60J一機、U-125二機。

人員は八十三名戦死、三十二名負傷。

陸上自衛軍

稚内、礼文分屯地が全損、標津分屯地、美幌駐屯地は時間をかければ復興できなくはない。

74式戦車 二十四両 90式戦車六両 10式戦車一両。うち74式戦車八両、90式戦車四両、10式戦車は修復すれば運用可能。その他戦車以外のAFV、合計二百五十両。うち百三十九両が修復することで使用可能。

人員は九百三十二名

海上自衛軍

稚内分屯基地が全損

まきなみ、りゅうじょうが中破、きりさめ、ありあけ小破。ミサイル艇が二隻中破。三隻撃沈。

幸い、被害はよりより少なかった。

撃沈艦が二隻以上出ると思ったが……。

それと、冷夏の桜作戦時に、特殊警備隊員二名が死亡した。

戦死四百二十八名 負傷者十六名

海上保安庁は

巡視艇、巡視船合わせて二十六隻が沈没。

全て第一管区の船だ。しばらくは他の管区の巡視船や巡視艇を動員しなければならぬだろう。

人員は

戦死三百四十二名 負傷、四百二名。

日シ事変の原因となった栄漁船団の犠牲者は三十一名。

漁船も三隻の内二隻が沈没。もう一隻も中は判定を受けて、現在修理中だ。

上陸された時の被害は民間人に三十六名の犠牲者が出ている。

と、こんな感じだ。

これは次の防衛大綱はこの事変が強く反映される。

もし、日本が再び戦闘になっても死傷者が減らせるようになる・・・。

同時刻

靖国神社

陸上自衛軍

＞町田耕哉陸士長く

「総員、捧げ銃！」

中隊長の号令を聞き、捧げ銃を行い、戦死者の冥福を祈る。

この戦いで俺がよく会話するやつからは死んだ奴はいなかったものの怪我が原因で辞めるやつが結構出てきた。

南や結城陸曹長もその中に入っている。

南は銃弾が骨を傷つけ、自衛官としての任務が出来なくなり退職することになり、

結城陸曹長は盲貫銃創で背骨に銃弾が残っており取り出そうにも下手に取り出せば間違いない

大変なことになるらしい。

さらに激しい運動は危険で自衛官としての職務は全うできないと判断され退職することになった。

結城陸曹長の後釜には水城一等陸曹が着いた。
俺の班の通信兵は、しばらくは山崎が担当することとなる。

「捧げ銃、やめ！」

捧げ銃をやめ、戦死者に黙祷する。

来世では、戦争に巻き込まれないようなところに生まれろよ。

同時刻

自衛隊病院

海上自衛軍

＞清水良助一等海士＜

「はあ。あの説教も聴けなくなるのか……。」

「そうだね。」

病院で別途に寝ながらテレビで式典を見ながら喋る。

海木海曹長の死からは立ち直ったが、やはり、どうしても喪失感が大きい。

「天白も寂しいとか思ってるのかな。」

「さあな。ところでこっちが被弾した後どうした？」

「確か、暫く哨戒活動をしてりゅうじょうに着艦したらしいよ。」

天白から聞いた被弾した後のまきなみの様子を清水に語る。
テレビから音声が聞こえる。

「黙祷。」

この声を聞いて、黙祷。まきなみの乗員の冥福を祈る。
もちろん、この戦争で死んだ人たちも祈る。
それにしても色々と寂しくなるな……。

同時刻

那覇基地

航空自衛軍

＞鷺田雄大三等空曹＜

「黙祷」

テレビからの声を聞き黙祷。

一分間の黙祷の後、スクランブル待機に向かう。

今回の事変は俺たちは最後まで関わらなかったが、空守の知り合い
がこの事変に参加している。

空守曰く「まだ無事を確認していないが、二人ともタフで――――」

——とくに陸自に所属しているやつは運が人より高めなので多分無事だと思う。」

との事。

しかし、知り合いに二人も自衛官であることは早々無い。

この県が落ち着いたら、会いに行こうと思う。

尾咲「にしても、日本が実戦を経験するなんてね。」

スクランブル待機の途中に読書をしていた尾咲が顔を上げて呟いた。
まあ、確かに俺もそうは思っていた。

それに、実戦を経験したと言っても———こう言っちゃ何だが実感がわからない。

戦場は北海道。ここは沖縄。しかも、現在は徐々に仮想敵国が中国や韓国等に移っているので、
南西方面からは兵力は徴用されていない。

鷲田「そうですね。まあ、俺たちは俺達の任務を達成するだけです。」

尾咲「あら？。冷たいわね。」

………実は言葉が思いつかなかっただけだったりする。

尾咲「でも、もしもの有事になったら守ってね。」

鷺田「それにしても、今日は来ませんね。」

尾咲「あら、スルーされた?。」

けど、確かに。普段ならとつくに空の上に居るはずなんでけど。」

話をそらし、会話を別の話題にする。

シベリアとの戦いが起きているときは、かなりの頻度で中国軍機が防空識別圏内に接近していたわけだが、今日はほとんど来ない。首をかしげている。

だが、噂をすれば何とやら。サイレンが鳴った。

瞬間、走り出す。

そして、F-15に乗りハンガーから出て、滑走路から飛び立ち、指定の高度まで向かう。

鷺田「噂をすれば何とやらとはまさにこのことだな。」

管制「ハウスよりカフー。ボギーは当基地から三一二四の方位。直ちに向かえ。」

尾咲「了解。さあ、いくわよ。」

真昼の空を二機の鷺が飛んでいく。

俺たちはこの事変の最中はずっとスクランブル任務に明け暮れていた。

まあ、これからも続けばいいんだがな……。

さて、今日も歓迎しましょうかね。

第三十四話「慰霊」（後書き）

町田「何か、いつもと順番が違うな。」

日常への復帰をイメージしましたから。

鷺田「確かに日常はいいが・・・」

尾咲「あんな日常はお断りよ。毎日、中国軍が飛んでくるもの。任務だから仕方ないけど。」

「こっちの哨戒任務もきついぞ。毎日景色の変わらない海、海、海。しかもある種の閉鎖空間だから精神的に来る。」

「それに着艦も結構難しいわよ。艦が動いているし・・・。」

ほんとにお疲れ様です。リアルで現職の自衛官や予備自衛官や自衛隊に入る人、来年頑張ってください。

雄一郎「おい。こっちもがんばっているぞ。」

あ、すいません。何分、内閣がアレなんで・・・。

神楽「まあ、頑張ってください。」

巨乳美人の応援来たwww。これで勝つるwww。

町田「何に勝つつもりだ」

それでは、締め挨拶に行こうと思います。
来年も、極東戦記を――

「「「「「よろしくおねがいします!」。」「」「」

「ところで、作者さん。」

はい?。何ですか陽子さん?。

「私の出番が全くなかったのは何故?。」

・・・・・・あ。

雄一郎「やっちゃったな・・・・。」

「フフフフフフフフフフ（凶笑）。」

ごめんなsgum・・・・・・（これは280mlのペットボトル?
それに、内容物が半分。なんでこんなもnくあwsedrftgyふ
じこlp座qxswcでvfrbgthymじゅきおp!?!?・・・・

「「「作者あーーーーー!」」」

雄一郎「ちょ、何飲ませた!?!?。」

陽子「ハイポーションを濃縮したものを……………」

雄一郎「はぁ?。」

町田「な、なんていうものを……………。ニコニコ動画で作られたアレを飲ませるとは……………。鬼畜すぎる。おい、トイレまで連れてくぞ。雄一郎さん。肩もって。」

雄一郎「わかった。」

神楽「もしもし!。山崎さんですか!?。衛生兵を!。」

町田「救急車呼べよ!。」

天白「ハイポーションって知ってる?。」

清水「確か、摂取した人によると、大量に飲むと嘔吐が止まらなくなって四回目ぐらいから胃液が出まくって————」

尾咲「もはや、收拾がつかなくなったわね……………」

鷺田「とりあえず、良い子のみんなはハイポーションを絶対に作るな。」

後悔する羽目になるぞ。お、作者が動き出した。顔から生気を失っているが……………」

う、うう。それでは、次回にご期……………たいくださ……………い……………
……………ヤバイ、吐く。

「「え?。」」

n
i
c
e

b
o
a
t.
.

落ちがこれですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4037s/>

極東戦記

2011年12月31日19時46分発行